



文部科学省
国立教育政策研究所

全国学力・学習状況調査の
結果の二次分析に関する研究
報告書 別冊

〔 全国学力・学習状況調査において
特徴ある結果を示した学校における取組事例集 第3集 〕

平成29年 3月

はじめに

全国学力・学習状況調査は、平成 19 年度に始まり、29 年度で実施 10 回を数えます。この間、調査結果を用いた様々な分析や授業改善が行われてきました。

国立教育政策研究所教育課程研究センターにおいても、プロジェクト研究として「全国学力・学習状況調査の結果の二次分析に関する研究」を平成 27、28 年度に行いました。研究内容の詳細については、報告書にまとめております。本研究の柱の一つとして、調査結果の活用に関する研究に取り組みました。これまでに得られた多くの調査結果をもう一度見直して、各教科の問題ごとの正答率や児童生徒質問紙の回答状況を指標として、複数年度にわたって一定の成果を出している学校を選定し、実際に訪問しました。そして、なぜそのような成果を出すに至ったのか、実際の学校の取組を伺うことができました。本冊子は、その内容をまとめた事例集です。報告書第 2 章第 3 節にまとめているような、学力の向上や学習状況の改善・充実のための示唆を得ることができたと考えています。例えば、家庭や地域の協力を得ながら、一緒になって児童生徒の成長を粘り強く評価して後押ししていたり、児童生徒のつまずきを丁寧に把握して、スモールステップを設けて分かるようになるまで指導し続けたりしていることがありました。また、教育委員会や地域の人材等、外的な支援を有効活用している学校もありました。しかし、今回訪問した学校の多くは、はじめから成果を出していたのではなく、むしろ当初は様々な課題を抱えていたということがありました。そのときに、中核となる教師が学校の置かれている現実を直視し、改善方策を検討して、職員全員で試行錯誤をくり返しなが、徹底して同じ方向を向いて取り組み続けている姿がありました。各教科の結果だけでなく、質問紙調査の結果にも注目し、その回答状況の改善を目指していく取り組みをぶれること無く職員全員で進めていました。PDCA サイクルがきちんと構築されていることが見て取れました。本冊子にはそのような事例を多く収録することができました。ぜひ、各学校や教育委員会において有効活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本冊子の作成にあたり、訪問させていただいた各学校や教育委員会に深く感謝を申し上げます。

なお、本冊子は、既刊の「全国学力・学習状況調査において特徴ある結果を示した学校における取組事例集」の第 3 集目でもありますことを申し添えます。

平成 29 年 3 月

研究代表者 梅澤 敦

(国立教育政策研究所 教育課程研究センター長)

目 次

各学校を示すアルファベットは報告書と統一している

第1部

平成27年度訪問校

A小学校	2
------	---

就学援助率の高い小学校において低学力の児童を減少させた取組例

B小学校	7
------	---

S-P表による誤答分析で低学力層を減少させた取組例

C小学校	13
------	----

国語の学力を飛躍的に伸ばした取組例

E小学校	17
------	----

国語と算数のアイテムを活用させ、特定の課題を解決させた取組例

A中学校	24
------	----

話し合い活動の充実で、国語Aの学力を向上させた取組例

B中学校	32
------	----

話し合い活動の充実で、国語Aの学力を向上させた取組例

第2部

平成28年度訪問校（平成27年度に続いて訪問した学校を含む）

D小学校	38
------	----

校長のリーダーシップの下、少人数指導や根拠・わけを伝える学び合いの授業に取り組むことで、全国学力・学習状況調査の正答率を飛躍的に向上させた取組例

F小学校	49
------	----

学校全体で特別支援教育の考えを生かした「わかりやすい」学びの場を設定することで、基礎学力と自分の考えを的確に表現する力を向上させたと考えられる取組例

G小学校	59
「そろえる指導」, 「つなげる指導」で学力向上に取り組んだ取組例	
H小学校	68
「傾聴作文」によって, 児童の聴く力を伸ばし数直線図の系統的な活用等で, 割合の理解を促す取組例	
I小学校	76
児童の姿を見届けて評価する取組が学習規範の形成に寄与し, 複数の資料を比較・検討する活動が自分の考えを明確にすることの基盤となっていると考えられる取組例	
J小学校	83
読書活動や, 数量の関係を表す図の指導によって, 下位層の児童割合が減少し, 割合の正答率が上がった取組例	
K小学校	92
教師集団の意思統一を図り, 地域や保護者とともに様々な取り組みを継続することで, 自己肯定感を高めていった取組例	
L小学校	102
「スキルタイム」や地域との関わりで児童の基礎学力を高め, 自信をもたせた取組例	
C中学校	112
全国学力・学習状況調査に関する詳細な結果分析と補充学習や家庭学習などによる基礎基本の定着を目指した取組によって, 学校全体の学力を維持向上させた取組例	
D中学校	123
国語の総合的な学力形成を基盤にしながらすべての平均正答率を向上させた取組例	

E 中学校・・ 132

国語の「根拠を明確にして自分の考えを具体的に書く」問題の正答率が高く、質問紙「考えの理由が分かるように気を付けて書いている」について、肯定的な回答の割合が高い例

F 中学校・・ 141

多様な生徒の実態に応じた計画的な学力向上の取組を行うとともに、総合的な学習の時間の充実によって、生徒の学力や学習活動に好循環をもたらしたと考えられる取組例

G 中学校・・ 149

教員同士が授業を見合い、高めあう風土のある授業改善や、生徒の学習の振り返りを重視した取組例

H 中学校・・ 154

すべての教員が結果責任としての生徒の成長を支えつつ、数学科を中心とした課題発見・解決学習の追求を通じて、数学的に説明しきる力を向上させたと考えられる取組例

I 中学校・・ 165

互いを認め合う人間関係作りをねらい、授業を「楽しく」進めることで、国語の授業がよく分かる生徒の割合を向上させた取組例

J 中学校・・ 174

生徒のよさを認める指導を重視することで、自己肯定感の向上をより促進させていると考えられる取組例

第 1 部

平成27年度 訪問校

A小学校

就学援助率の高い小学校において低学力の児童を減少させた取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

A小学校は、ある地方都市の東側に位置し、創立44年目を迎える小学校である。県営住宅や市営住宅に囲まれた、必ずしも経済的に豊かな地域ではないが、給食費の滞納はない。保護者の大部分は会社員であり、地域・保護者ともに大変協力的である。

就学援助率は年々高くなっており、平成27年度に30%を超えた。1学年3学級と特別支援学級2学級の計20学級の大半は指導力の高いベテランの教員で占められ、全体的に落ち着いている。平成23年度から、算数を研究教科として校内研修に取り組んでおり、平成25年度には、地域の算数・数学教育研究大会の会場校として授業公開を行ってきた。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

平成27年度の結果をみると、それぞれの教科が全国平均正答率と比べ9ポイントから17ポイント上回っている。国語A・Bと算数A・Bの平均正答率を単純に合計した数値も、全国の上位に位置する。一方、就学援助率が30%を超える学校のうち、算数Aの下位層(C・D層)の割合が最も少ない(23.5%)。国語Aにも同様な傾向が見られ、下位層(C・D層)の割合が全国で4番目に少ない(17.7%)。

平成19年度からの結果の推移を見ると、これまでも比較的安定して高い水準である。ただ、平成26年度と比較すると、国語A・BのC・D層の割合は、国語A(42.8%→17.7%)国語B(30.4%→15.3%)と変化している。また、算数BのD層が減少(18.1%→5.1%)していることも注目される。高水準にありながら、さらに低学力層がここ数年で減少していることが特徴として挙げられる。

2 取組の背景

一見すると落ち着いている学校であるが、かつては荒れていた時期もあったと、校長が話していた。確かに学力調査の結果をみると、3年前の平均正答率は全国平均正答率より高いものの、現在の水準と比較するとずいぶん低い。

この状況から、校長は、様々な個別の問題が発生した際、校長や教頭が先頭に立ち解決していくことを決めた。校長自らが家庭訪問し、当事者と話し合い、解決の糸口を模索していく。そうすることによって、保護者と学校とが信頼関係で

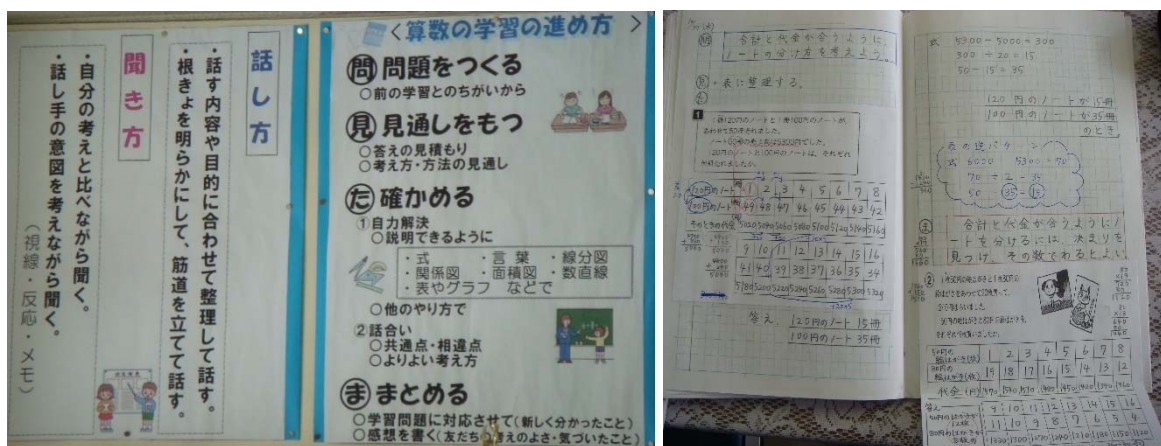
構築されていく。同時に担任は、全体指導や教科の指導に専念できる環境を手に入れることができるのである。

3 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) 「も→み→た→ま」の流れを基盤とした授業過程とノート作り

A小学校では、どの教員が担任を受け持っても、授業の進め方の基本的なところが統一されている。その代表的なことが、以下の授業過程である。

「問」(も) ……学習問題を作る、もしくは学習課題を知ること。
「見」(み) ……解決の見通しを持つこと。
「確」(た) ……実際に解決させ、その解決の方法を様々な方法で説明すること。次に、複数の考え方を比較・検討し、自分の考えを確かめること。
「ま」 ……自分なりの言葉でまとめること。友達の考えを書くこと。



学び方の定着を第一に考え、授業過程は、そのままノートの書き方にも反映されていく様子が見られた。ノートをきちんと書いていくことは、特に、低位の児童の学びの手立てともなってきた。過去の学習の振り返りの効果を高める意図もある。

(2) 「職員室組」による担任の負担軽減

保護者との生徒指導上の対応は、担任が直接的に行うことはなく、職員室組(校長や教頭、教務)と呼ばれる管理職を中心としたスタッフが行う。そうすることで、学級担任の負担が軽減され、児童の学習指導等に専念できるようになっている。

4 学力の向上や、学習状況の改善を支える学校づくり

校長は「温かさと活気に満ちた学校」を目指している。児童により良い教育をするためには、まず職員の健康と和が大切であると考えている。明るい職員室の

雰囲気を作ることで、学年を超えた意見交換ができ、精神的なゆとりを作ること
で、児童により向き合える環境となってきた。

TT(ティーム・ティーチング)として、担任外の教員が4名配置されている。
6年生も、算数と理科においてTTが進められている。二人の役割が固定するこ
とはなく、T1が机間指導しているときにT2が板書をするなど、授業時間も有
効に使われ、T1とT2の連携がうまく取れている印象を受けた。

5 授業を参観して

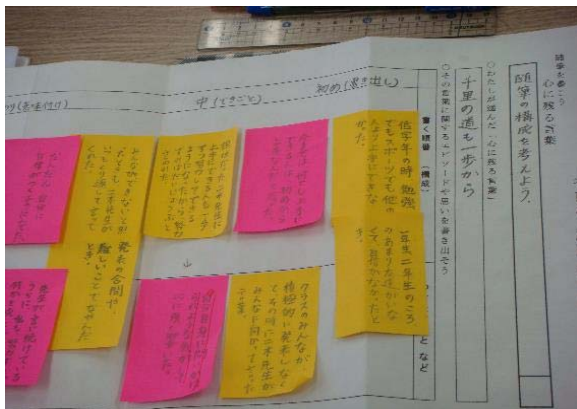
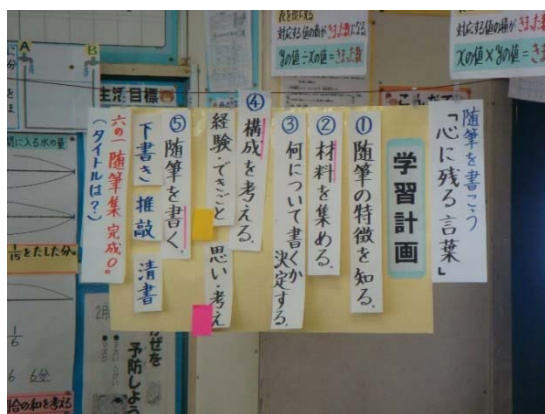
<6年国語「随筆を書こう」>

(1) 授業概要

自分にとって心に残る言葉を基に、
随筆を書く単元である。

本時は、4時間目の構成を考える
場面である。集めた材料から個々に
書きたい内容を付箋に記し、書く順
番ごとに並べていく。その後グルー
プで検討し合う場面であった。

(2) 児童の姿



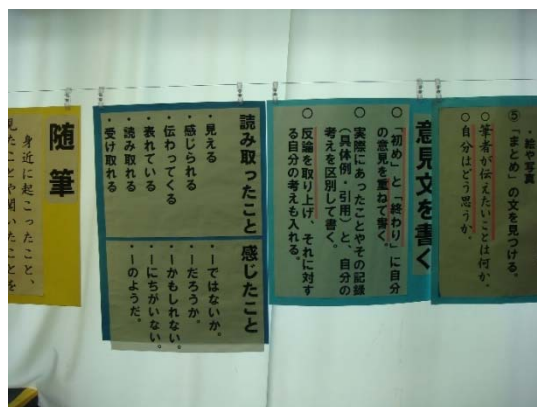
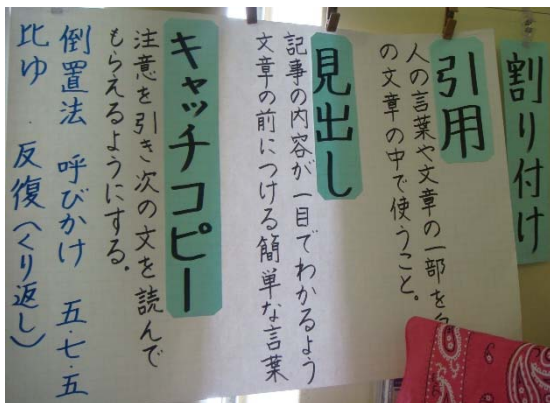
個々で考えている構成の内容をまずは発表し、その後、他の児童から意見を
もらう。どの班においても、友達の発言を静かに聞き取り、アドバイスする姿
が目立った。

(3) 授業者のかかわり

学習の進め方を示した後は、各班に回って、「言葉との出会い」「心に残る理
由」「今の自分と言葉との関係」の三点にしばり、児童の発言に寄り添いな
がら助言していた。

(4) 学力・学習状況の改善との関連

教室の壁面には、下記のような掲示物が貼られ常に活用されている。



<6年算数「割合を使って」>

(1) 授業概要

全体の面積から、その $\frac{2}{5}$ を求め、さらにその $\frac{1}{10}$ を求めていく問題である。問題を読み取り、適切な図に表したうえで、問題解決していく授業である。

(2) 児童の姿

授業冒頭で、問題文が書かれた小さなプリントが配られ、素早くスティックのりでノートに貼っていた。話合いの時間を十分にとるために、あえて課題を書かせる時間をとらず、毎時間ノートに貼らせている。



問題解決に必須の関係図の書き方などは、すべての児童ができていた。

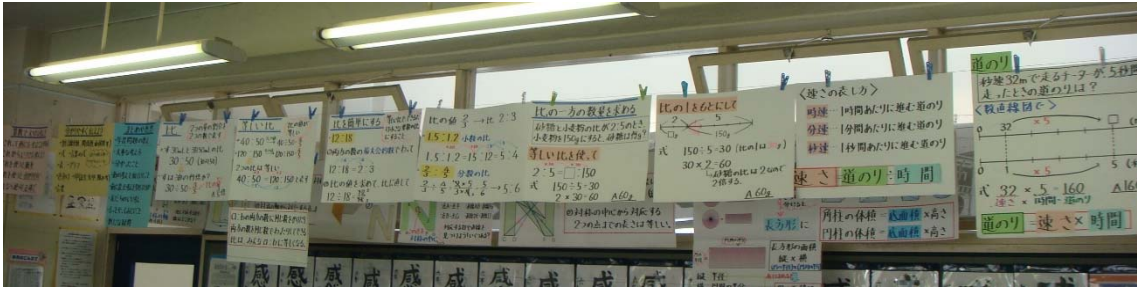
「た」(確かめ)の場面では、二人の児童がそれぞれの異なる解き方を、小さなホワイトボードに書いて、説明する場面が見られた。解き方それぞれについて、自分なりのタイトルをつけている。上の写真では、「広場の面積から砂場の面積を求めて」というネーミングをしている。自分の解き方のポイントを、必ず言語化させている。

(3) 授業者のかかわり

児童の発言に対して、必ず問い返すことをしている。この積み重ねによって、児童は、相手に対して分かりやすく話そうとしたり、根拠を持った話をしようとしたりする。また、他者の意見を大切にすると話合いに主眼を置いているので、自分にとって納得できない意見が出ても、まずは「わかりました」とみんなで答えるようにするなど、多様な意見を促す雰囲気は自然に作られていた。

(4) 学力・学習状況の改善との関連

下記は、教室側面である。毎時間の学習の跡が、確実に残されている。



6 その他の特色ある取組

校内研修の中心は、授業の進め方、児童の考えをクラスで共有する方法などである。ポイントを絞り、教員間での共有・共通理解を心がけている様子が見られた。

B小学校

S-P 表による誤答分析で低学力層を減少させた取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

開校 50 周年を迎えた小学校である。就学援助率が平成 20 年度以降大きく変わらず、本調査の質問紙調査では常に就学援助率は「30～50%」と回答している。

B小学校では、平成 23 年度からの2年間『フロンティアスクール』の指定を受け、学力定着に向け、教育委員会と一体となって推進してきた。

校内は 12 学級の担任のうち、本校が初任校である教員が5名を占めるほど、若手教員の割合が高い。このことは、学校内で授業方法等のスキルの直接指導を、ベテラン教員から受けにくい状況になっていることを意味する。なお 50 代の教員は、二人在籍するうち一人が休職中である。

調査を受けた6年生児童は 56 名、2学級であり、算数の授業は3クラスの少人数に分かれて行われている。その際、少人数算数を担当しているのは、校内で主幹を務めるミドルリーダーである。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

平成 27 年度、就学援助率が 30%を超えた全国の小学校のうち、国語と算数のA問題において、正答数によって児童を4層に分けたときの下位層(C層とD層)に当たる児童数の割合に着目した。B小学校は、国語AではC層とD層を合わせた割合が 16.1%(前年 20%)で、全国で2番目に少なく、算数AではC層とD層を合わせた割合が 25%(前年 15%)で、こちらも全国で2番目に少ない。また、就学援助を受けている家庭の児童のうち、国語Aと算数AについてA層又はB層であった児童が一定数いたことが推察される。さらには、算数AのD層が、わずか 1.8%(前年 4%)であり、こちらは全国で最も少ない。低学力層の割合が、年々少なくなっていることがわかる。

平成 19 年度からの本調査における結果の推移を見ると、平成 19 年度からの3か年の正答率平均は、国語Aで全国平均に対してマイナス 3.4 ポイントであったが、平成 26 年度には全国平均に対してプラス 3.1 ポイント、平成 27 年度には全国平均に対してプラス 11.2 ポイントにまで高まった。同様に国語Bの正答率は全国平均に対してマイナス 1.7 ポイントであったが、平成 26 年には全国平均に対してプラス 0.7 ポイント、平成 27 年には全国平均に対してプラス 13.4 ポイントにまで飛躍的に高まっている。さらには、算数Aの正答率は全国平均に対してマイナス 1.2 ポイントであったが、平成

26年には全国平均に対してプラス0.3ポイント、平成27年には全国平均に対してプラス11.3ポイントにまで高まり、算数Bの正答率は全国平均に対してマイナス2.1ポイントであったが、平成26年には全国平均に対してマイナス0.7ポイント、平成27年には全国平均に対してプラス8.5ポイントにまで高まってきた。これらのことから、低学力層が減っただけではなく、全体的な学力も向上していることがわかる。

2 取組の背景

校長は、現在の小学校に赴任した当時、他の地域と比べて、将来に希望を抱いている児童が極めて少ないことに愕然とした。また、普段の授業を参観するとプリント学習が目立ち、確かな学力が付いていないと感じた。家庭環境に恵まれていない現状では、学校から提供する学習がすべてであるという自覚を持って、学力向上の推進をしていく必要があると強く考えた。

勤務校の教員の意識も、校長にとっては改善すべきことのように思えた。校長の考えは、毎日の授業で狙いがほぼ達成されたと思うことが間違いであり、どんなに良い授業をしたとしても、必ず取り残される児童は出てくるという考えであった。その取り残された児童に、どうフォローしていくのかを考え、実行していくことこそ大切であると考えていた。

3 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) S-P表(小問別反応表)による分析

4月に区の学力調査があり、調査直後に自己採点を行い、担任が個々の児童の学力実態を把握し、分析できるようにしている。S-P表を作成する際は、児童の名前を表に記入するようにし、全教員による共有化を図るようにしている。かつては、個人情報保護の観点から、S-P表に個人名は載せなかった。しかし、それでは全教職員で児童の実態を共有できないことが多い。そこで、必ず児童の名前を載せることにした。児童の顔が浮かばないと、次につながる分析はできないからである。

S-P表の作成については、ICT支援員(週に一度勤務)が調査問題(民間事業者作成のもの)に付録としてついているCDを使い入力している。

(2) 学力ポートフォリオによる分析

ポートフォリオ研修会を年間3回、それぞれ3時間かけて行い、何を教えなければならないのかを自覚させ、学校の課題を共有している。

- 1回目…7月の終わり頃実施。ワークテストを使ってのポートフォリオ分析第1回目。
- 2回目…12月中旬、1週間程度かけて行う。ワークテストを使ってのポートフォリオ分析第2回目。
- 3回目…2月下旬。「つまずき検定」のための新しい指標を作成する。ワークテストを使ってのポートフォリオ分析第3回目。

研修会では、各学年で3～5事例の正答率が低かった設問を出し合い、誤答例や課題、その対策について発表し合う。研修会の資料には、当該単元の内容に関連する他学年の内容を「系統」として記載し、担当していない学年の内容との関連を全教員が理解できるようにしている。指導案を書く際は、「ポートフォリオの分析から」という項目を設定し、児童の誤答分析を生かした学習指導ができるようにしている。

(3) 教育課程の中に散りばめられた学力向上策

限られた時間を以下のように効率的に使い、学力向上に充てている。

【日常で行っていること】

① モーニングスクール(7:30-8:15)

毎週水・木曜日、早く登校した児童を対象に、学習の場を与える時間。コンピュータ室で漢字や計算のソフトを使い学習してもよいし、静かに勉強してもよい。

② ○○(学校の略称)タイム(8:20-8:37)

教育委員会で提供している「さかのぼり」ドリルを行う。20名以上在籍する保護者ボランティアが採点をすることもある。

③ すっきりタイム(毎週金曜日の5限または6限)

「つまずき検定」を受けたり、その結果を受けて担任+1名で補習を行ったりする。時には百人一首の暗唱を行う場合もある。

④ プレジデントタイム

個別指導が必要な下位層の児童に一对一で、校長室で教える。把握した個々の児童の間違うところを担当にフィードバックすることもある。このほか、2学級を4つに分け、その4番目を校長が見ることもある。

【長期休業中に行っていること】

① 夏期集中講座

「テープ図」「数直線」「表とグラフ」「作図・円」「ハイレベル講座」など、様々なテーマを設定し講座を開設する。それぞれについて冊子を作成し、学年や領域を横断した学習をさせる。基本的に希望者が対象であるが、一部の講座は担任が指名する児童に出席を呼びかけている。毎年20名程度が参加し、管理職が主に担当する。

② アフタヌーンスクール

希望する児童を対象に、パソコン室と多目的室とを開放している。パソコン室ではパソコンソフトを使い、漢字や計算の学習をする。多目的室では、宿題を行う。なおこの時間は、学生ボランティアや卒業生である中学生も担当している。

4 学力の向上や、学習状況の改善を支える学校づくり

何かしらの目標をもって頑張らせていくために、2年生以上の児童に全員、漢字検定を受検させている。その費用は、PTAの廃品回収で行っている。保護者の受検費用の負担は一切ない。

また、3年生から、漢字と計算の「さかのぼりプリント」を、教育委員会の予算で学校に購入している。いつでも、みんなで使える状態となっている。

文章を書く習慣作りのために、主に週末の宿題として日記や短作文に取り組みさせている。書くテーマを最初から考えて決めることは、児童にはなかなか難しいことである。そのため、学年ごとにテーマをあらかじめ設定し、書く機会を増やすようにしている。その際、全国学力・学習状況調査のように条件や段落を意識させたり、使用した漢字数を記録させたりしている。



左の掲示物は、算数の少人数教室の掲示板にあったものである。「おもしろ算数」と称し、興味関心のある児童に取り組みさせている。

また右側には、数の多面的な見方を鍛えることができるゲームもある。

このように楽しみながら、興味関心や思考力を高める取組が、あちらこちらに仕掛けられている。

5 授業を参観して

<6年国語「文章の要旨をとらえ、心の世界について考えよう」>

(1) 授業概要

『ぼくの世界 君の世界』という題材を読み、「感想をもとに、学習の見通しをもとう」という課題を設定した。

(2) 児童の姿

前時で児童は全文を読み、初発の感想をノートに書いた。本時は、その感想をもとに、今後の学習の見通しをもたせる場面である。感想を交流しながら、特に自分達が話し合いたいことをそれぞれで短冊に書いた。その後、短冊の内容を発表し合い、分類していた。

(3) 授業者のかかわり

短冊を黒板上で並べかえながら、児童の意見をもとに、学習計画を立てていた。

(4) 学力・学習状況の改善との関連

国語では、「読み取りトレーニング」を行っている。校長として着任した当時の児童は、問題で聞かれていることがわからない状態であった。それを解消していくため、毎週金曜5・6時間目の「すっきりタイム」を使いながら、長文読解をさせる場合もある。

<6年算数「資料の特徴を調べよう」>

(1) 授業概要

教科書の問題を、そのまま扱っている。東小屋、西小屋それぞれにとれた、にわたりの卵の重さが羅列されてあるデータを見せ、「重い卵がよく産まれたといえるのは、東小屋と西小屋のどちらの小屋ですか」という問題である。「重い卵がとれたのは東小屋（または西小屋）」と判断した根拠を様々に考え、表現させる。その過程で、平均値を考える、最大値で考える、あるいは一定の階級値を設定したうえで、その度数を比較するなど多様な考えを比較させる授業である。

(2) 児童の姿

教科書の課題部分はすべてカラーコピーされ、授業始まりに児童に配付された。授業の始まりには、すでにノートに綺麗に貼られていた。児童は、自分なりの考えをノートに記述した後、友達同士で交流し、その結果を全体に発表していた。

(3) 授業者のかかわり

児童の考えを構造的に板書する姿が見られた。

(4) 学力・学習状況の改善との関連

算数では、「作問トレーニング」を行っている。例えば、文章題を読んで2+3と答えるのではなく、その逆に、2+3になる文章題をたくさん考えさせる等、逆思考に慣れさせる取組をしていた。

6 その他の特色ある取組

本事例の背景には、B小学校の管理者である教育委員会が、学力向上策を強力に推し進めてきた経緯がある。以下、特徴的なことをまとめる。

- 教育委員会には、教育次長直轄の学力定着推進課があり、その下に学力定着推進担当係がある。
- 各学校に、自治体独自の学力調査における数値目標を設定させている。
- 教育委員会の予算で、国語や算数の復習が可能なドリルを購入している。
- 自治体独自の学力調査で正答率が50~70%程度の3・4年生を対象に、退職教員が週1時間程度、3カ月を目安に特定の児童を継続指導する「そだち指導員」が配置されるなど、自治体独自の学力向上のための取組がある。
- 学校経営支援として、校長OBが参加している。
- 自治体内に在籍する多数の若手教員のために、普段の授業水準を保つため、教科専門指導員(推進員)が週に一度学校を訪問指導する。
- 『○○(自治体名)スタンダード(小学校国語編・中学校国語編・算数数学編)』を策定している。例えば、中学校国語編では、説明的文章の指導の重点や、文学的文章の指導の重点、板書とノート指導のポイント、板書計画実例、ノートの実例等、すぐに役立つ事例が掲載されている。
- 中学1年生200名を対象とした中1夏季勉強合宿が開催されている。
- 経済的理由で塾等の学習機会の少ない中3の生徒に『○○(自治体名)はばたき塾』を開催し、民間の教育事業者を招きトップレベルの指導を行う。

C小学校

国語の学力を飛躍的に伸ばした取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

人口増加によりもともとの小学校から分離し、平成 12 年に開校した小学校である。校区は、川の氾濫による扇状地の突端の緩傾斜地帯で、北部は地下水の低い畑地、南部は灌漑水に恵まれた水田地帯である。「環境」をキーワードとして建てられた学校で、校舎内の腰壁と教室及びワークスペースの床材には木を活用し、ぬくもりとやわらかみを感じさせる仕上げを行っている。また、最上階の3階の各教室は、天井を高くして高窓を設置し、自然の採光や通風を取り入れるよう配慮されている。

学校教育目標は「進んで学び心豊かなたくましい子ども」である。「知・徳・体の調和のとれた児童の育成」、「学び方の指導を通して、自ら学び考える力の育成」、「読書や音楽活動等を通して豊かな情操の育成」、「特別支援教育の確立と充実」などを学校経営の重点に掲げ、「家庭の宝」、「地域の宝」、「未来の宝」である子供たちの成長を願い、「生きる力」を育む教育活動の充実に取り組んでいる。

平成 22 年度から平成 24 年度まで、心づくり研究指定校事業を受け、道徳を中核とした校内研究を行った。平成 25 年度からは、国語科を中心に校内研究を進め、言語活動の充実による授業改善の取組を重ねてきている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

引用に関する問題として、平成 26 年度調査からはB問題¹三（発言の中の言葉を引用し、立場を明確にしたうえで質問や意見を述べる問題）を、平成 27 年度調査においてもB問題¹三（取材した内容を整理しながら記事を書く問題）を取り出し、学校ごとの正答率と全国平均正答率とを比較した。その結果、C小学校は、その伸びが、全国で 10 位以内に入っていた。

また、以下のように、国語に関する低学力層の底上げが図られていた。

平成 27 年度国語 A	C層 16% (H26 は 35%), D層 11% (H26 は 46%)
平成 27 年度国語 B	C層 14% (H26 は 35%), D層 10.5% (H26 は 24%)

これまで平均正答率についても、なかなか全国平均を上回ることはなかったが、平成 27 年度は上回った。特に国語 A・B の伸びが著しい。(下記参照)

平均正答率	国語A	国語B	算数A	算数B
平成26年	全国比－ 15.2	全国比－ 6.7	全国比－ 7.6	全国比－ 7.6
平成27年	全国比＋ 2.2	全国比＋ 9.6	全国比＋ 1.6	全国比＋ 0.2

全国学力・学習状況調査が始まって以来、はじめてすべての平均正答率が全国平均を上回った。

2 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) 『学習のポイント』を重視した国語の指導

「主語と述語の関係を捉えること」や、「自分の考えの根拠を説明すること」など、『学習のポイント』を設定し、あらゆる単元で繰り返し指導した。

(2) 目指す児童の姿を限定し、年度ごとに授業改善の柱を設定

目指す児童の姿を「伝え合う子どもの姿」と限定し、それを実現するために平成 26 年度は「聴くこと」、平成 27 年度は「話すこと」を授業改善の柱とした。

(3) 全国的な教育動向等を積極的に発信する学校経営

教員の意思統一や認識共有を図るため、校長が月 1 回以上『校長室だより』を発行し、研修会等で聞いてきた話を掲載するなど、常に情報を収集し、自校の活動に積極的に取り入れようとしている。

3 学力の向上や、学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 定期的な校長通信による意思統一

校長が月 1 回以上作成して、職員に配付する。意思統一や認識共有を図ることが目的である。校長が研修会で聞いてきた話など、積極的な情報収集に努め、自校の活動に取り入れようとしている。

(2) 学校図書館との連携

特に「読むこと」の領域において、教科書教材のみならず、多くの本や文章を児童自ら選ぶことができるようにしている。当県では司書が常勤しており、学校図書館及び地域の公立図書館との連携が図られている。

学校図書館に常に司書がいることで、児童は「図書館に行きたい」、「本を

借りたい」と思うようになっている。休み時間にも多くの児童が図書館に来て、友達と一緒に本を探したり、司書に本について相談をしたりしていた。

また、司書からも各学年の教員に働き掛け、学習に係るニーズを把握し、学校図書館だけでは不十分な場合は、地域の公立図書館や近隣の小学校と連携を図り、本を準備するとのことである。司書が、学習のコーディネーターの役割を果たしていることが学力向上につながっていると考えられる。

(3) 家庭との連携が図られた家庭学習の継続的な取組

全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果から、学習習慣を確立することが学力の向上につながると捉え、全学年で共通認識のもと、「学年×10分プラス10分」の家庭学習に取り組んでいる。内容については、昨年度までは、秋田県の実践を参考に、「自学ノート」に取り組んできたが、今年度から、福井県の実践を参考にした「ふくしゅうノート」に重点を置いている。

家庭学習の取組については、年度初めの4月の保護者会で、全保護者に対し説明を行い、理解と協力を求めている。さらに、6月初旬頃に「『家庭学習』強化週間」を設定し、保護者に児童の家庭学習の取組についてチェックしてもらうようにしている。

4 授業を参観して

<6年国語「筆者の考えを捉え、推薦する本の帯を作ろう」>

(1) 授業概要

本単元において、児童は、教科書の教材文である『自然に学ぶ暮らし』（光村図書）の要旨を捉えた上で、文を引用しながら、自分の考えをまとめていく活動を行う。要旨と自分の考えのまとめが、それぞれ本の帯の表と裏のパーツとなっていく。

本単元の学習は8時間扱いの計画である。第6学年1組は第3時間目を、2組は第5時間目の授業であった。第3時では、筆者の挙げている事例について要約し、現在の自分たちの生活と比べ、考えたことをノートにまとめた。自分たちの生活に生かせることを見付けるために読むということを確認した上で、各自で教材文を何度も読み返し、一つ一つの事例はどこに書かれているのかを捉え、各事例について要約した。その際、前時に確認した要約の仕方を想起しながら一つの事例について全員で要約し、その他の事例については、その学習を生かして自分の力で要約した上で、考えをまとめた。その後、要約の内容やそれに対する自分の考えについてグループで交流し、自分の考えをより明確にしていった。

第6学年2組では、要旨を百字でまとめた後、友達と互いに読み合い、修正した方がよい点などについてグループで交流を行った。要旨をまとめる際

には、全体で根拠となる叙述を確認した後、児童自ら教材文を何度も読み直しながら、要旨を百字でまとめていた。また、本の帯として図書館に置き、不特定多数の人に見てもらおうという視点などから、修正した方がよい点について伝え合うなど、主体的に学び合おうとする姿が見られた。

自分の考えをまとめる際に、目的や意図に応じて根拠となる叙述に着目させたり、ある程度字数を決めて書かせたりすることについて意図的・継続的に指導を行ってきたことが、今回の成果につながったと考えられる。また、目的をもって文章を読むことを継続することで、児童は「何のために読むのか」ということを常に自覚し、目的や意図に応じて、自分の考えを根拠付けるための叙述を取り上げたり、引用したりすることができるようになったと考える。

E 小学校

国語と算数のアイテムを活用させ、特定の課題を解決させた取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

風光明媚な景色の中に、まるでジオラマのように存在する小学校。今回訪問した本校を形容するにふさわしい言葉である。本校の現校舎は、創立 50 周年記念式典直後の平成 25 年 8 月に、37 億円を費やして建築された。

本校は、平成 20 年度からの 2 年間、市の『学力向上パイオニアプラン研究推進事業』の指定を受けているが、その後は特別に教育研究を外に向けて発信してはいない。しかし平成 27 年度は「主体的に学ぶ子の育成～意欲を生み出す授業をめざして～」という研究主題のもと、合計 17 回の研究授業を実施しており、研究意欲は旺盛である。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

国語と算数では、これまでの学力調査の過程で、それぞれ課題と指摘されてきた学習内容がある。その一例として国語では「引用」、算数においては「割合」が挙げられる。どちらも、最近は毎年度出題されているが、本校は、これら 2 つの課題に対峙し、どちらの伸びも確認されている。

国語の「引用」に関しては、引用を扱った平成 25 年度国語 B 2 (2) において、正答率が 16.4% (全国 26.5%) であった。全国平均より 10 ポイント下回っている。しかし、2 年後の平成 27 年度には、引用を扱った国語 B 1 (3) で、正答率が 61.9% (全国 34.9%) までに高まった。全国平均より 27 ポイント上回っている。

また、算数の「割合」に関しては、平成 27 年度の算数 B 2 (2) において、E 小学校は 66.7% (全国平均正答率 13.4%) の正答率であり、全国上位であった。

以上のことから、これまで課題として捉えていた「引用」と「割合」の 2 つの課題を十分に改善してきた小学校といえる。

また、学力調査結果の経年変化にも着目した。

正答率(全国比)	国語A	国語B	算数A	算数B
平成 27 年度	77.2(+7.0)	74.4(+8.8)	83.5(+8.2)	56.5(+11.3)
平成 26 年度	68.3(-4.8)	55.3(-0.3)	79.5(+1.3)	57.2(-1.2)

上の表から見ても、前年度と比べ大きな成果を上げたと考えられる。

さらに、正答数によって児童を 4 層に分けたときの最下位層(D 層)に当たる児童の割合にも着目した。D 層の児童の割合は、国語 A で 9.5% (前年度

23.4%), 算数Bで7.9%(前年度19.4%)である。明らかに, 下位層も前年度と比べると減少していることがわかる。

2 学力の向上に寄与し, 学習状況が改善した学校の取組

(1) 授業スタイルの確立

本校では以下の5つの型を提示し, 様々な対話の場で使わせている。

- | | |
|--------|----------------------|
| ①情報提供型 | (例えば「好きな～は何?」) |
| ②対立型 | (例えば「AかBか?」) |
| ③想像型 | (例えば「もしも～なら?」) |
| ④悩み型 | (例えば「～ができるようになるには?」) |
| ⑤課題解決型 | (例えば「どうすれば～になるのか?」) |

(2) 可視化と活用等によって, 「引用」ができるようにする

国語の「引用」の学習に関しては, 国語だけではなく他教科でも, キーワードやキーセンテンスなどを丸で囲ませ, だれが見ても分かるよう可視化させてきた。可視化することによって, 今はどこを見ればよいのかを意識させ, 次の学習活動にもつながるようになる。

また, 「活用する」という言葉の定義を, 「表現のよいところを見つけて, それを真似ること」と児童に指導している。児童からは, 「これ, 活用してもいいですか」という問いかけをよく聞くようになった。

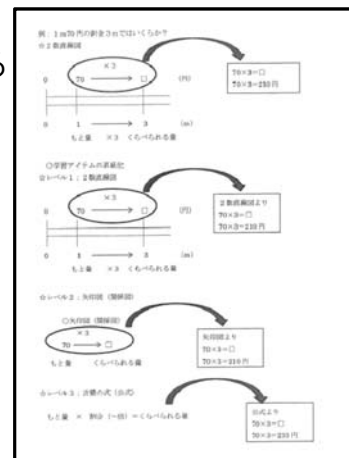
「国語アイテム」(最低限付けておきたい国語の力)の1つとして, 「人物の行動や会話に線を引く」を設定している。

「引用」は本来, 学習内容として3年生で出てくるのだが, 最初はなかなか書けないものである。その際は, 「心の動いたところに線を引きなさい」と簡単な質問をしてから, 「その理由を書きなさい」と指示するようにしている。まずは誰でもできる簡単な指示から行い, 次に何らかの自分の思いを書かせていく二段階の指導をしている。

文章を自分で作らせる際も, たとえば「初めて知ったこと」を書かせた後に, 「自分なりの感想」を書かせている。

(3)「学習アイテム」によって、「割合」の理解を深める自分の考えを創りだしていく「学習アイテム」を持たせるように指導している。その一つが、数直線図であり、矢印図(関係図)である。

右図は、「1m70円の針金3mではいくらか」という3年生の問題である。一般的には、単に 70×3 と立式させるだけに終始する。しかし、本校では、3年生の段階で、数直線図と関係図を併記して指導する。



ここで注目すべき点は、数直線図と関係図を併せて指導する点である。これら2つは、本来別個にあるものではなく、それぞれがよさを持っている。数直線図によって、2つの量の関係が実感できる。また、関係図によって、「もとにする量」が70であることや、「 $70 \times 3 = \square$ 」と立式できることが明確になる。また、問題構造と対応させて捉えやすくなる利点もある。

さらには、未知数を□で表現させる点にも、指導のよさがある。高学年になり、小数や分数の乗法や除法が出てくると、立式そのものが困難となる児童が出現するが、これは、未知数を□で表したうえで逆算できないことに起因する場合が多い。たとえば、「 $\square \times 0.3 = 600$ 」であれば、□を求めるためには「 $\square = 600 \div 0.3$ 」と表すことができる。

習得した「学習アイテム」は、日頃から使わせていかないと、実際の問題解決時に役に立つものにならない。この視点から、当校では、右ページのような簡単な問いを授業の最初の5分で発し、反射的に答えられるようになるまで繰り返し指導する。割合の指導で大切なポイントを、指導した教員に問うと、次の3つが挙がった。

- ①実生活のイメージを持たせること
- ②意味理解を図ること
- ③反射的な立式への鍛えをすること

問題	矢印図(関係図)	式
・1000円の3倍は? ※のほかに、のの前はもと、「のもと」さん	$1000 \xrightarrow{\times 3} \square$ もと(1) くらべられる量	$1000 \times 3 = \square$ 3000円 もと \times 割合(〜倍) = くらべられる量
・1000円の20%は?	$1000 \xrightarrow{\times 0.2} \square$	$1000 \times 0.2 = \square$ 200円
・1000円の20%引きは?	$1000 \xrightarrow{\times 0.8} \square$	$1000 \times 0.8 = \square$ 800円
・定価の20%が1000円。定価は?	$\square \xrightarrow{\times 0.2} 1000$	$\square \times 0.2 = 1000$ 円 $\square = 1000 \div 0.2$ $= 5000$ 円
・定価の20%引きが1000円。定価は?	$\square \xrightarrow{\times 0.8} 1000$	$\square \times 0.8 = 1000$ 円 $\square = 1000 \div 0.8$ $= 1250$ 円
・1000円の3割は?	$1000 \xrightarrow{\times 0.3} \square$	$1000 \times 0.3 = \square$ 300円
・1000円の3割引きは?	$1000 \xrightarrow{\times 0.7} \square$	$1000 \times 0.7 = \square$ 700円

上の①のために、ものの値段を中心とした日常場面を授業の中で頻繁に扱う。数直線図や関係図をかくことが②につながり、結果として③ができるようになる。さらには、日々の授業冒頭の5分間の繰り返し指導によって、念頭で数直線図や関係図を描くことができるようになり、それが正しい立式に結び付くと考えられる。

3 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 様々な学習の場の提供

水曜日の午後は、清掃なしとして、全児童を対象に「〇〇(学校の略称)っ子道場」を開設している。ここでは、「基礎基本検定」「チャレンジシート」「全漢字マスター」などを、各学年の年間計画を作成したうえで取り組んでいる。

1か月に一度、水曜日の午後に「補充教室」として30分程度、個別指導にあてる時間があったり、クラブや委員会のない木曜日の6校時には、学習を補強する時間を設定したりするなど、時間を有効に使いながら学習に取り組む場を提供している。

また、本校も含めた地区の小学校3校で共通の問題集を業者から購入し、解かせている。

(2) ノートを称賛する場

校舎のいたるところに、右のような児童のノートを称賛する場がある。



(3) 使いやすい図書室

次の写真は、校舎の中央を貫いているメディア・アトリウム(図書室)である。どの教室からもすぐに移動しやすい造りになっている。



(4) 学力向上のための会議と計画

「学力向上会議」を開催し、全教員で全国学力・学習状況調査の問題を解いたうえで誤答分析を加え、授業での共通実践を模索している。

また、児童に付けたい最低限度の力を「ミニマムアイテム」として設定し、時間軸と学年軸とで『学力向上計画』を策定する。小刻みにPDCAサイクルを回し、一年間を見通し逐次改善を加えている。

<例；算数科のミニマムアイテム>

	教科計算	題と測定	前	数値関係
低学年	九九の暗算	長さ	三乗用・百乗用の概算	数字の読み・減法活用法
中学年	九九の暗算	長さ	三乗用・百乗用の概算	数字の読み・減法活用法
高学年	九九の暗算	長さ	三乗用・百乗用の概算	数字の読み・減法活用法

<例；学力向上計画>

PDCA 時期	CHECK				ACTION				PLAN				DO			
	1学期				2学期				3学期				春休み			
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	3月	3月	3月	
1年	ひらがなの読み	ひらがなの読み	ひらがなの読み	ひらがなの読み	算数ドリル 計算、ひらがなプリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	
2年	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 計算、漢字プリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	
3年	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 計算、漢字プリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	
4年	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 計算、漢字プリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	
5年	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 計算、漢字プリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	
6年	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 計算、漢字プリント	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	算数ドリル 学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	学年全漢字の読み	

※参考

<校長等からの聞き取り>

- ・学校経営の三本柱は「見える化」「重点化」「実行」である。
- ・児童に「自分是可以る」と思わせるために、レベルアップしたことを認める場を設けている。これによって、教員が「何を大切にすればよいのか」という指針を明確にもつことができ、そのことで児童を認めることができるようになっている。

<教務主任のお話から>

現在の6年生を中学年の頃から、算数少人数担当としてかかわってきた。

- ・子どもたちの「聴く力」が高いと感じている。

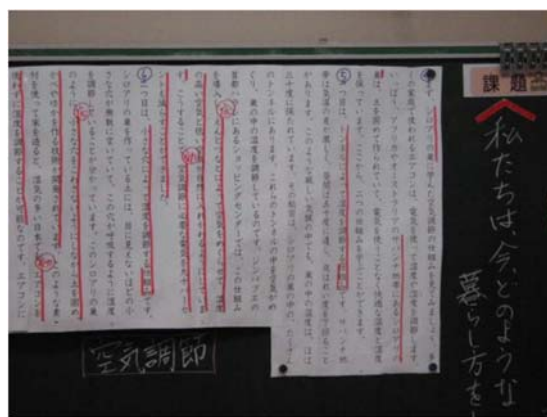
- 算数のワークテストでは、どれも平均95点を超えており、基礎基本はできていると実感している。
- プリント類を返却するときは、常に間違えた理由を考えさせ、言葉で発表させることを心掛けてきた。「どうやったらミスを防ぐことができるか」と問いかけてきた。
- 数直線図や矢印図(関係図)のかき方を、かき順も含めて丁寧に指導してきた。現在では、全ての児童がかける。
- 共感的な雰囲気を作っていくことが大切である。
- だれもが同じ手順で授業を進めていける「授業のルーティン化」の視点は大切である。
- 児童への指導は、「ギュッとやり、パッと開放する」ことが大切。この意味は、まず、ある程度の型を指導し、それができるようになってから、児童の独自性を発揮させるということである。
- 考えを説明することは理解を深めることにつながる。交流局面を大切にしている。

4 授業を参観して

(1) 国語

教室内では、教師の声は言語環境そのものである。よく響く聞き取りやすい声であった。

常に時間が意識されており、「5分間、書き込みましょう」というような指示が多く聞かれた。教科書等に書かれてある文章に線を引き、そこに書き込む活動、友達と意見を交流する活動が多く見られた。



(2) 算数

教科書の題材をそのまま扱い、東小屋と西小屋での卵の重さの分布から様々なことを読み取る学習である。

まずは、「重さ 55 kg以上 60 kg未満は、東小屋全体のおよそ何%でしょうか」という課題を与えた。通常、6年生の度数分布表を扱う授業場面では、特に個々の割合を問うことはあまりない(中学校になると「相対度数」として扱う)が、私たちが訪問することもある、あえて入れていただいたことと考えている。

ところで「以上」「未満」という算数用語は、4年生の指導内容である。通常は、これらの言葉は、すでに分かっているものとして流してしまうことが多い。しかし、朝日小学校では、「以上というのは、どういう意味かな」と問うていた。「その数を含む、その数より上の数」と児童は答えた。当たり前と考えている言葉の意味を、あえて問い、それを言語化させることによって、真の理解につなげているように思えた。

次に、度数分布表の読み取り方の指導に移った。「東小屋で、軽い方から数えて3番目は、どこに入るのかな」というような質問をいくつか繰り返して、度数分布表の読み取り方をきちんと押さえようとしていた。

実際に百分率を求めさせる際は、「何がもとになるのかな」と問うている。この場合は、合計がもとにする量である。同様のことを西小屋でも行った。

本時は「合計から割合を求め、よみとれることを調べよう」という課題が提示された。

A中学校

話し合い活動の充実で、国語Aの学力を向上させた取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

臨海部に位置し、高速道路、倉庫群、公園等に囲まれている。住宅としては大規模な都営住宅、港湾住宅が多く立ち並ぶ一方で、最近はマンション建設も進み、近隣から移住してきた家庭に育つ生徒も増加傾向にある。

学校の教育目標は「健康でたくましい人・進んで学ぶ人・礼儀正しい人・思いやりのある人・責任を果たす人」である。

全校生徒が百名を少し超えた小規模校であることを生かし、目指す学校像として「全教育活動を通じて社会の基本的なルールを守る態度を養い、望ましい集団を形成していく中で生徒の個性が生かされる学校」を掲げ、「個に応じた指導の充実」を重点目標としている。

現在の3年生において就学援助率が6割近くに達するなど、家庭環境が厳しい生徒が多く、また外国人の児童生徒も多い。少人数加配や日本語指導加配により、全校5学級に14人の教員が配置され、学校全体で生徒全体を見る意識が高い。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

本校は、27年度全国学力・学習状況調査において就学援助率が50%を超える学校のうち、国語A・数学Aの正答率が上位であり、また低学力層(D層)の割合が低い。

【参考データ】

(1) 平均正答率の推移

※ () 内は全国平均正答率

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	65.2(76.8)	77.2(79.8)	77.2(76.2)
国語B	58.0(68.0)	44.4(51.6)	68.9(66.2)
数学A	56.3(64.3)	56.7(67.9)	67.1(65.0)
数学B	34.0(42.4)	53.8(60.5)	46.0(42.4)

(2) C層やD層の割合

①C層+D層

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	62.9	48.4	50.0
国語B	62.9	54.9	30.0
数学A	48.1	64.5	52.5
数学B	55.5	61.3	40.0

②D層

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	44.4	25.8	17.5
国語B	40.7	32.3	15.0
数学A	37.0	41.9	15.0
数学B	37.0	29.0	15.0

(3) その他

※（ ）内は全国平均正答率

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
就学援助率	50%以上	50%以上	50%以上
通塾率	—	32.3(60.2)	70.0(60.8)

2 取組の背景～全生徒を全教員でみる・学校から率先して地域のつながりをつくる

現校長は、平成24年度に本校に着任した。着任当時は、厳しい家庭環境等を背景に、学校に来られない生徒が多く、教員が家庭訪問や電話を度々行っていた。生活が昼夜逆転し、夜、家に親がいない家庭も少なくなく、保護者会に来る親もわずかであった（平成26年度以前までは、参加者が1人ということもあった）。平成24年度の時点でPTAが存在していなかったということも、生徒の家庭環境が厳しいことの表れと言える。

したがって、保護者が子供の面倒を十分にみることができない分「素直」で何でも吸収するスポンジのような生徒（校長・談）を、学校としていかに育てていくかという問題意識の下、①全生徒を全教員でみる、②生徒が学校で何かに関わる状況を作り出す、③地域とのつながりを学校が率先して作っていく、という考え方を土台として学校の運営に取り組んできた。

3 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) 少人数によるきめ細かい指導

小規模校であることに加えて、加配教員や後述の「学びスタンダード講師」の活用により、現在の3年生においては、学年42人が2学級に編成され、さらに国語・数学では学級を2分割して少人数指導（8～11人）を行うことができている（学級の分割は学習成績等に基づくものではなく「単純な」分割）。

3年生の国語及び数学においては、それぞれ50代のベテラン教員と2、30代の若手教員がそれぞれ授業を担当しているが、日頃の情報交換を密に行い、互いの授業に生かしているとのことだった。

また、授業については基本的には「予習型」を目指しているとのことである。その趣旨は、厳しい家庭環境下では授業の内容を事後的、かつ綿密に復習することは難しいことから、分からないことは授業中や授業後に生徒が教師に質問できるような授業展開を心掛けているということである。

こうした取組を反映してか、平成27年度調査の生徒質問紙調査によれば、

- ①「授業が分からなかったことがある際にどうするか」との質問に対する回答として、「授業中に先生に聞く」「授業後に先生に聞く」の割合が高い傾向にあった。（下表参照）。

【表：27年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙】

Q. 授業でわからないことがあったときどうするか

	A中学校(%)	全国平均(%)
その場で先生に	20.0	10.5
授業後に先生に	15.0	10.5
友達に	20.0	35.9
家の人に	10.0	5.8
塾の先生に	10.0	15.1
自分で調べる	12.5	12.4
そのまま	10.0	6.9

- ②「授業の予習をしているか」との質問に対する肯定的回答が全国平均より高かった。（A中学校：38%，全国平均35%）

(2) 学習意欲の維持・学習習慣の確立

①「学習部」

学校における自主的な学習機会として、部活動の前に30分間の「学習部」の時間を設定し、専用の教室を確保している。生徒の参加については強制ではなく、各教員からの声かけに基づく希望制である。



【「学習部」が実施される教室】

②「学びフェスト」

基礎・基本の定着のため、国・数・英について、学習範囲を決め、6月～9月に放課後の時間を使って学習に取り組ませている。9、10月にはテストを受け、合格するまで、繰り返し再テストを行う。テストはあまり難しくないものとし、生徒に自信を付けさせるとともに勉強を「やり切る」達成感を味わわせるようにしている。

③家庭学習について

家庭学習帳やスクールライフ等を用いた家庭学習・家庭教育を支援している。

4 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 全生徒を全教員でみる体制・意識

112名、全校5学級（1年：2，2年：1，3年：2）の全校生徒に対して、教職員数は16名（校長及び副校長を含む）、講師が5名である。少人数加配教員が2名、日本語指導加配教員が4人充当されている。

各学年の担当教員は4～5名であり、朝の学級活動では、ダブル担任+αの教員が生徒に声かけする。教員が積極的に生徒に関わっていくこと、人間関係を築くことで、生徒の落ち着きが生まれ、更には学習意欲の向上につながっているものと考えられる。

生徒に関する情報については、入学当初の段階で、出身小学校からの情報を全教員（1年生の担当に限らない）で共有しているとのことである。また、

年度当初には、全校生徒が参加する地域見学の機会を設定（近隣の博物館等を訪問）し、当然全教員が参加して、受け持つ学年に関わらず、全生徒の行動傾向を把握しているようだ。なお、校長から学校の全体に関する説明や授業参観後の質疑でヒアリングを行った際、個々の生徒の特徴（家庭環境、部活、行動傾向等）に関する発言が自然に出てくるところにも、そういった意識の高さが感じられた。

なお、不登校の生徒への対応については、多くの関連情報が集まる養護教諭が中心となり、月1回、校内の特別支援委員会を開催し、全校的な情報共有・対応を行っている。また、自治体の家庭支援センターとも連携して家庭訪問等を実施しているとのことであった。

（2）生徒が学校で勉強以外の何かに必ず関わる状況を意図的に作り出す

生徒が落ち着き、学校生活への意欲を高めるためには、生徒が授業以外に活躍できる場が保障されていることも重要である。この点、A中学校では、小規模校のよさを生かして生徒の活躍の場を作り出している。

例えば、生徒会活動については、多くの生徒が必ず何かの役割を担う（担わざるを得ない）ようにしているとのこと。また、小規模校ゆえに文化祭や合唱コンクールが開催できない反面、伝統的に「学年劇」を実施し、皆で何かを作り上げる活動を経験させている。校長曰く、「この学年劇を通じて「何かを表現する」活動が、全国学力・学習状況調査のB問題の結果が全国平均よりも高かった要因の一つになっているのではないか」とのことであった。

（3）学校が率先して地域とのつながりを作っていく

本校では、厳しい環境の家庭が多いため地域と学校とのつながりも薄れがちになりかねないことから、学校が率先してつながりを構築することが重要であるとの認識の下、学校が中心となって安全協議会を構成し、地域パトロールを実施したり、生徒が作成したポスターを駅に貼ったりするなどの活動を行ってきた。

5 授業を参観して

（1）3時間目：数学（3年2組）※少人数指導（11人と8人で分割）

学習内容は「円周角」である。前時までで一通りの学習が終了しているのか、本時は問題演習が行われていた。

少人数の授業であるため、教師の机間指導も頻繁に行うことができるように感じられた。また、特にベテランの教員が担当したクラスにおいては、教師が問題のポイント等を丁寧に語り掛けている場面が見られた。

生徒は落ち着いて問題に取り組んでいた一方で、発言の機会は比較的少なく、静かな授業であった。

なお、問題を解く際に、教科書の図で考えている生徒とノートに図をかいて解いている生徒がおり、またノートを使っていない（恒常的に持っていないかどうかは不明）生徒もいた。

その一方で、自分なりに解答のポイントをまとめている生徒もいた。



【生徒が解答を説明している様子】

(2) 4時間目：国語（3年1組）※少人数指導（11人と9人で分割）

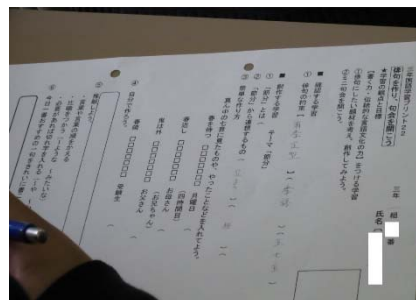
学習内容は俳句（「句会を開こう」）であり、前述「〇〇学びスタンダード」に盛り込まれている「季節を感じ、俳句に親しみます」に対応している（後述：「学びスタンダード」の該当部分参照）。

「俳句」が「学びスタンダード」に盛り込まれているのは、本校がある地域が松尾芭蕉ゆかりの地域であることによる。

両クラスとも、少人数指導を生かして、教師は生徒へ丁寧に話しかけ、生徒からも反応が返り、それをうまく教師が拾って学習につなげていく、といったサイクルができていく、活気のある雰囲気だった。また、両クラスでワークシートが配布されており、学習の流れが一見してわかるようになっていた。授業の初めに黒板に目当てが書かれていた。

授業展開としては、俳句の基礎的な事項を押さえたのち、テーマとして「節分」を設定することで、投句（俳句作り）や鑑賞をしやすくする工夫が見られた。その後、俳句作り・推敲を経て教師に一句を提出することとなるが、個人的な印象としては、生徒たちは思った以上にスムーズに俳句作りが進んでいるように思えた。小学校から一貫した創作活動の成果ということも推測された。

その後、生徒から提出された俳句1つずつ（匿名）を教師が模造紙の一行分にマジックでまとめていき、黒板に貼って鑑賞し、挙手によってよいものを選句する展開となった。教師が一つ一つの作品をまとめていくのに時間を要するが、少人数授業ゆえ、授業が滞ることはあまりなかった。



6 その他の特色ある取組～学力向上に向けた教育委員会の取組

教育委員会として統一的な方針＝「〇〇（地域名）学びスタンダード」を定めるとともに、必要な人的配置に努め、加えて学校間及び教員間の連携を図る仕掛けを設けることで、各学校の取組を支援する姿勢が感じられた。

（１）「〇〇（地域名）学びスタンダード」の策定

自治体内の生徒の置かれた状況として、「学び方に課題があったり、早い学年段階で習得すべき学習内容が身についておらず、現在の学習に困難があったりする」との現状分析に基づき、教育委員会は、児童生徒一人一人の確かな学びや育ちを支えるものとして、「すべての子供たちに確実に身に付けさせたい内容を明らかにし、その定着を目指して全校で取り組んでいく」ことを目的とした「〇〇（地域名）学びスタンダード」を策定した。

（平成24年度策定，25年度より実施）

「〇〇（地域名）学びスタンダード」は、学習指導要領の内容や学び方について、最低限各学年において習得し、次の学年につなげてほしいポイントをまとめ、教員の指導の目安とすることはもちろんのこと、保護者にもわかりやすく示し、理解してもらうことを趣旨としており、「学び方スタンダード」及び「国語／算数・数学／英語スタンダード」（各教科）のほか、「体力スタンダード」が策定されている。

【学び方スタンダード】（抄）

- ・持ち物 前日に必要な学習用具を準備します
- ・着席 授業の始まりの時間を守り、席につきます
- ・姿勢 背筋を伸ばした姿勢で座ります
- ・提出物 提出物の期限を守ります

【国語スタンダード】（抄）

（小・中学校共通）

- ・学習した漢字や言葉を文章の中で使います
- ・相手や場面を考えて敬語を使います
- ・読書に親しみ、いろいろな分野の本を読みます
- ・季節を感じ、俳句に親しみます

（中学校）

- ・自分の考えを適切な言葉で話します
- ・自分の考えと比較して聞き、目的に沿って話し合います
- ・伝えたいことを明確にし、構成を工夫して書きます
- ・文章の展開や表現に気を付けて読み取ります

【数学スタンダード】(抄)

- ・ 1次方程式，連立方程式，2次方程式を解くことができます【1・2・3年】
- ・ 比例・反比例や1次関数を式で表し，グラフを読むことができます【1・2年】
- ・ 合同な図形を見つけることができます【2年】
- ・ 資料を収集し，表やグラフに分かりやすく表すことができます【1年】

加えて，小学校／中学校それぞれ1冊ずつ，教員向けの指導資料を作成し，配布している。指導資料には，スタンダードに示された目標，学習内容とともに，国語では「言語活動例と指導のポイント」，数学では当該学習における「つまずきポイント」が具体的に記載されている。また「小中連携の視点（学習の系統性）」の項目も設けられ，校種間連携を意識させるものとなっている。

(2) 講師や学生サポーターの活用

「〇〇（地域名）学びスタンダード」の実施に伴い，退職教員や教職経験者（正規採用を目指している者も含め）を区費で「〇〇（地域名）学びスタンダード強化講師」として採用し，年間30時間を上限として派遣している。教科は，小学校：国語，算数，体育，中学校：国語，数学，英語。時給が比較的高いこともあり，比較的人材が集まっているようである。

本校においては27年度，数学（期限付。教員経験あり）及び英語（教職経験はないが，英語の指導力が高い）の講師が派遣されている。

(3) 全職員が参加できる研修会の開催

校長会と教委との協力により，地区内の学校の全教員が参加する研修会「教科交流授業研究の日」を年2回実施している。実施に当たっての運営及び調整は自治体内各学校の副校長が行い，研修会の日は生徒を全員下校させ，全教員の参加を必須としている。研修会のタイトルにも表れているとおり，研究授業の指導案は教科及び学校を超えて確認し，充実した議論が行われている。「全教員を参画させる」ということが最大のポイントである。

(4) 校種間連携

(3)と同様に，「保幼小中連携の日」として，年2回，学校種を超えた教員の研修会を実施しており（夏は保幼小の教員が中学校へ，冬は逆），こちらも全教員を参画させる位置づけとしている。

B中学校

話し合い活動の充実で、国語Aの学力を向上させた取組例

1 学校の概要

(1) 学校紹介

本校は昭和22年の新学制により、二つの中学校として開校した。昭和33年には合併で現在の村が誕生した。一村二中学校という中で、互いに切磋琢磨し教育の実をあげる。

昭和36年には大雨による災害が発生し、地域の一部の流失と集団移住により、当時在った分校を閉鎖する。その後、生徒数の減少等から、昭和51年、二つの中学校を統合し、現在の地に校舎を新築して本校が開校した。

学校目標は、建学時の「ねばり強くやり抜く」から、「強い意思をもちたくましい実行力のある人になる」へと変遷し、昭和62年より現在のものとなった。この目標の下、「学習の五原則」を学習姿勢の土台とし、生徒が活動する場面や友と学び合う場面を設定することで主体的な学習を目指している。また、小規模校の特性を生かし、整備された施設・設備を十分に活用し、日々の授業を実践している。



本校の生徒会では「挨拶・清掃・歌声」を三本柱にし、日々の生活の中で、当たり前のことが当たり前に行える姿を目指している。その中で、望ましい人間関係を形成し、協力して問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を培ってきている。

また、仲間や地域との絆を大切にしようという気風にあふれ、30年以上も続いている他都道府県の同名の学校との交流や、毎月2回、登校時に村内のゴミ拾いをするのは、本校の特色ある活動となっている。

これらの活動を通して、本校の生徒は、「日本で最も美しい村連合」の一員である、自治体の良さを満喫しつつ、日々成長を続けている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

通塾率が30%以下の学校中、国語Aの平均正答率が全国において上位である。また、各教科のB問題（「活用」）で下位層の割合が大きく減少し、国語のA問題及びB問題、数学B問題で下位層（D層）の割合が10%未満である。さらには、「数学の勉強が好き」な生徒（「当てはまる」の割合）が47.9%と多い。（参考として、平成26年度は13.3%であった。）

参考【平均正答率（％）】（ ）内は全国の国・公・私立生徒の平均値

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	82.3 (76.8)	82.4 (79.8)	84.1 ^{※1} (76.2)
国語B	71.6 (68.0)	51.9 (51.6)	74.1 (66.2)
数学A	67.3 (64.3)	65.9 (67.9)	69.4 (65.0)
数学B	49.0 (42.4)	60.2 (60.5)	49.4 (42.4)

※1 通塾率が30%を下回る中学校（本校は18.7%）のうち、国語Aの平均正答率は全国で5番目に高い。

【下位層（D層）の割合（％）】

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	10.0	13.3	<u>8.3</u>
国語B	14.0	20.0	<u>8.3</u>
数学A	14.0	20.0	12.5
数学B	2.0	16.7	<u>8.3</u>

平成27年度は、各教科の「知識」「活用」とともに、全体の10%程度にまで下がった。

【下位層（C層）の割合（％）】

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	26.0	20.0	27.1
国語B	34.0	26.7	12.5
数学A	42.0	30.0	29.2
数学B	20.0	30.0	<u>16.7</u>

平成27年度は、特に各教科の「活用」で、その割合が低くなっている。

【下位層（C+D層）の割合（％）】

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国語A	36.0	33.3	35.4
国語B	48.0	46.7	<u>20.8</u>
数学A	56.0	50.0	41.7
数学B	22.0	46.7	<u>25.0</u>

平成27年度は、特に各教科の「活用」で大きく割合が下がり、全体の1/5～1/4程度になっている。

(3) 「数学の勉強が好き」の割合

【「数学の勉強が好き」の割合(%)】 ()は全国の国・公・私立生徒の平均値

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
「当てはまる」	30.0 (28.3)	13.3 (29.5)	47.9 (29.1)
「当てはまる」＋ 「どちらかといえ ば、当てはまる」	70.0 (55.7)	56.6 (56.8)	70.8 (56.2)

2 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) 生徒会活動と連携させた話し合い活動の充実【国語】

平成24年度頃から、「読む」「書く」よりも先に、「話す・聞く」に係る取組を行い、パネルディスカッションなどの話す場面を様々設定してきた。例えば、生徒会活動でも、ランチルームでパネラーを立てたディスカッションとともに、「皆さんはどう思うか」という投げかけも行って来た。話し合うことへの意識化が図られ、また話し合う方法の共有化も併せて図ることができるようになってきた。

(2) 聞く力を高める漢字小テストと、色分けによるノートへの書き込み【国語】

漢字は毎時間テストを行っている。予め範囲を決めておき、その範囲の漢字を練習してくるよう指示をする。授業の冒頭10分間で、教員が選んだ10問を口頭で『国際〇〇きこう』の『きこう』とか、『『きこうがよい』の『きこう』などと、句や文の形で出題する。聞く力を高めることも期待し、継続して行っている。

また、授業ではグループで出た意見をすべて発表するという仕組みで行っているため、自分の考えを持てなかった生徒が、他の生徒の考えを聞いてノートに書き足している。「他の生徒の意見を聞いて、なるほどと思ったことや自分で気づけなかったことなどを、他の色で書き足してよい」と促している。他の生徒の意見を別の色で書いていくと、後で見たときに自分の意見と他の生徒の意見とを区別できる。色を変えて書くことで、自分の考えと他の生徒の考えとを見比べるようにさせている。これらの取組の成果として、他の生徒からもらう意見の量が減少して来たり、その表現が端的になったりしている。はじめは聞き取ったことを全て書き込んでいるが、徐々にポイントを捉えて書き込むようになっている。

(3) 手応えのある問題の提示と、自然な話合いの醸成【数学】

本校は、考えることが好きな生徒が多い。また、教員自身も考えることを楽しんでいる。フェルマーコース（標準的なコース）では、簡単な問題よりも手応えのある問題の方が生徒の取組が良い傾向にある。現在の3年生が2年次の際、図形の学習においてグループで考えて進めるような活動にした。その結果、誰にでも互いに説明したり教えあったりしながらどんどん学習活動を進めていった。



また、フェルマーコース（標準的なコース）にも数学を苦手と考えている生徒はいるが、同コースのよい雰囲気の中で教えてもらいながら、解くことを楽しく感じ始めている生徒は多い。学習意欲が高いことから、学び合いを意図して席を立たせることも安心してできる。

3 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 考えの理由を、数行で書かせる継続的な取組【国語】

文章を書かせることについては、授業の中で継続的に行っている。2年時から、「自分の意見に対して根拠や理由があることで、より説得力が増す」と言い続けているため、理由を書くことについては、あまり抵抗感がないと考えられる。

理由を書く際の分量は、2～3行程度である。それは、長く書かせる時間もないこととともに、簡潔にまとめられることがよいと考えるためである。また、量を指定しなければ多くの分量を書き続ける生徒もいる。また、「理由」であれば特に支援をしなくても書ける生徒は増える。

(2) 生徒の希望による習熟の程度に応じたコース編成【数学】

現3年生は、2学級を「フェルマーコース」（標準的なコース）と「ピタゴラスコース」（基礎的なコース）の2コースに分けて、習熟の程度に応じた授業を行っている。基本的には同コースの編成は、生徒の希望を尊重しているが、1組で「フェルマーコース」、2組で「ピタゴラスコース」を行うことから、机と椅子の移動を伴わないように同学級の在籍生徒数と一致するように各コースの人数を調整している。実際は、「ピタゴラスコース」（基礎的なコース）の希望の方が若干多くなるため、生徒と相談しつつ同コースの希望者から「フェルマーコース」（標準的なコース）への調整を行った。またコースの変更は、生徒からその希望がなければ基本的に行わない。「ピタゴラスコース」（基礎的なコース）は、学習支援の担当者が入りTTを行っている。

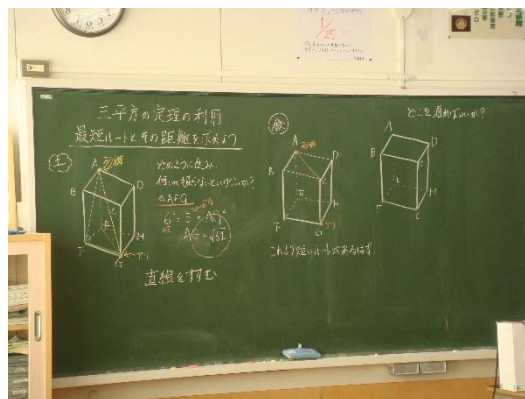
4 授業を参観して

<3年数学「三平方の定理の利用」>

(4) 授業の概要等

直方体を使って「最短ルートとその距離を求めよう」という課題である。学習内容としては、三平方の定理が使われる。問題場面に必然性、連続性、発展性を生むために、導入の場面では、直方体が「土」の場合ではどうかを、まずは考えさせる。次に、素材を変え、「鉄」の場合ならばどうかを考えさせる。

最終的には、形を変え「円錐」の場合で考えさせる。



6 その他の特色ある取組

本校の読書活動については、図書館司書や委員会が毎月作成する「たより」の中で、テーマを絞って本を紹介したり、黒板に個人名や学級名でランキングが発表されたりしている。

現在は、PC教室や図書館をリファレンスセンターとして位置付けるような建築手法が増えてきているが、本校が建設された40年前には、現在のような玄関を入れてすぐに図書館があるような設計はほとんどなかったと考えられる。

栄養士と図書館司書が給食委員会で話し合い、今月このようなメニューの時にこのような本を紹介しようと相談し、大型のディスプレイで紹介しながら給食にからめた本の紹介も行っている。

第2部

平成28年度 訪問校

(平成27年度に続いて訪問した学校を含む)

D小学校

校長のリーダーシップの下、少人数指導や根拠・わけを伝える学び合いの授業に取り組むことで、全国学力・学習状況調査の正答率を飛躍的に向上させた取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（昭和 38 年開校：平成 25 年校舎新築）		
校区内中学校	1 校		
学級数 生徒数	20 学級 479 名	第 1 学年 3 学級（62 名） 第 3 学年 3 学級（86 名） 第 5 学年 3 学級（81 名） 特別支援学級 2 学級（4 名）	第 2 学年 3 学級（80 名） 第 4 学年 3 学級（73 名） 第 6 学年 3 学級（93 名）
教職員数	44 名	校長・教頭	各 1 名
		教諭	2 4 名（うち養護教諭 1 名）
		講師	3 名
		司書	1 名
		事務主事、拠点校指導員、特別支援員、栄養士、校務士、給食職員、ALT 等	

【学校の特徴】

今回訪問したD小学校は市の総合計画「〇〇（市名）みらい創造プラン」（基本計画）で教育施設の整備充実として平成 25 年 6 月に新築された。心豊かな人間の育成に貢献できる学校づくりなどを基本構想として、内装等に柔らかで温かみを感じられる市内産杉材等を使用し、高い天井や広い廊下・階段による、ゆとりある空間を確保している。また、地域のシンボルとして市民が誇れる学校づくりも基本構想の一つであり、周辺の景観等に調和し、地域に適した機能美を持った外観であり、時計台も設置されている。

このような素晴らしい環境の中、D小学校の児童は雪で運動場が使えない状況でも、休み時間には広い廊下のスペースで縄跳び（訪問時は縄跳び週間中であり、その期間は廊下の決められたスペースで縄跳びを行うことができる）に励んでいた。

職員室では児童の様子や授業の反省などを話し合う声が級外の教員も交え、至るところで飛び交う



D小学校外観

など、479名の児童のことを思う教員の姿を見ることができた。外観だけでなく

内面も素晴らしい学校であった。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 平成 27 年度の算数B「示された情報から基準量を求める場面と捉え、比較量と割合から基準量を求めることができるかどうかを見る問題(B²(2))」では、全国平均を約 60 ポイント上回る 72.8%という全国でも2番目に高い正答率であった。
- 平成 28 年度の算数A「1 を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解しているかどうかを見る問題(A⁹(2))」では、全国平均を 35 ポイント以上上回る 86.7%という高い正答率であった。

【参考：基本データ】※ () 内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
85.1%	65.1%	92.6%	58.8%	28.9%	10%~20%
(73.0%)	(58.0%)	(77.8%)	(47.4%)	(45.9%)	

②その他の注目すべき特徴

- 平成 25 年度は全ての教科において正答率が全国平均を下回っていたが、平成 26 年度より算数AB共に正答率が全国平均を 10 ポイント以上上回るようになった。(国語についても平成 27・28 年度はAB共に全国平均を上回る。)
- 平成 28 年度の算数Aの標準偏差が 1.4

2. 取組の背景

平成 26 年度からの学力向上には校長のリーダーシップが背景にある。前校長の尽力で現在は、荒れの兆候は見られないが、生徒指導上の問題を抱えている児童は今もいる。その中で、前校長の思いを引継ぎ、問題行動をする児童に周りが流されないよう、学校教育目標である「知徳体の調和のとれた品性ある子の育成」を目指し、現校長が自ら先頭に立って、教職員を引っ張っている。

子供に届く言葉で語る学校経営ビジョンは、アウトプットを大切にしており、目に見える形で当たり前ができるまで校長は繰り返し、言い続けている。教職員も自身の役割が明確で、目指す児童の姿も「はっきりあいさつ(5m先から笑顔付き)」などのように具体的であるため、安心して指導に当たることができている。二人の校長の下に「徳」も「体」も大事に育てているからこそ、

平成 26 年度からの「知」の躍進につながっていると考えられる。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 少人数指導

全国学力・学習状況調査の結果を用いた追加分析として、平成 23 年 1 月に本研究所が取りまとめた「全国学力・学習状況調査において特徴ある結果を示した学校における取組事例について 第 2 集」に正答率を高めた実践例として、少人数指導に顕著な取組のあった学校が紹介されている。

上記事例で紹介された少人数指導の実施形態は、単元に応じて「単純分割」や「習熟度別分割」及び「チーム・ティーチング（以下、「TT」と示す）」を使い分けており、更に分割の際は学年や学級と母体を変更しているが、D 小学校は習熟度別による学級 2 分割（4 月や単元当初のレディネステスト実施時は除く）で年間を通じて実施している。また、平成 26 年度より少人数担当の配置は第 5・6 学年に固定している。

第 5 学年の算数の学習内容は、割合の学習など難易度が上がることや縦の系統性を生かす内容が多く、今まで十分に理解できていない内容についても、第 5 学年で学級を母体にした習熟度別指導を実施することで、取り戻すことができると D 小学校では考えたからである。

このような D 小学校の少人数指導に関する取組は、担当の N 教諭（担任外、少人数指導担当教諭）が中心となっている。N 教諭は平成 24 年度より D 小学校に赴任し、全国学力・学習状況調査の結果が表れた平成 26 年度の児童は第 3 学年から、平成 27 年度は第 4 学年から、平成 28 年度は第 5 学年から少人数指導を行っている。

N 教諭は校長同様、できるようになるまで繰り返し言い続けることを実践している。第 5・6 学年の算数の宿題（前日の授業の基礎的な内容）は N 教諭が登校時に回収し、昼の休み時間までに点検を行い、宿題の内容について不備があった場合は、休み時間に指導をしている。授業中も理解できていない児童には、机間指導を繰り返し、それでも不十分な場合は授業後に対応している。また、学級担任との情報交換も休み時間や授業後にできなかったことを中心に話し合うことで、問題意識の共有化を図り、同一歩調での指導が可能となっている。N 教諭による少人数指導の効果が、算数の学力向上の結果に大きく関わっていると考えられる。

(2) ○○（学校名）授業モデル

D 小学校では、平成 27 年度に県の道徳教育推進授業の指定を受け、研究主題を「学び合う授業～根拠・わけを説明することを通して～」と設定した。

平成 28 年度は「積極的に学び合う授業」（副題は平成 27 年度と同様）と設定し、学校全体で国語に取り組んでいる。

根拠・わけを説明する「学び合う」授業を実現するため、授業の学習過程を「〇〇授業モデル」として、以下のように学校全体で統一している。

<構え>

○チャイムスタート（服装、学習準備を整えさせ、大きな声で「始めます」の合図）

<つかむ>

- ①既習の確認（全員挙手で既習事項の確認）
- ②課題との出会い（考えたくなる課題の掲示）
- ③学習の見通し（既習との違いを明確にし、児童にゴールをイメージさせる）

<考える>

- ①自力解決（全員に考えを持たせる）
- ②わけ（根拠（文・絵・図・表・実物・数直線）を基にわけを考えさせる→筋道の明確化）

<学び合う>

- ①考えの交流（根拠を指し示しながらわけを説明させたり、短く問い掛けながら話させたりする）
- ②反応（反応しながら聴かせる）
- ③問い返し・深めの発問（学びをつなげる返しや深めの発問）
- ④まとめる（全員挙手による確認→学習用語を用い、自分の言葉でまとめさせる）

<活用する>

- ①学んだことを生かす
- ②ふりかえり（自分の変容、友達の良さ、思ったこと・考えたことを記述させる）

教員は考えを持つために根拠を授業の中で提示し、児童は根拠を基にわけを考え、学び合いの場面では根拠を指し示しながら説明する。『〇〇授業モデル』の定着が学力向上の要因となっている。

（3）朝学習・水曜タイムの有効な運用

①朝学習（基礎基本の徹底）

平成 25 年度より教員の意識改革を目的に、朝学習（15 分）の時間を学力定着の時間と位置付け、運用方法の見直しを図った。実施内容は国語（水・金：金曜日は他教科の実施も可）、算数（月・木）、読書（火）である。

国語・算数を実施時に使用するプリントは市から提供されるチャレンジシート（全国学力・学習状況調査や県の学力調査の過去問を大問 1 単位にしたもの）などを使用している。15 分を有意義に使うために、始まる時間前にプリント配布をし、解説や直しも時間内に行う。

朝学習自体は、全国の学校でも行われていることであるが、校長の当たり前にできるまで繰り返し取り組む考えが、朝学習の時間にも確実に反映されている。

②水曜タイム（活用力タイム）

平成 25 年度から第3学年～第6学年を対象に水曜日の日課表に 20 分間（14:30～14:50）の学習時間を確保し、活用力の育成に取り組んでいる。

内容は朝学習と同様、チャレンジシート（国語・算数）を中心に、解説や直しまで時間内に行っている。第5学年では、4月以降の水曜タイムにその年の全国学力・学習状況調査の問題にも取り組んでいる。

算数の一例として、問題の種類に「『まね』問題」などのネーミングを付け、同じ傾向の問題にも対応できるように定着するまで取り組んでいる。

「『まね』問題」が出ると児童はまねする部分を赤で囲み、まねする部分を生かしてわけを考える。これは、授業中の友達の考えを生かして解けるようにする全国学力・学習状況調査の出題の意図でもあり、実際の授業場面でもこの考え方が生かされている。

ほかにも3段階でわけを説明する「『わけ』問題」、数直線図を活用する「『倍・割合』問題」のように水曜タイムで身に付けた力は、授業で活用されている。「分かる→できる→定着する」指導を確実に行うことが学力向上には不可欠である。

(2) はるおさんは、縦が39 cm、横が54 cmの長方形の厚紙1枚から、1辺が9 cmの正方形を24個かくて切り取ることができますことに気がきました。

はるおさんは、1辺が9 cmの正方形を24個かくことができるわけを、厚紙の縦と横の長さに着目して説明しようとしています。

はるおさんの説明
厚紙の横の長さは54 cmです。正方形の1辺が9 cmだから、 $54 \div 9 = 6$ 。正方形は横にも6個かくことができます。

はるおさんの説明に続くように、1辺が9 cmの正方形を24個かくこ

↑まねする部分

まね問題

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 学習環境と掲示環境の整備

算数の少人数指導教室には、学年を越えた領域ごとの掲示物が貼られている。既習を意識させたり、先を見据えさせたりする。また、特に割合については、数直線の描き方や問題文から基準量を見付けだす方法などを丁寧に指導している。

数直線のほかにも、根拠となる線分図や面積図など考えるためのアイテムが少人数指導教室の中には溢れているが、学級にも領域ごとの掲示物が少人数指導教室と同様に掲示されている。学級担任との情報交換による問題意識の共有化は環境面にも生かされ、掲示物が学習や支援の在り方を支えている。

掲示物だけではなく、職員室前に整理棚を用意して、チャレンジシートや発展プリントが使いやすいようにしたり、授業中に使う用語や根拠となるアイテムをマグネットにして、足りないことがないように数多く準備したりするなど、環境面の整備も学力向上の要因となっている。



少人数指導教室の背面掲示

(2) D小学力向上会議

平成28年度は以下のように、開催・予定されている。

	月日 (曜日)	会議の内容
第1回	5/30 (月)	全国学力・学習状況調査における自校採点の結果、正答率の低い設問の分析をする。(調査実施後には「全国学力調査問題を解く会」を実施し、第6学年だけでなく、学校全体で分析・考察をしている。)
第2回	8/26 (金)	県基礎学力調査問題の結果分析。(第4・6学年で実施。) 市の検証問題(第5学年で実施)から見えた課題となる問題の分析。
第3回	9/28 (木)	全国学力・学習状況調査分析報告会
第4回	1月末	県評価問題(第5学年で実施)と〇〇(学校名)学力テスト(業者のテストを使用して、各学年で実施)の結果分析。

年4回、各学力調査の結果と考察、次学期に向けての対策を学校全体で共有することがD小学校では十分にできている。

5. その他の特色ある取組

(1) 小中連携

D小学校の卒業生は地域の二つの中学校に進学する。D小学校のほかにも同地区に2校の小学校があり、小学校3校では、中学進学に当たり春季休業中に

同じ課題（市販のワーク）に取り組み、入学式後にそれぞれの中学校へ提出をさせている。

小中5校での取組は、「わけ・根拠」を伝える授業展開を共通して行っており、小学校での学びが中学校で生かされるよう、地区全体での研究を進めている。

6. 授業を参観して

(1) 授業の概要（第6学年算数（少人数指導：発展グループ）：比例と反比例）

本単元では、小学校における数量関係のまとめとして、比例を本格的に扱い、伴って変わる数量やその規則性に着目して考察し、関数の考えを伸ばしていく。また、これまでに学習した「単位量あたりの大きさ」、「速さ」、「割合」、「分数のかけ算わり算」、「比」の学習を、改めて比例という視点でまとめていくねらいがある。

本時では、卒業を間近に控えた児童の関心の高い場面設定で、「卒業のしおりを作成するための用紙 300 枚を数えずに取り出す」方法を「10 枚 73 g」から考える内容である。「単位量あたりの大きさ」や「等しい比」、「数直線」など既習の考えを活用する中で、単元のねらいでもある「どの考えにも比例の性質が使われている」ことを理解させる内容である。

①児童の様子

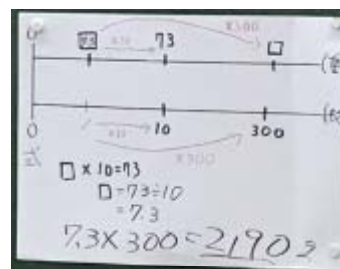
児童にとって「比例」は、第5学年で学習が始まり、それ以後も数直線や表を生かして伴って変わる二つの数量関係を説明するなど、比例の性質を日常的に使っている。

本時でも、表を作成し縦横の関係から考える「表のきまり」、1枚あたりの重さを求める「単位量あたりの大きさ」、「等しい比」、「数直線」と様々な方法を児童は見付けることができた。また、表や数直線に気付いたことを多くの児童が書き込んでおり、「書き込む力」を身に付けさせる日頃からの取組が授業の中で生かされている一場面であった。このように見付け、書き込んだ考えは「根拠」となり、学び合いの場で根拠を指し示しながら説明する姿は、D小学校の研究主題に合致する姿であった。

②授業者の取組

発展グループでは、知識・理解や表現・処理の基礎・基本の学習の定着を礎に、多様な考え方をし数学的な考え方を大切にして、その根拠を一人一人が説明できることを目指して学習を進めている。N教諭は、右写真のように数直線に三つの数が出てくることに自信が持てない児童に対し、机間指導で

1枚当たりの重さを求めてから、300枚の重さを求めるのは「単位量あたりの大きさ」の考えを生かしていることを児童に周りの掲示物で確認させるなど繰り返し理解できるように声掛けを行っていた。その結果、全体の場でも児童は根拠を指し示しながら「単位量あたりの大きさ」について説明することができていた。



数直線を使った児童の考え

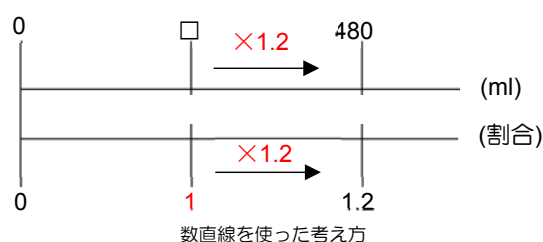
「単位量あたりの大きさ」以外でも、表や数直線、等しい比など、既習事項を生かせないか児童に投げ掛け、児童を揺さぶり、解決に必要な根拠を広範囲に求めさせようと努めている。また、児童が既習事項を生かしている際には「イカす」マーク（イカの絵）を貼って、既習事項を生かした箇所を明確にしていた。その結果、第3学年の「わり算」から続く比例の考えがあることを児童に理解させることができた。日頃から、児童の考えを関連付ける授業を重視し、積み重ねている成果である。

次時では、2190gの紙の束が実際に300枚あるか児童に手分けして数えさせることで、比例の有用性を実感させるなど、様々な工夫が見られたN教諭の素晴らしい授業であった。

③学力・学習状況の改善との関連

本時のまとめで、既習の学習方法には比例の性質が使われていると実感できたのは、全国学力・学習状況調査の結果分析を学校全体で取り組んできた成果でもある。

少人数指導教室の背面には、1(2)①「学校選定の際に用いた特徴」でも取り上げた平成27年度全国学力・学習状況調査のB2(2)について数直線を生かして、解く方法が右図のように掲示物に示されている。



本時の比例の数直線を生かす考え方につながる学習であり、更には平成28年度の全国学力・学習状況調査でも「1を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解しているかどうかを見る問題」での成果にもつながっている。全国学力・学習状況調査を生かそうとする姿勢が、授業にも次年度の結果にも表れている。

(2) 授業の概要（第5学年国語：詩があふれるD小プロジェクト）

本単元では、教科書に掲載されている六編の短詩と学級で用意された詩集の詩から二つの詩を選び、共通する面白さを見付け、全ての児童に詩を比べて読む楽しさについて伝えることを目標としている。

本時は、共通する短詩の面白さを見付けるところである。児童は前時まで好きな詩は選んでいたが、その良さについて改めて本時で考え、更に友達の選んだ短詩の面白い点について交流することで自分の詩と共通する面白さを見付け、読み比べる楽しさに気付かせる内容である。

①児童の様子

第4学年までの学習を通して、児童は比喩、擬人法、繰り返しなどの詩の技法に触れてきている。また、全校での取組として俳句の学習を行っており、倒置、体言止めなどの表現にも触れている。

児童は様々な表現技法を理解しているが、比喩や連想などを使って凝縮された世界を表す、短詩の学習は初めてである。1行の詩に対し、連想できることをいくつも記述する児童や、交流の場面で共通する部分だけではなく、相違点についても記述している児童など意欲的に学習に取り組む児童の姿を見ることができた。

②授業者の取組

ロッカーの上に詩集をまとめた本棚が設置されていた。側面には、複数の詩における面白さが解説された掲示物があり、教室の中は詩を勉強する空間となっていた。環境面で児童を詩の学習に引き込むよう、単元が始まる前から授業者は仕掛けている。

自分の考えを書かせ、友達同士で話し合う場面が設定されており、授業者は机間指導をしながら、積極的に児童に関わり、指導する場面が見られた。特に、友達の考えをよく聞き、それを要約したり、自分の考えと異なるところを明確に述べたりするなど充実した言語活動が行われていた。

「書く」、「聞く」、「話す」、「要約する」、「指摘する」などの言語活動を意識した授業（単元）の構想が国語の学力向上につながっていると考えられる。

③学力・学習状況の改善との関連

平成 26 年度の全国学力・学習状況調査において、以下のような問題が出題されている。

問題番号	内容
B3一(1)(2)	二つの詩を比べて読み、表現の工夫を捉える
B3二	詩の解釈における着眼点の違いを捉える
B3三	二つの詩を比べて読み、自分の考えを書く ※共通点や相違点の記載が条件

平成 26 年度国語B問題

本時の授業と合致する内容であり、平成 26 年度の課題の内容でもある。課題の対策として、平成 26 年度の授業アイデア例に「同じ作者の詩を比べて読み、考えたことを伝え合おう」が掲載されている。過去の結果に対しても、学校として蓄積があり、授業に生かしているからこそ、学力向上につながっていると考えられる。

(3) 授業の概要 (第5学年算数(基礎グループ):四角形と三角形の面積の求め方)

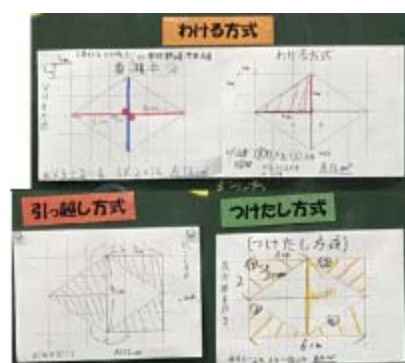
本単元では、教科書に掲載されている六編の短詩と学級で用意された詩集の詩から二つの詩を選び、共通する面白さを見付け、全ての児童に詩を比べて読む楽しさについて伝えることを目標としている。

本時は、共通する短詩の面白さを見付けるところである。児童は前時まで好きな詩は選んでいたが、その良さについて改めて本時で考え、更に友達の選んだ短詩の面白い点について交流することで自分の詩と共通する面白さを見付け、読み比べる楽しさに気付かせる内容である。

①児童の様子

児童は、既習事項を基にして新たな学びを生み出そうとする姿勢が身に付いており、本時の授業におけるひし形の面積の求め方についても、平行四辺形や台形の面積の求め方を想起し、自分の力で解決しようとする様子が全ての児童に見られた。

ひし形の面積について、児童は様々な考え方で求めていたが、どのように求めたのかを説明する際には、「わける方式」「引越し方式」「つけたし方式」といった言葉で説明をしていた。黒板下にあった掲示物には、平行四辺形の面積の求め方を



児童の様々な考え方

考えた授業の記録が残っており、「引っ越し方式」や「つけたし方式」を他の場面にも応用するきっかけを作り出すことにつながっていた。

また、「〇〇方式」という言葉を子供たちが自然に使って説明しており、どのように考えたのかを簡単に説明する上で役立っていた。

②授業者の取組

授業全体が対話を中心に成り立っており、「なぜ」や「どうして」といった言葉で授業者が説明を促す場面が多く見られ、アウトプットを大切にしているという学校の経営ビジョンを感じ取ることができた。

授業のまとめの場面では、ひし形の求積方法について様々な考え方を統合して公式を導いたが、どの考え方も(一方の対角線)×(もう一方の対角線)÷2に収束することを児童の発言で押さえることができおり、児童が自分の力で公式を導き出した実感の持てる授業となっていた。第6学年の算数(発展グループ)と同様に、日頃から児童の考えを関連付ける授業を重視し、積み重ねている成果である。

③学力・学習状況の改善との関連

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果、D小学校では基準量と比較量の関係を百分率で表す問題について、全国平均を35.8ポイント上回る結果を残している。教室には割合についての概念を丁寧に育んだ様子を感じられる掲示物があり、児童が日頃から授業の振り返りを行える環境が整っていた。授業での取組や教室環境などが影響し、良好な結果を残していると思われる。

また、示された説明を解釈し、用いられている考えを別の場面に適用して、その説明を記述する問題においても全国平均を32.6ポイント上回っており、上述したとおり、根拠となる事柄を説明する(アウトプットする)力が日頃の授業から育まれていることがうかがえた。

出題の趣旨(問題番号)	D小 (%)	全国 (%)
1を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解している(A9(2))	86.7	51.2
示された説明を解釈し、用いられている考えを別の場面に適用して、その説明を記述できる(B1(2))	77.8	45.4

平成28年度全国学力・学習状況調査における出題の趣旨と問題の正答率

F 小学校

学校全体で特別支援教育の考えを生かした「わかりやすい」
学びの場を設定することで、基礎学力と自分の考えを的確に
表現する力を向上させたと考えられる取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（昭和53年開校：分離新設）		
校区内中学校	1校		
学級数 生徒数	12学級 243名	第1学年 1学級（34名） 第3学年 1学級（34名） 第5学年 1学級（38名） 特別支援学級 3学級（12名）	第2学年 2学級（40名） 第4学年 2学級（43名） 第6学年 2学級（42名）
教職員数	32名	校長・教頭	各1名
		教諭	17名（うち養護教諭1名）
		事務職員	1名
		施設業務員	1名
		事務業務員	1名
		介助員	3名（特別支援学級介助）
		補助員	2名（学習支援）
		学習サポート， 心の相談員，ALT	各1名
		給食配膳員	2名

【学校の特色】

昭和53年に地区の宅地造成整備の進展に伴う児童の増加により、分離新設された学校である。学校は都道府県庁所在地の中心までバスで40分、乗用車で25分のところにあり、保護者の職業は会社員・公務員が大部分を占め、都道府県庁所在地への通勤者が多い。学校教育に寄せる期待や関心が高く、教育活動に対して協力的な家庭が多い。学校の特色として、障害を持つ児童との交流や異学年同士のふれあい、更に、保護者や地域の人たち、自然・文化などを活用した教育活動が挙げられる。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 就学援助率が30%を超える小学校において、国語Bにおける平均正答率：67.6%（全国平均58.0%）、算数Aの平均正答率：86.9%（全国平均77.8%）
- 算数AのC層7.3%、D層9.8%

②その他の注目すべき特徴

- 算数科の少人数・習熟度別指導を全学年で実施。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
80.5% (73.0%)	67.6% (58.0%)	86.9% (77.8%)	52.3% (47.4%)	34.1% (46.5%)	30~50%

2. 取組の背景

平成25年度の「全国学力・学習状況調査」では、4科目の合計が全国平均を32.7ポイントも下回っていた。当時の6年生は学力に課題のある児童が多かったことや、元々児童数の少ない学校であるため（母集団が小さく）、一人一人の数値の影響を受けやすいことが原因として考えられる。そのため、「学校改善プラン」を立ち上げ、「下位層の割合を25%以下にする」や「家庭学習の提出率を常時90%以上にする」など、具体的な目標を立てて、教育活動に取り組んだ。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

平成27年度には特別支援教育の考えを生かし、一人一人の教育的ニーズに応じつつも、学級における全ての子供が達成感や成就感を実感できる授業を構築する校内研究に取り組んだ。平成28年度には前述の研究を継続・充実させ、安心して学習できる場やどの子も意欲的に学習できる授業の構築に寄与している。また、学習指導や生活指導において、授業におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れるなどの研究も進めている。

①学習・生活規律についての指導

「〇〇（学校名）イズム」という学習、生活規律についての指導が徹底されている。内容としては、「学習活動（「聞く」「話す」「書く」など）のきまりの指導」、「学級生活（時間のきまり、清掃・昼食時など）のきまりの指導」があり、これらを全教室同じ場所に掲示している。これにより、児童は見通しを持ち安心して学習できるとともに、学校としても担任任せの指導ではなく、進級や少人数指導等で指導者が変わっても、学校として継続した指導ができる。



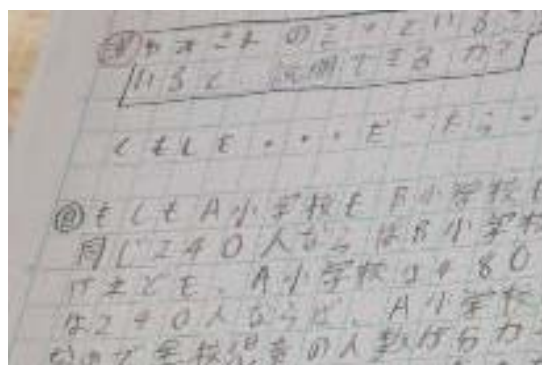
「〇〇イズム」：基本パターンを確立し、指導者が変わっても、見通しを持ち安心して学習できるよう教室等に掲示。

②授業の流れや内容がわかるような板書の構成

「板書とノートの一体化」を掲げ、学校全体で統一したノート指導を丁寧に行っている。日付、ページ、学習過程を示す記号（課題＝「課」、自分の考え＝「自」、まとめ＝「ま」）、ポイントを枠囲いする際のチョークの色使いなどを統一している。なお、ポイントを枠囲いする際は、オレンジ色のチョークを用いていた。これは、前述のユニバーサルデザインの考え方を踏まえ、赤よりオレンジの方が識別しやすい、という判断によるものである。児童の実際のノートも、個人差はもちろんあるが、考え方の過程が分かりやすく書かれていた。



「板書とノートの一体化」：ユニバーサルデザインの考え方を踏まえ、学校全体で統一した学習過程を示す記号を用いている。



板書と同じ記号を用いて、考えの過程を分かりやすくまとめている。

③よりわかりやすくするための視覚化

誰もが参加できる授業を目指すために、多様な学び方をしている子供に配慮し、学校の実態に合わせて、教材・教具の効果的な選択や有効的な活用を意識している。ICT機器の活用や自作プリント、ワークシートの工夫を行うことで、学習効果を高めることが期待できる。



ワークシートで考えをまとめ、意見を画用紙に書いて、学級で発表する際に提示。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 家庭学習のすすめ

「家庭学習のすすめ」(小冊子)を全家庭に配布し、課題(宿題)プリントを毎日発行している。児童も前向きに取り組んでいる。また、書店などで市販の問題集を購入し、それを家庭学習で行い、担任に添削してもらおう児童もいる。「家庭学習のすすめ」の中では「学年×10分」の取組を目安として提示し、学級通信や学級懇談の中で、保護者への協力を呼びかけている。保護者も学校からの呼びかけを受け止め、熱心に取り組んでいるという。

また、「朝のドリルタイム」(10分間を週3回)と「〇〇イズム」(前述)について、毎月「ふりかえりシート」を記入させ、児童自身の学習に向かう姿勢の振り返りを行っている。

(2) 落ち着いて学習に取り組むことができる環境づくり

今年度については重点目標を「進んでふれあい、生き生きと学ぶ子どもの育成～自他の良さを見つけ合い、豊かに学ぶ教育活動の実践～」として、全教職員で具現化を図っている。落ち着いた学習環境を整えるため、ロッカー内の荷物の整理整頓はもちろんのこと、視覚刺激の量への配慮として黒板周辺の掲示を整理したり全教室定位置に「〇〇イズム」を掲示したりするなどして、授業・黒板に集中しやすい教室環境にしている。

(3) きめ細かい学習サポート体制

市独自(市費)の学習サポート1名、補助員2名がおり、主に少人数指導に携わっている。学習サポートについては、本校の元校長で、地域活動にも参加し、学校の状況も十分理解している状況である。1時間の授業で大人が3人～4人もいる時があり、きめの細かい指導を可能にしている。特に低学年のうちから手厚い指導を行っている。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 教員の指導力向上のための取組

教務部の担任外である2名のベテラン教員が、すべての学級担任の授業を支援して回っている。学級数も12学級(特支含む)であるため、常にベテラン教員が担任に声を掛けることができる。ベテランから若手までが一丸となって教員の授業力を向上させる地盤が整っている。また、教員の指導力向上を図るために、次のような実践を推進している。

- 全教職員で行う授業研究会を年に2回行う。活発な意見交換がなされている。
- 教職員がブロックごとに(1～3年, 4～6年)自分の授業を全職員に公開する授業実践交流の機会を設けている。授業実践交流は月に1～2回は行っており、指導案検討だけではなく模擬授業を行うことが多い。若い教員にとって、子供の発言を引き出す力がつく良い機会になっている。
- 「日常の授業が大切」という考えで、15分だけでも授業を見合おうという交流を随時行っている。反省会を行うことが難しい場合は、参観者が授業の感想を書き、研究部で集約して授業者に渡している。

(2) 教育委員会の支援(施策)

- 平成26年度より、全普通教室にICT(電子黒板付きプロジェクター、スクリーン、実物投影機)が導入されている。国語の授業では、iPadを使ってテレビ画面に偉人の顔写真を提示しながら授業を進めていた。家庭科の「レシピづくり」や国語科の「新聞づくり」「パンフレットづくり」、さらに総合的な学習の時間や外国語活動で沖縄県の児童やタイ、フィリピンの児童とテレビ会議で交流するなどしている。
- ICT機器の活用については、単に機器を配置するだけではなく、その効果的な活用のため、市教委主催による研修会が毎年度行われている。
- 教育委員会に2名のスクールソーシャルワーカー(SSW)や特別支援教育専門家チームが置かれており、学校や担任と共に、不登校など特別に配慮が必要な児童・生徒への対応を行っている。

- 市教委では、全国学力・学習状況調査結果の公表後（9～10月）に、各学校の「学校改善プラン」に基づいて、市独自の「学力向上策ヒアリング」を実施している。ヒアリングの際に用いる報告様式には学力向上推進のための校内組織、学習規律、ノート指導、基礎学力定着のための工夫等を記載させ、取組を促している。
- 都道府県教委の管内教育事務所では、各学校に対して「学校改善プラン」の充実を求めており、数値目標の位置づけ、検証の時期や方法などについて教職員間で共有している。具体的な目標（4点）と改善策、実施計画について作成を求めている。また、「学力向上 Web システム」により「チャレンジテスト」を年間計画に基づいて配信し、各学年の学習内容の定着を図るために、市町村教委及び学校の計画的な学力向上の取組を促している。

（3）保護者や地域社会、外部機関との連携

- 再任用された元校長が学習サポートとして勤務し、教員へのアドバイスや児童への個別の学習支援を行っている。また、地域との連携についても一翼を担っている。
- 普段から、学校だよりを町内会に回覧しているが、全国学力・学習状況調査の結果については、「〇〇小学校の調査結果と考察」を作成（20ページ程度）し、これも町内会に回覧しているとのこと。本資料では、自校の結果の概要、課題が見られた問題、学習指導の改善の方向性について考察するとともに、児童質問紙の結果について、全国平均からの差を前年度との比較で示し、特徴をまとめている。課題が見られた問題については、実際の問題画像も掲載している。
- 当該資料は全家庭へも配布し、保護者に対する情報共有及び啓発を図っている。

（4）同一校種、異校種との連携

- 中学校校区を単位とする「校区小中連携推進会議」を設置し、年3回の会議を開催している。以前から、市内全域で年1回の小中ブロック交流会を開催し、授業参観や意見交換が行われてきたが、平成27年度に、中学校の教頭からの呼びかけにより、同校及び中学校区内の小学校教頭及び教務担当で構成する本推進会議が設置されることとなった。そこでは、児童生徒の実態や全国学力・学習状況調査、NRT学力検査（市内で実施）の結果などの情報交換を行っている。
- 中学校教員が小学校に来て出前授業（27年度は英語）を行い、中学校進

学に対する不安を和らげ、「中1ギャップ」の防止を目指している。

(5) その他

- ある月の学校便り表題が、「何を知っているか 何ができるか 知っていることを・できることをどう使うか どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」となっていた。学習指導要領改訂に向けた議論が意識されている。校長は教員一人一人に大きく影響する国の動きについては情報共有を図る必要があるとの問題意識で取り組んでおり、今後答申が出された時には、全職員に印刷をして配付する予定とのことだった。管理職が新しい学習指導要領にスピード感をもって対応できる体制づくりを目指している様子うかがえる。
- 管理職が中心となって、学校が一つのチームになっている様子うかがえた。すべての教職員がすべての児童を見守ることで、児童が安心して学習できていることが伝わってきた。

6. 授業を参観して

(1) 授業の概要（国語科）

人物の生き方についてグループ内で対話しながら紹介活動を進める授業である。伝記から人物の生き方を読み取り紹介し合うために、紹介したい内容や発表の構成を整理するためのワークシートを活用していた。発表では紹介したい人物をTVモニターで提示したり（ICTの活用）、事柄について分かりやすいフリップを作成したりするなどして、聞き手に分かるように工夫して紹介していた。

(2) 児童の様子（国語科）

「文の中に根拠を見つけよう」という教員の指導理念のもと、子供たちが懸命に本文を読み取ろうとする姿が見られた。多くの児童が文中に線を引いたり、キーワードをメモしたりして読みを深めていた。主体的に学ぶ子どもたちの姿から、学習意欲の高さうかがえた。前時までには、教科書の伊能忠敬の教材を使って同様の活動を行い、本時は、グループごとに異なった人物を取り上げ、人物についてまとめていた。児童は限られた時間の中で、グループで話し合う時間



実物投影機やTVモニターを活用し、聞いている児童が紹介されている人物をイメージしやすいように提示。

と自分の考えをまとめる時間のメリハリをつけ、懸命に根拠となる箇所を探し、まとめようと努力していた。グループの話し合いの中では、人物像（アムンゼン）について、「行動力がある」という意見を持った児童と、「念には念を入れる（＝慎重に行動する）」という意見を持った児童が議論していた。お互いが根拠となる本文中の記述を示して主張し合うことで、これまで気付いていなかった観点に気付いた様子が見られた。

（3）授業の概要（算数科）



ワークシートを活用し、活発に意見交換しながら、主体的に学ぶ児童の様子。

生活や学習に関わる問題について、既習の知識・技能等を活用し、課題解決のための構想を立て、筋道を立てて考えたり、数学的に表現したりする授業である。本時の活動は、2つの小学校の虫歯の検査の結果を取り上げていた。教科書の素材をベースに、2つのグラフには、全校児童数に占める虫歯のある児童の割合のみが書かれており、教科書では、「割合が大きいほうが人数も大きい」という考えが示された上で、これが正しいのか間違っているのか、間違っているのであればなぜ間違っているのか、というのを説明することが課題として設定されていた。

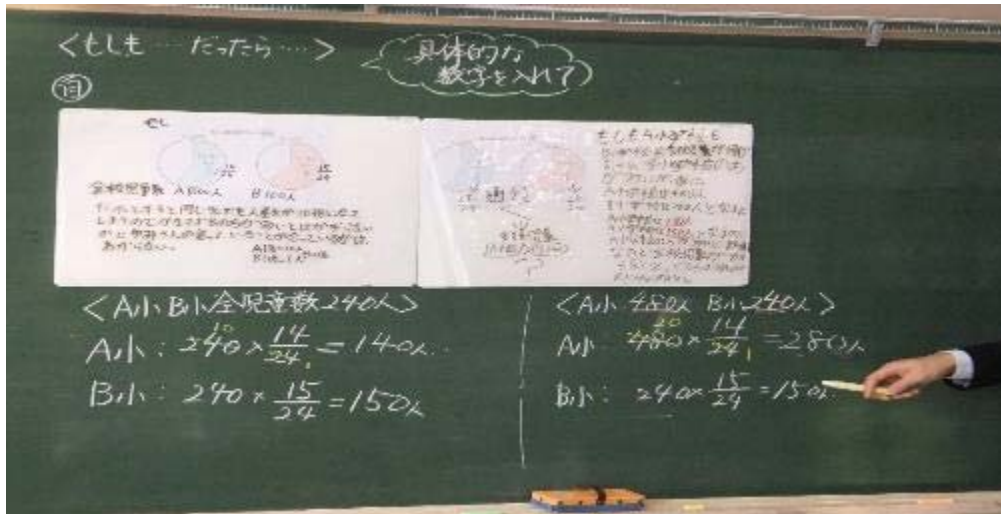
（4）児童の様子（算数科）

教員と児童の温かい関係の中で、テンポよく授業を進めている様子が印象的だった。授業の中で、教員が「どうして?」「なぜ?」と児童に問い直す場面が多く見られ、その度に発言をしようとする児童だけではなく、学級児童みんなでその理由を懸命に考えていた。一問一答で答えるのではなく、児童が持っている知識を活用して自分なりの答えを導き出す活動の様子から、全国学力調査の結果が伸びている理由を垣間見ることができた。児童によって理解度が異なる中で、「具体的な例を挙げて考えよう」と投げかけることにより、一人一人の児童が、自分なりの数字を設定し、問題意識を持って取り組む様子が見られた。また、班での意見交換や全体での発表の中では、発表した児童の説明内容について、教員が、他の児童に問いかけるなど、クラス全体で考えることができるような雰囲気を作り出していた。



話し合い、教え合いながら課題に取り組む姿が見られる。

お互いの考えを伝え合い、自分なりの考えを導き出すための話し合い。



代表児童（2名）が自分の考え方をホワイトボードにまとめて黒板に提示。2通りの考えを全体で共有し、教員が児童の説明を補いながら一人一人が理解できるように分かりやすく解説していた。

（5）授業者の取組

授業者は2名とも5年時からの持ち上がりで、当該学年の指導に当たるのは2年目である。児童が主体的に学ぶ姿から、学校全体で取り組んでいる3つの視点「授業のはじめに『見通す活動』を確実に位置づけた授業展開」、「授業の最後に『振り返り』を確実に位置づけた授業展開」、「言語活動のさらなる充実」を、両授業者とも学校において中心となって取り組んでいることがうかがえた。

① 図表やグラフを基に分かったことや自分を的確に書く学習の充実

自校の全国学力調査の調査結果から見られる課題の改善として、算数科や社会科においてもグラフを正しく読み取る力を身に付ける活動の充実に取り組んでいる。

本授業（国語科）では資料文から紹介したい内容（情報）を読み取り、自分が

紹介したいと考えた根拠を明確にして表現（発表）させる力を伸ばす意図が感じられた。

限られた時間の中で集中して取り組む児童の様子から、日頃の授業でこのような学習活動が意図的・計画的に実践されていることが見てとれ、効果を上げていることがうかがえた。

②文章題の中にある数量の関係を正しく捉える指導の充実

算数科においては自校の課題の改善として、算数における文章を読む力を伸ばすために、文章から分かること、その問題で求めることを明らかにした上で、図に表すとどうなるか、式にするとどうなるかを考えさせる指導の充実に取り組んでいる。本授業（算数科）では、自分が考えたことを筋道を立てて記述したり、説明したりする学習活動が設定されており、既習事項の定着や活用を図ろうとする授業者のねらいが感じられた。自分の考えを持ち寄って話し合ったり、他の児童による全体での発表を聞きながら考えたりすることで、一人一人の児童が自分の考えを見直し、理解を深めている様子が見られた。このような学習活動が基礎基本の定着や表現力を高める上で効果的であると考えられる。

G小学校

「そろえる指導」、「つなげる指導」で学力向上に取り組んだ取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（昭和48年開校）		
学級数 生徒数	13学級 269名	第1学年 2学級（36名） 第3学年 2学級（41名） 第5学年 2学級（46名） 特別支援学級 2学級（9名）	第2学年 2学級（43名） 第4学年 1学級（40名） 第6学年 2学級（54名）
教職員数	28名	校長・教頭	各1名
		主幹教諭	1名
		教諭	16名（うち養護教諭1名）
		事務職員，学校用務員，支援員，ことばの教室担当等	

【学校の特徴】

中核市に設置された学校。市街地中心部からは離れているが、幹線道路が近くを走り、商業施設が多い地域にある。「笑顔いっぱい チャレンジいっぱい 楽しい学校生活を」をキャッチフレーズにして、「みずから学び 行動する子」を学校教育目標に掲げている。「生活習慣の形成」、「学習習慣の形成」、「組織的な授業改善」、「読書指導の充実」、「体力向上への興味関心を高める取組」、「環境美化に関する取組」、「安全・防災教育の充実」の7項目を重点実践事項として、児童が、深く考えやりぬく子・明るく心豊かな子・からだをきたえがんばる子になるように日々の教育活動を行っている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 調査対象児童の就学援助率が30%～50%である小学校において、
 - ・国語Bの平均正答率：69.1%（全国の同カテゴリの平均：54.2%）
 - ・算数Bの平均正答率：53.8%（全国の同カテゴリの平均：44.1%）

②その他の注目すべき特徴

- 学校の授業時間以外の勉強時間について、
 - ・ 普段（月～金曜日）の日の1日当たり勉強時間が1時間以上である児童の割合：90.8%（全国平均：62.5%）
 - ・ 学校が休みの日の1日当たり勉強時間が1時間以上である児童の割合：85.2%（全国平均：57.0%）

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
78.9%	69.1%	83.1%	53.8%	27.8%	30～50%
(73.0%)	(58.0%)	(77.8%)	(47.4%)	(46.5%)	

2. 取組の背景

全国学力・学習状況調査が開始された平成19年度以降、平均正答率は市内でも低く、20年度～22年度（22年度は抽出調査）においては、都道府県内でも特に低くなっていた。また、学校の状況としては、学習・生活環境に乱れが見られる状況にあった。例えば、遅刻する児童が多数（記録上遅刻でなくとも、始業ぎりぎりの登校も多い）見られたり、問題行動が多発したりしていた。さらには、家庭学習のみならず、宿題も満足に取り組むことができていない児童が多く、学習習慣を含めた家庭への支援も不可欠な状況であった。

こうした状況の中で、平成21年度に現在の主幹教諭が本校に着任した。学力や学習状況に課題が見られながらも、校内で特段の対応を行う動きが見られない中で、学校を変えたいと思う有志の教員と共に取組に着手することとなった。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

（1）そろえる指導、つなげる指導：「〇小（学校名）学習スタンダード」の確立

2. で述べた状況を踏まえ、学力の向上や学習状況の改善に取り組むに当たり、教職員が指導内容等をしっかりと共通理解することが必要であった。6年間本校の教育を受ける子供たちに対して、担任が変わっても指導内容は変わらない（＝「そろえる」）状況を作り出すとともに、原則2年ごとに学級担任が持ち上がる中で、担任が替わっても低学年からの指導内容が一からの指導し直し（極めて非効率）にならないよう、積み重ねを大切に、次の学年へ「つなげる」指導を行うことを目指した。

①経過

○ 平成23年度～

当時、本校ではいわゆる学習規律が明文化されておらず、教務部を中心に、その策定が急がれた。このため、主幹教諭となった教諭と後任の教務主任等が中心となって、他の都道府県の視察を行ったり、同じ中学校区の3つの小学校による意見交換の機会を設けたりしながら、指導内容を決め、全校的に指導する取組を始めた。

様々な学校の情報を得ながら取組を継続する中で、他校では、学習規律に相当する内容について、指導内容を絞り、キーワードにまとめて掲示するような例も多く見られたが、短い言葉では具体的な指導内容がぼやけてしまい、結局、細かな点は統一して指導ができずに、教員間での指導のブレが生じることが危惧された。

このことから、本校では、短い言葉ではなく、指導内容が分かるように、一日の時系列の順に具体的な指導内容を文で表す「○小学習スタンダード」の確立を目指した。

○ 平成26年度～

前年度までの取組を踏まえ、「○小学習スタンダード」としての実施がスタートした。そのスタンダードは20項目にわたり非常に細かく指導内容を規定しているものである。まずは、学級担任が理解することが求められ、次に地域及び家庭（保護者）を巻き込んで指導すること、さらに意識化と繰り返しによる確立・定着に向け、主幹教諭や教務主任等が中心となって進めていった。

確立・定着に向けた取組については、学級の実態を踏まえつつ、学期ごとの重点指導内容を決めたり、月ごとや毎日の目標を決めたりして、意識的に指導するなどの工夫を行うこととした。また、平成26年度に着任した現校長の提案により、学期末の振り返りの際、児童自身の数値による評価（4段階の自校評価）も盛り込むこととした。児童による定量的な評価と、担任等による定性的な評価を集約して、主幹教諭から各担任等へフィードバックを行った。

②「○小学習スタンダード」の内容

○小学習スタンダードには、児童自身が取り組むべき事柄を、家（朝）・教室・授業前・授業中・家（下校後）の5つのカテゴリで示している。

毎学期、身につけて実践できたかを振り返るチェックシートには冒頭に次のような文言が記載されている。

この「〇小学習スタンダード」は、みなさんの学習を下から支える大切な約束です。一つひとつ大切な約束なので、一人ひとりが、しっかりとこの約束を知り、守っていく事が大切です。これらの約束は、〇小学校全てのみなさんが守っていくものです。学年が上がったり、担任の先生が変わったりしても、取り組むことは同じです。

はじめは、なかなかできないことでも、意しきして取り組んでいくうちに、できるようになっていきます。少しずつでもできることをふやしていきましょう。

チェック項目はとても具体的に書かれていて、児童が振り返るときに自分の姿を思い起こしやすいものであるとともに、どのような行動をとることが望ましいのかが、よく分かるものになっている。次は授業中の項目の一例である。

じゅ業時間中は、担任の先生や話している人の方を向き、目を見て話を聞き、大事だと思ったことはメモをしながら話を聞くようにしましょう。友だちの意見を聞く時は、自分の考えとくらべながら聞きましょう。

(2) 家庭の協力を得て行う生活習慣の改善と家庭学習の定着(家庭学習ノート)

平成23年度からの取組のもう一つの大きな柱が、学力に特化した取組ではなく、生活習慣や家庭学習の習慣化の取組である。以前までは、学校でいくら指導しても、週が明けると元に戻ってしまったり、宿題プリントを出しても、「それだけやればいい」という雰囲気、それ以上の自主的な学習へは発展していかなかった。そこで、「学校での指導は限界があるから、家での生活を変える」という意識の下で取組が進められた。

① 生活習慣の改善

生徒指導部を中心として、朝ごはんを食べること、早寝早起きの励行、家庭学習の啓発の3点を課題とした生活実態調査を定期的に行い、結果を示しながら改善策などを啓発していった。現在では、学期に1回「生活リズムチェック」を実施し、起床・就寝時刻、勉強時間、テレビ・ゲームの時間、朝食を食べたかどうかについて児童の振り返りの機会を設けている。特徴的なのは、児童のみならず、保護者も自身の生活を振り返るためのチェック欄が設けられているところである。また、保護者の振り返りのコメントも記載することとされている。保護者自身にも生活リズムを考えてもらい、家庭と学校とが連携して生活習慣の改善が図られるようにしている。なお、児童及び保護者の振り返

りコメントが学校からのたよりとして発行され、フィードバックがなされている。

②自主的な家庭学習の習慣化

前述の取組の過程で、家庭学習の目標時間をどうするかが議論となった。議論を通じて、そもそも、「家庭学習は必要である」との共通認識は図られたものの、「何をどのように行うのか」という点に関する共通理解までは至ることができていないことが明らかとなり、教務部を中心として改善に着手することとなった。

まずは、家庭学習とは何か・どういうものかということについて、以下のとおり、教務部からの提案を基に、教員の共通理解を図った。

- 「6年間」,「自ら」考えて,「自ら」取り組む態度を育てる。
(「6年間」と「自ら」はキーワードとして位置づけ)
 - ・家庭学習は基本的には「自学自習」であり,教員はそのサポート役に立つ。
 - ・担任が替わったからといって家庭学習が変わるものではない。
 - ・家庭学習「ノート」という形をとることによって,児童がノートに愛着を持ち,それ自体を増やしていくことの喜びやさらなるやる気を育てる。
- 子供たちの頑張りを認め,励ます。
 - ・必ず保護者や教員が,毎日,児童がやってきたことに目を通し,一言のコメントを添えて戻す。

平成23年度当初,「家庭学習ノート」の取組を開始し,各学年及び学級における実践が手探りの中でスタートした。1学期終了後,各学年の取組内容及び成果を学校内で交流し,集約した結果を,保護者向け啓発資料としての『家庭学習のススメ』(全体像を示す)と『子どもの学びだより』(実践紹介,実際の子供たちのノートの好事例を掲載する)にまとめ,2学期の学芸発表会や個人面談開始のタイミングに合わせて配布した。

現在は,毎年度版の『家庭学習のススメ』を発行するとともに,実際の家庭学習ノートを校長室前に並べ,児童が自由に閲覧できるようにしている。同学年の児童の取組に加え,上級生のノートを見ることで,児童の意欲向上が図られている。さらに,学校行事等で保護者が来訪した際にも閲覧してもらい,保護者への啓発につなげている。

また,中学校区で連携して「家庭学習強調週間」を設けており,中学校の定期テスト前2週間について,中学生は2時間以上,小学生は普段よりもプラス10分家庭学習に取り組むよう,保護者へのたよりを通じて協力を依頼している。さらに,夜8時以降は保護者が携帯電話等を預かることとする「携帯・ス

マホ・ゲーム利用時間制限週間」を合わせて取り組むこととした。

なお、本項とは間接的な関わりとなるが、1年生から6年生までの学習用具について、家庭が見通しをもって購入できるよう、各学年で購入が必要となる用具について一覧化し、保護者へ配布している。

平成28年度版 **家庭学習のススメ**

基本方針

子どもたちが自ら家庭学習を進められる学習環境をつくり、自主的に学ぶ家庭学習について1年生から取り組むことができるようにする。

また、子どもたちの「**この6年間の自主的な学び**」を段階的に定着させるように支援し、自ら学ぶ自学習の態度を育てる。

自ら キーワード

目指す子ども像

6年間

このなご子、育ってほしい…

ノートを使いながら、自分なりに工夫して使おう!

ノートの使い方や時間などの約束

- 日付を書く
- 開始(終了)時刻を書く
- 学校同様、ていねいな文字で書く
- 必要に応じて、赤ペン、青ペン、蛍光ペンなどを使う
- 最後に個人の感想を書く
- 明日へつなげる簡潔なコメントとチェックした日付を書く
- 担任の先生や保護者からの効果的なアドバイスを!
- これにより、子どもたちのやる気上がり、継続的な取組へと近づいていきます!
- 時間については、学年×10分を当初の目安とする。
- 低学年…30分、中学年…1時間、高学年…1時間以上という目安もあります。
- 担任の先生や保護者から出されたアドバイスなどがある場合は、先にそれらをやってから、「自分の家庭学習」に取り組む。
- 家庭学習が終わったら、「翌日の学習を想像しながら」時間割や持ち物の確認をする。

家庭学習の段階(学年等での区分けではなく、個人の自主性の度合いによりステップ1~3を設定 6年間でステップ3へ!)

ステップ1	ステップ2	ステップ3
<p style="text-align: center;">ステップ1</p> <p style="text-align: center;">＜自主性の度合い＞</p> <p>主に教師や保護者の主導のもと行われる家庭学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ＜国語的な学習＞ ○教科書などから提示される文字や言葉を一文字ずつていねいに書く ○教科書を声を出して読む(音読) ○教科書の文をていねいに書き写す(複写) ○音書き練習(習った文字や、漢字を使って) ○日記 ＜算数的な学習＞ ○教科書などから提示される数字を一文字ずつていねいに書く ○その日習った計算問題などと同じ問題も手一冊書き写して解く ○その日習った計算問題などの数字を換えて解く ○形遊び(まる、さんかく、しかく) ○その他の学習など ○好きな本や図鑑の本を読む ○縦書きをつける ○好きな歌や鍵盤ハーモニカなどの練習 ○縄跳びやランニングなど 	<p style="text-align: center;">ステップ2</p> <p style="text-align: center;">＜自主性の度合い＞</p> <p>ステップ1程度の学習が習慣化され、ある程度自主的な取り組みができるような家庭学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ＜国語的な学習＞ ○新出漢字などを一文字ずつ調べてていねいに書く ○音読カードなどを使った計画的な音読 ○言葉遊び(反対語、ことわざ集め、季節の言葉、新しい言葉など) ○短文作りや作文(テーマを決めて) ＜算数的な学習＞ ○自分で問題作り ○形遊び(コンパスや分度器の使い方に慣れる練習) ○身近な算数探し(長さ、かさ、重さ等) ＜その他の学習など＞ ○疑問に思ったこと(思っていること)を調べる ○新聞の切り抜き(テーマを決めて) ○図鑑調べ ○リコーダー、ケンパ、縄跳び、ジョギングなどの自主的な練習 	<p style="text-align: center;">ステップ3</p> <p style="text-align: center;">＜自主性の度合い＞</p> <p>自主的な取り組みによる家庭学習(自学自習が身につけている状態)</p> <p>※長期休暇中も継続できる力</p> <ul style="list-style-type: none"> ＜国語的な学習＞ ○教科書のポイントまとめや要約 ○読、俳句、短歌作り ○テーマを決めての継続的な読書 ○苦手な克服する取り組み(読み、漢字、文作りなども含めて) ＜算数的な学習＞ ○自力問題 ○教科書のポイントまとめや文章題作り ○苦手な克服する取り組み(計算、図形、速さ、割合等) ＜その他の学習など＞ ○家庭科の学習を生かした料理や手芸 ○園芸などの学習を生かした創作活動 ○10分間走や縄跳びなどで持久力をつける運動 ○インターネットを使って自分が調べたいことなどのレポートを作成する学習

学習環境作り

子どもたちが自主的によく学んでいくために、以下の様な家庭での環境作りへの取組をお願いします。

- 時刻の設定をする。(決まった時刻になったら、机に向かう。時計を見る習慣をつける。開始時刻と終了時刻のメモ)
- 学習に必要なのは机に置かない。(きちんと明かりをつける。または明るいところとする。)
- 「ながら勉強」はしない。(テレビ、食事、ゲーム、インターネット、携帯電話など)
- 筆箱や辞典、鉛筆削りなど必要な物ははじめから用意しておく。
- 休憩時間を適度にとる。(はじめから集中力はそれほど持続しません。)
- ノートを準備する。(ノートの形式などは担任の先生と相談する) ※表紙なども工夫する。
- 少しでも毎日取り組む(時間は少なくとも、机に向かう習慣付けを図る)
- スケジュール表などを作ったり工夫する。(初めは学級などで同じ形式で取り組むことあります)
- 「ノートテレビ(ゲーム)デキ」などと、具体的な努力目標を一緒に考え、設定し、実践する。
- 「家の過ごし方」について各家庭での約束(就寝、起床時刻の設定、バランスのよい三食摂取、お手伝いなど)をしっかりと守らせ、生活の中に「自分なりのリズム」をつくらせるよう支援していきます。

学習環境作り

子どもたちが自主的によく学んでいくために、以下の様な家庭での環境作りへの取組をお願いします。

- 時刻の設定をする。(決まった時刻になったら、机に向かう。時計を見る習慣をつける。開始時刻と終了時刻のメモ)
- 学習に必要なのは机に置かない。(きちんと明かりをつける。または明るいところとする。)
- 「ながら勉強」はしない。(テレビ、食事、ゲーム、インターネット、携帯電話など)
- 筆箱や辞典、鉛筆削りなど必要な物ははじめから用意しておく。
- 休憩時間を適度にとる。(はじめから集中力はそれほど持続しません。)
- ノートを準備する。(ノートの形式などは担任の先生と相談する) ※表紙なども工夫する。
- 少しでも毎日取り組む(時間は少なくとも、机に向かう習慣付けを図る)
- スケジュール表などを作ったり工夫する。(初めは学級などで同じ形式で取り組むことあります)
- 「ノートテレビ(ゲーム)デキ」などと、具体的な努力目標を一緒に考え、設定し、実践する。
- 「家の過ごし方」について各家庭での約束(就寝、起床時刻の設定、バランスのよい三食摂取、お手伝いなど)をしっかりと守らせ、生活の中に「自分なりのリズム」をつくらせるよう支援していきます。

6年間で自学習の家庭学習習慣

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 継続的な授業研究の取組

3. で述べた取組と並行して、児童の実態を踏まえ、言語活動を意識した授業改善の研究等が進められるとともに、「基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用」「思考力を高める授業」といった全体的な課題への対応が、研究部長や主幹教諭を中心として継続している。

(2) きめ細かな児童へのサポート (3. も参照)

3. で述べたほかにも、児童の学校への適応の状況を把握し、児童毎の学習内容の差をフォローするための取組が行われている。

① 児童理解に向けたアセス

1学期と2学期に、児童生徒への“アセス”(「学校環境適応尺度」に基づく質問紙調査。記名式)を実施しており(1年生は口頭での聞き取り、2年生はより簡単なアンケート)、調査結果を入力すると、各児童の生活満足感、教師や友人からのサポートなど、6つの因子の状況について分析ができるようになっており、「困っている」児童をデータからも確認している。一定の

結果が見られた児童には、校内の「子どもサポート委員会」（個別の支援、特別な配慮が必要な児童の情報を共有する校内組織）とも連携して、支援を行っている。

②長期休業中の学習サポート

長期休業中、原則として3年生以上の希望者を対象に学習の場を提供し、校長・教頭を含めた全教員に校区内の中学校の生徒（＝本校の卒業生）のボランティアも加わり、指導に当たっている。休業中の課題や自主学習ノート、個人で用意した教材など、内容は自由であり、指定された3日間の午前中、希望に応じて参加ができるものとなっている。実施後には教員や児童にアンケートを取り、振り返りを促すとともに、次回以降の実施の改善に役立てている。

5. 授業を参観して

(1) 算数（第6学年算数：資料の調べ方 散らばりの様子を調べよう）

①主体的な個の学びを充実させる取組

デジタル機器を効果的に活用して、資料の調べ方について見通しを明確にし、その上立って個の学びを展開していた。また、前時までの学習で獲得した資料の特徴を考察する際の着眼点（見方）を想起させ、多様な観点から考察することを促し、個の学びの充実を図っていた。



②個の着眼点に基づいて、考察結果をまとめるグループ学習

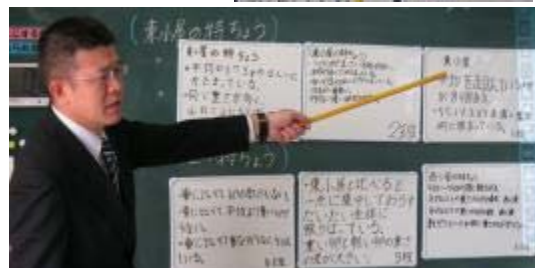
個の学びに基づいて、資料の散らばりの様子を確認し、資料の考察の結果をグループ毎にまとめていた。ここでは、個々の児童で異なる多様な資料の見方を、グループとしての統一した意見としてまとめることを目的として、自己の見方を発表する場を充実すると共に、必要な情報を整理してまとめる学習が展開されていた。



③グループ毎の考察を関連付け、新たな考察の観点の創出を意図した取組

グループでの学びに基づいて、全体で考えを交流する場面では、各グループのまとめの発表に基づき、互いの考えを観察し、関連付けることで、さらに深い考察を意図した学びが展開された。この発表においては、グループ毎に、発表する内容をコンパクトにまとめ直したミニホワイトボードを基に、資料から明らかになったこと（考察結果）だけを発表する工夫がなされ、自他のグループの考察と比較を容易にする工夫がみられた。

また、6つのグループの着眼の共通点に基づき、教師が、資料を再度観察し直すことを促し、互いの考察を確認したり、資料の特徴を深く学び直したりする学習が展開されていた。



④授業における取組の具体化

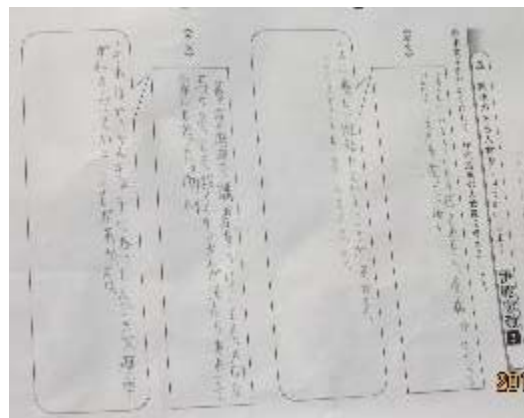
伝え合う力の育成に向けて、算数の授業においては、次のような学校全体の取組の具体化がみられた。

- 自分の着眼やそれに基づく考察（表現）を確かに形成するための、資料を考察する観点の想起・明確化
- グループ学習において、自分の考え（考察）を表現する場の保障
- 小集団における自他の考えの洗練・再表現
- 学級集団において、グループの考えを表現する場の保障と自他の考えに基づく、更なる考察の場づくり

(2) 国語（第6学年国語：興味ある人物をしょうかいしよう）

本題材は、興味ある人物について伝記を読み、その伝記を紹介することを目的に指導計画を作成していた。

本時においては、まず、教材文を手がかりに伊能忠敬の人物像を考え、自分なりの考えをつくることを行った。



①人物像を捉える着眼点を広げる交流活動

まず、個人で教材分を読んで伊能忠敬の人物像を持ち、次に多面的に捉えるために、ペアで互いの人物像の捉えとその根拠について交流していった。ここでは、個々の児童で異なる人物像を捉える根拠となる文章を確認し、着眼点を広げる学習が展開されていた。



②ペアでの交流活動に基づいて、再度、人物像を考え直す活動

ペアでの学びに基づいて、学級全体で人物像の捉えを交流する場面では、同じ捉え方をした児童が何名いたかを確認しながら、その根拠となる文章が複数あることを明らかにしていった。



さらには、学級全体での交流に基づいて自分の人物像の捉え方を振り返り、再度人物像について学び直す学習が展開されていた。

③授業における取組の具体化

伝え合う力の育成に向けて、国語の授業においては、次のような学校全体の取組の具体化がみられた。

- 自分の人物像の捉え方やその根拠となる文書をペアで確認するとともに、自分の考え（考察）を表現する場の保障
- 学級全体での交流における自他の考えの洗練・再表現

H小学校

「傾聴作文」によって、児童の聴く力を伸ばし
数直線図の系統的な活用等で、割合の理解を促す取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（昭和49年開校）		
学級数	15学級 375名	第1学年 2学級（56名）	第2学年 2学級（59名）
生徒数		第3学年 2学級（53名）	第4学年 2学級（63名）
		第5学年 2学級（72名）	第6学年 2学級（53名）
		特別支援学級 3学級（20名）	
教職員数	31名	校長・教頭	各1名
		教諭	23名（うち養護教諭1名）
		講師・助教諭	1名
		司書	1名
		事務主幹，学校校務員，給食事務，ALT等	

【学校の特徴】

首都圏近郊にある小学校の教室の窓からは、高速道路のインターチェンジが間近に見える。「よく遊び よく学ぶ 心豊かな子」という教育目標のもと、今年度は、目指す子ども像として①「にこにこ」と笑顔で元気にあいさつができる子②「きらきら」と輝く瞳と汗で勉強や運動に取り組む子③「もくもく」と集中して掃除や仕事ができる子④「きびきび」と時と場に応じて集団行動ができる子の、4つを設定している。

また、学習と緑化活動とを融合させたテーマを基に、特色ある学校づくりに取り組んでおり、緑化推進活動についての表彰を受けたこともある。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 全国的に課題が見られた国語B[2]ー（グラフを基に、分かったことを的確に書く）の正答率：81.1%（全国平均：43.5%）
- 全国的に課題が見られた算数A[9]（2）（1を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解する）の正答率：84.9%（全国平均：51.2%）

②その他の注目すべき特徴

- 平成 27 年度調査では、どの教科も全国平均正答率には届かなかったが、今年度は、全国平均正答率と比較し国語Bで 13.9 ポイント、算数Aで 14.3 ポイント、算数Bで 15.9 ポイント上回った。
- 昨年度は、国語Bや算数A・Bの下位層の児童が 20%程度いたが、今年度は4%程度に激減した。さらには、学力の散らばりを示す標準偏差の数値も、昨年度と比べ、算数Aで急激に減少（3.3→1.8）した。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
75.3% (73.0%)	71.9% (58.0%)	92.1% (77.8%)	63.3% (47.4%)	26.4% (46.5%)	10~20%

2. 取組の背景

大都市圏の小学校で近年見られる状況の1つに、学校組織が若手中心の年齢構成となっていることがある。本校も、五十代は校長と事務職員、四十代は教頭と数人の教諭のみであり、女性の平均年齢は30歳を少し超えた程度である。こうした若手教員が多い職場を組織として機能させていくために、校長は日々頭を悩ませている。学力向上の要でもある若手教員の授業力をどうつけていくのかということが、喫緊の課題となっている。

2年前の本校の状況は、決して学力水準が低いわけではなかった。どの教科も全国平均正答率を多少超えていた。しかし3年前は決して良くなかった。いわば、学力水準が安定している学校とはいえなかったのである。

小学校は、学級担任制であり、学力向上に関しては担任の力が大きい。どんな担任が学級を担当するかで、大きく学力を左右する面がある。学校全体として、恒常的に学力の安定化を図る必要性に迫られていた。

こうしたことを解消する方策の一つが、ベテラン教諭の再任用である。K教諭もその一人だ。算数の少人数担当として、4つの学年の算数指導を一手に引き受けている。一週間のうち3日間の勤務である。残りの2日間は、K教諭と同様、再任用であるU教諭が担当している。二人の教諭は当校で退職を迎えた後、継続して勤めているため、学校事情や児童のことを誰よりも知り尽くしている。6年生2クラスの担任（32歳の男性教諭・26歳の女性教諭）に、日々様々なアドバイスを丁寧に行っている。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 全校児童が定期的に行う『傾聴作文』

校長は赴任して2年目。もともと、聞くことの大切さを感じ実践していた。赴任当初、児童全体が、どちらかというところではできていると感じていた。一方、6年生だけは、聞くことについて少なからず課題を感じていた。このことは、昨年度の全国学力・学習状況調査の結果が芳しくないことから明らかであった。

赴任して7か月目、当初から考えていた『傾聴作文』を全校児童にさせてみた。毎月行われる全校集会とは別に、校長自らが5分間程度の話を放送で流す。児童は、その話を教室で聞いて、感想等を書く。書いたものには、すべて校長が目を通す。こうした地道な取組を始めた当初は、あらずじしか書けない児童が多いように感じられたという。校長が丁寧に赤ペン入れをしながら、徐々に自分の考えを付け加えさせるようにした。

『傾聴作文』の取組は、2か月に一度程度続けられた。話の内容を自分に取り入れ、自分らしい意見が表現できている作文には賞状を与えた。細かな漢字の間違いも丁寧に添削した。クラス全体として、なかなかよい作文に高まらないクラスもあった。そんなときは、担任を呼び、ほかのクラスのよい作文を示しながら、どこがどのように良いのかを担任に考えさせるようにした。良いものを見せ、まずは真似てみることの大切さを、校長は常に強調していた。

(2) 数直線図の系統的・継続的指導

たとえば「百分率」であれば5年生で扱う学習内容である。一方、算数で扱う様々な図的表現は、すべての学年で登場するが、その図的表現をどの学年のどこの単元で教えるかは、やや曖昧である。こうした状況において、当校では、教科書の教師用指導書に掲載されていた『数直線図系統表』に基づいて、まずは教師自らが、様々な数直線図をかくことができるように、4月に職員研修を行った。児童が数直線図を使えるようにするためには、まずは教師自らが使えるようになり、そのよさを知ることが大切であると考えたからであった。K教諭は、「自分が使えてこそ、初めて力になります」「高学年の算数につながっていくのは、最終的には数直線図だと思います」と強調していた。

なお、『数直線図系統表』については、現在使用している教科書の教師用指導書に載っていたものを改良して使っているが、たとえそれが身近になかったとしても、教科書に出てくる様々な数直線を集め、それらをつなげていくことで、指導の順序が把握できる。教科書に出てくる算数的な表現方法

を読み取り、使えるようにならなければ、決して児童の算数の力は高まらない。

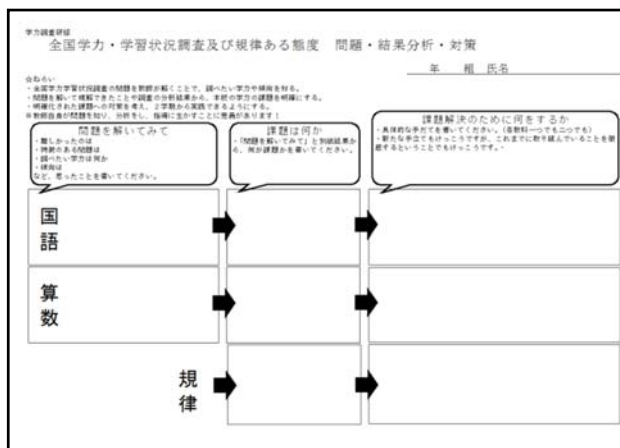
4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 校内研修のありかた（教職員をどのように育てているか）

①全教員で調査問題を解いて、校内の課題を共有したり、授業改善のポイントを確認したりする。

右のプリントは、教頭が提案し、夏休みに職員研修で使ったものである。実際に全国学力調査の問題を解き、そこから課題を見つけたうえで、さらにその課題を解決するために何をすればよいかを考え、みんなで共有した。

当該教育委員会が大切にしている「規律」という指標も、ここには加えられていた。



②よいものをモデルとして取り入れる場の提供

若手教員が授業を見て学ぶ場が十分に確保されている点が、本校の特徴である。新採用教員に対しては、一学期のほぼ半分、K教諭が実際の算数授業を見せてきた。一人一人の児童を大切にしながらも、狙いを明確にして確実に学力がついていく様子を、目の当たりにすることができるのである。ベテランで卓越した授業力のあるK教諭は、児童の発言を肯定的に受け止める。また、発問をした後も決して慌てることなく、児童の顔を見ながら間をおいてから指名する。一人一人の児童の反応を楽しみ、そこから授業づくりをしている。言葉で説明することが難しい授業づくりの根幹や雰囲気作り等を、体で学ぶことができるのである。

振り返ると、すでに紹介した『傾聴作文』も、「良い作文を見せる」という手法であった。良いものを具体的に示し、モデル化させていくことが、共通点として挙げられる。

③外部とのつながり

本校は、今年度、市の委嘱による学力向上推進研究校として算数を、そして道徳教育推進研究校、県の道徳教育推進モデル校として道徳を、授業改善の中核にすえている。算数についての研究は5年目を迎える。

④「放課後マイペース教室」の開催

毎週金曜日、3年生以上の希望児童を対象に、「放課後マイペース教室」

を開催している。ここでは、退職教員等が講師となり、補習を30～40分程度行っている。

(2) 少人数であるよさと、凡事徹底

今年度の6年生児童数は53名である。もともとの2クラスを習熟度で3つに分け、下位のクラスで11名、中位クラスで19名、上位クラスで23名ずつになる。一方、昨年度の6年生児童数は66名であった。下位クラスを10名と想定すると、中位上位クラスはそれぞれ28名ずつである。この28名は、今年度は各クラスの在籍児童数26名と27名より多い。「確かに昨年度の6年生は少し落ち着きがなかった」と校長は言う。少ない人数で教師から手厚く見てもらえる学年と、多い人数で授業を受けざるをえない学年が存在する。この微妙な人数の違いは、特に授業力が発展途上にある若い教員にとっては大きな違いである。

低位のクラスの児童は、一人一人が皆、生き生きとしていた。その半面、中位や上位のクラスの児童の中には、途中から集中力を欠く児童も見られた。22名であったとしても、児童一人一人に気を配り、授業をすることは、やはり難しい。現在の5年生は74名である。やはり、昨年度の6年生と同様、やや落ち着きに欠けるといふ。指導が行き届く学習集団の人数が、学力向上の大きな要素となっていることも考えられる。

帰りがけ、見送ってくれた教頭に、「何が一番、学力向上に働いたと思いますか」という質問を直接投げかけた。少し考えた後、「やっぱり凡事徹底ですかね」というこたえが返ってきた。何事であっても、やりきることの大切さを改めて感じた。

5. その他の特色ある取組

(1) 3つの図書館

当地域は、「日本一の読書のまち」として、読書活動の推進に邁進している。その中でも、特に当校は、市内で唯一3つの図書館を持ち、それらを使い分けている。

また毎月23日は家庭読書の日と決め、様々な取組を行っている。さらには教師が、お気に入りの本を選び、読み聞かせをする「ブックバイキング」という取組や、「子ども司書養成講座」の取組がある。



環境にも恵まれているうえに、様々な趣向を凝らした読書推進活動が日常的に行われ、児童の学力や学習状況の改善の基盤となっていることが考えられる。その結果として、児童の読書量は1か月に1000冊程度増加した。

(2) 応用力をつける取組

本校では、1か月に一回ではあるが、8時20分からの15分間、「はげみ国語」「はげみ算数」として、応用力をつけることに特化した時間を設定し、取り組んでいる。

6. 授業を参観して

(1) 第6学年国語：『鳥獣戯画』を読む

①授業の概要

教材文「『鳥獣戯画』を読む」について、「筆者が自分の見方を読者に伝えるために、表現や構成で工夫していることを見つけよう」という課題を、すでに前時に設定している。本時は、その課題をグループで解決していく場面であった。

②児童の様子や授業者の取組

授業開始から、しっかりとしたあいさつが聞こえた。教室はもちろん校長室にも掲示してあった以下の『授業の心得』は、本校の設置者である教育委員会が、すべての小中学校で取り組ませていることである。

授業の開始

- 1 あいさつをしっかりとします。(動きを止めて 先生と目を合わせて)

授業中

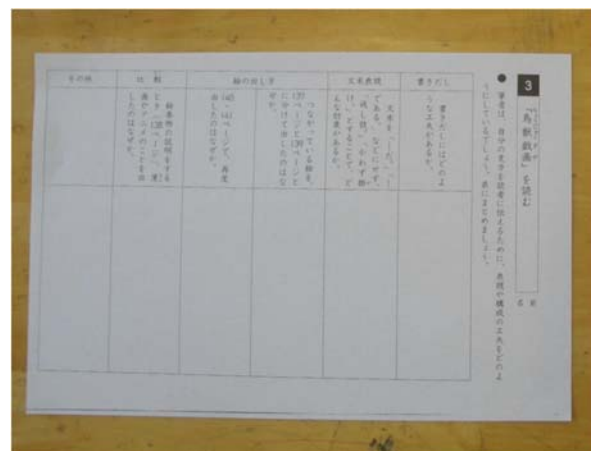
- 2 発言をするときは手をあげます。
- 3 名前を呼ばれたら「はい」と返事をし、起立をします。
- 4 発言している人の話を、目と耳と心で聞きます。
- 5 正しい姿勢で授業を受けます。(居眠り、横座り、立ち歩きはしません)

授業の終了

- 6 あいさつをしっかりとします。
- 7 授業に必要なものを準備します。
- 8 ゴミのない環境にします。

同席していた指導主事の話によると、かつて中学校を中心に荒れが見られたそうだ。それを何とかしたいと考え、まずは学習規律を整えようと始めた取組であった。これらは、ある意味では当たり前のことかもしれない。しかし、市内どの小中学校でも、これらの基本的な学習規律を徹底させていることに驚いた。実際、ここのクラスも、学習規律をととても大切にしているように思えた。

授業者は右のプリントを配付し、まずは一人一人にじっくりと考えさせた。どの児童も与えられたテーマに対して書き慣れている。『傾聴作文』の効果の一つであると考えられる。



④学力向上との関連

A教諭は授業冒頭、簡単な漢字テストを行った。また、谷川俊太郎の詩の音読をさせた。授業開始時には、基礎学力を定着させるため、漢字力と音読力を大切にしている。

授業全体としては、個人でのプリント記述、そしてグループでの話合いであったため、全体の場で発言する機会はなかったが、一人一人の児童の声はよく通っていた。



(2) 第6学年算数：比例

少人数指導を行っていた。単元前にレディネステストを行ったうえで、児童の希望に基づいてグループ分けをしている。H 小学校の低学力層が減少している要因を探るため、主に学力が低位のクラス（11名編成）を中心に参観した。

①授業の概要

比例の学習である。底辺の長さがどれも4cmで、高さが1cm～7cmと変化する平行四辺形を7つ提示し、面積は高さに比例するかどうかを問う問題である。前時までには比例の表を横で見る学習を終わっている児童に、縦に見る見方（x, yの対応）に触れ、 $y=x \times 4$ という式で関係を表すことができると理解させることが、本時のねらいとなっている。

②児童の様子や授業者の取組

授業冒頭から、とても丁寧に授業を進めている様子が伝わってくる。問題を

みんなで読ませるときも、「4cm」を「よんセンチ」とだけ言ってしまう児童がいる。そんなときは、しっかりと「よんセンチメートルだよ」と優しく問いかけ、言い直しをさせる。

授業を通じて印象的だったことは、問題文や授業者の発問に正対させていることだ。たとえば、最初提示された問題文「上の平行四辺形（底辺は4cm）では、面積は高さに比例しますか。高さ x cm、面積 y cm²として、2つの量の関係を、表を使って調べましょう」という課題に対して、K教諭が「何を考えたらよい問題だろうか」と発問した。それに対して、「面積は高さに比例するかどうかを聞かれています」と、問題に対して正対した答え方となっているのかどうかを教師が聞き取り、不十分であれば言い直しをさせている。まさに、言葉のキャッチボールを落ち着いて行っていた。



③学力向上との関連

他の2つのクラスでも、同じ学習問題を使っていた。当然、習熟度が違うので、授業の流れも変わる。しかし、その時間でどうしても押さえておかなければいけない学習内容を外さないように、事前に綿密な打合せをしている。

また、全体の発表をさせる前には、必ずペア学習を取り入れている。これは、相手意識を持たせたくて、自分の考えを表出する機会を増やす目的がある。

Ⅰ 小学校

児童の姿を見届けて評価する取組が学習規範の形成に寄与し、複数の資料を比較・検討する活動が自分の考えを明確にすることの基盤となっていると考えられる取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（明治6年開校）		
校区内小学校	—		
学級数 児童数	28学級 790名	第1学年 5学級（145名） 第3学年 4学級（112名） 第5学年 3学級（110名） 特別支援学級 4学級（19名）	第2学年 4学級（135名） 第4学年 4学級（143名） 第6学年 4学級（126名）
教職員数	69名	校長・教頭	各1名
		教諭	40名（うち養護教諭1名，栄養教諭1名）
		講師	6名
		司書	6名
		事務職員，校務員，図書整理員，調理員等	

【学校の特色】

県庁等の官庁施設と県立美術館等の文化施設が校区内にあり、駅や国道の整備による商業地域としての発展もめざましい一方で、田園地域も残る多様性のある地域である。学校・家庭・地域をよりよく結ぶための指標となる「〇〇（地域名）子育てプログラム」に基づいた取組を進めてきており、平成24年度からは「コミュニティ・スクール」として、さらに学校・家庭・地域の三者が一体となって子供たちを育てることを大切にしている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 全国的に課題が見られた国語B \square 二（1）（目的や意図に応じて、グラフや表を基に、自分の考えを書く）の正答率：78.6%（全国平均：51.5%）で、全国上位。

②その他の注目すべき特徴

- 国語Bの正答率が、平成26年度から全国平均を上回り安定
25年度47.8%(全国平均49.6%) 26年度62.8%(全国平均55.6%)
27年度67.6%(全国平均65.6%) 28年度59.4%(全国平均58.0%)

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
71.6%	59.4%	76.9%	48.8%	48.4%	10～20%
(73.0%)	(58.0%)	(77.8%)	(47.4%)	(46.5%)	

2. 取組の背景

ある時点から、特に学力向上に取り組み始めたというわけではない。

今年度の6年生に限定した説明は次のとおりである。現校長が本校に赴任したのは4年前であり、今年度の6年生は当時3年生であった。本校は1学年4クラスの大規模校であるが、現校長が赴任した当時は、当該の学年は課題の多い状況であったという。その原因を特定することは難しいが、1年生の時には教室に入らないなどの児童が多数見られた。この状況を改善すべく、「5年後を見据えた教育」を意識することを全教職員で確認するとともに、「見届けて、評価する」ことを大切にして日々の取組を進めてきた。

3 学力の向上に寄与し、学習状況が改善した学校の取組

(1) 説明や交流の場の設定と工夫

各教科の授業において、「話すこと、聞くこと」を大切にしている。そのような理念のもと、授業のなかで説明する活動や考えを交流する活動を重視している。具体的には、例えば、授業中の意見交流を経て、子供が自分の最初の考えを変容させていく流れや、他者の意見を共感的に聞く、ということを重視しており、「目標を持つ → やりきる → 話しきる → 自信を持つ」というサイクルを大切にしている。

また、各クラスには話型の掲示があり、それらの話型を子供がアレンジして話すことで、子供が自信を持って発言できるようになっていると推察される。意見交流の場での相互作用を繰り返す中で、例えば、記述式設問における、自分の考えの表現の仕方が身につく、という可能性はあるだろう。

(2) 複数の資料を比較・検討する活動の重視

1つの事象や資料だけを見て考えるのではなく、複数の事象や資料を見て比較・検討する活動を大切にしている。これは、特定の教科に限定して取り組んでいるのではなく、いろいろな教科で共通して取り組んでいる。

自分なりの考えを持ったり、自分の考えを明確にしたりするためには、単一の事象や資料をもとに考えただけでは不十分であり、複数の事象や資料を比較・検討する過程を経ることで、自分の考えを持ったり、より明確にしたりできるようになる、という意図が込められた取組である。

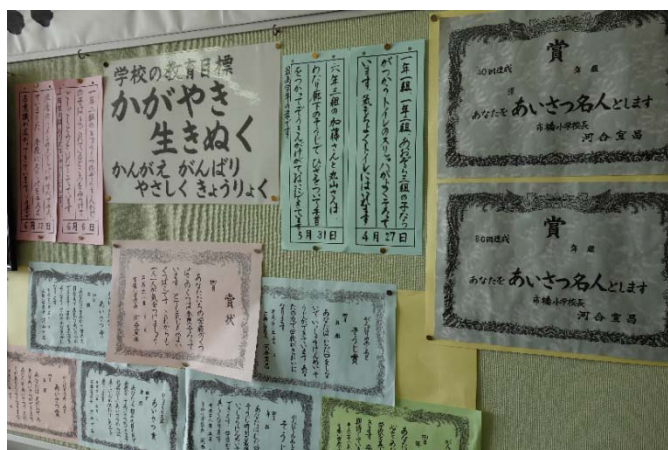
4 学力の向上や、学習状況の改善を支える学級づくり

(1) 重点目標の設定と日常的かつきめ細かな評価活動（表彰制度）

入学した1年生の5年後を見据えた教育を意識することを教職員全員で確認し、見届けて評価することを大切に取組を進めてきた。

学校の教育目標は、「か（考え）が（頑張り）や（優しく）き（協力）生き抜く」であり、これらは知・徳・体を表現したものである。この目標をもとに、4つの重点「あいさつ」「掃除」「話す・聞く」「整理・整頓」を設定し、教員による見届けと価値付けを重視している。具体的には、例えば、校長自ら授業を参観するなどして児童の良さを見出し、校長から児童へ表彰状を渡している。校長の説明によると、毎日400枚、年間5万枚程度の表彰状を渡すという。これらの評価の取組（表彰制度）が児童の学習規範の形成の基盤になっていると推察される。

また、校長は子供を表彰するための情報収集という目的で校内を巡回したり授業を参観したりするのだが、このことが副次的に、担任以外の者が学級経営に間接的に関与し支援することを可能にしており、授業の質的向上の基盤となっているとも考えられる。同時に、管理職や第三者が授業中の教室に入ることは、授業がオープンな状態であることを意味しており、組織内の風通しの良さを担保することにもつながっていると考えられる。



(2) 授業力の向上に資する仕組み

教頭を中心とした若手教員の授業力向上のための仕組み「チーム〇〇（学校名）」があり、経験年数が比較的少ない教員のスキルアップに取り組んでいる。

本校のある都道府県では校種間（小学校と中学校）の人事異動はごく一般的に実施されており、小学校教諭であっても専門教科が明確である。本校の今年度の校内研究の対象は道徳であるが、各教員が自分の専門教科を持っており、その教科を軸に授業改善に取り組んでいるという。つまり、校内研究の対象教科である道徳を基盤とした上で、授業改善に関連して全体で議論し、その成果を自身の専門教科に応用させる、というスタイルで、教員の授業力の向上を実現するための仕組みが構築されていると解釈できる。

(3) 全教職員の意識を共通化するための仕組み

全校で意識を統一するための仕組みとして、学習指導部という組織が設定されている。これには、各学年から1名が所属し、例えば社会科の授業で国語の要素を含む学習内容を検討したり、教科と道徳との関わりを考えたりするという。この学習指導部での議論が各学年に還元され、全教職員の意識の統一に寄与していると考えられる。

5 授業を参観して

訪問調査では、国語（1年2組、6年4組）、社会科（5年2組）、道徳（6年1組）の4つの授業について、各々の授業の一部を参観した。

参観した4つの授業のうち、社会科の授業では、課題の導入の場面での資料に基づく予想を、児童が根拠を明確にして長文でまとめている様子が見られた。また、授業冒頭で様々な予想や仮説設定を行い、資料や実験観察、他の児童の考えなどと比較検討を通してアイデアをまとめていく活動が、様々な教科の授業で見られた。

先述のように、校種間（小学校と中学校）の人事異動はごく一般的に実施されており、小学校教諭であっても専門教科が明確である。今年度の6年生について、5年生時の担任の専門教科は、社会科、理科、技術科、体育科ということであった。

今回、訪問調査を実施するに当たって注目した国語Bの正答率の結果は、道徳や教科の学習活動を通して得られた学習規律が効果をあげていると考えられるが、直接的な因果関係を明確にすることはできなかった。

(1) ベテラン教員による児童一人一人に配慮した学習指導

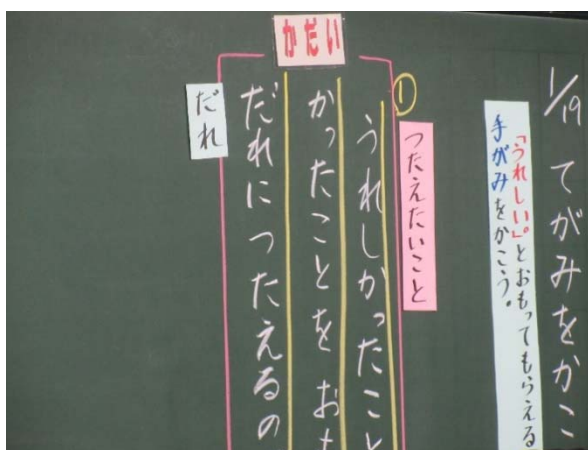
よく発言できる児童のみならず、どの児童も自分の思いを発言できるよう、ベ

テラン教師の経験知が生かされている。具体的には、授業中の教師の位置や視線等が工夫されており、それらの配慮のもと、発表者の児童だけでなく、周囲の児童も発表者に身体を向け、発表者の発言を最後まで聞こうとしている様子が見られた。



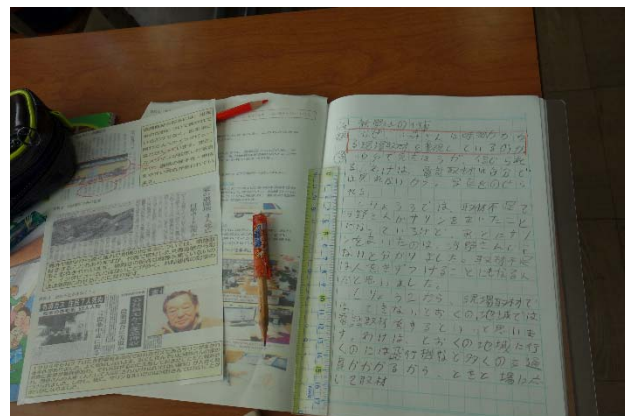
(2) 自分の伝えたい思いを膨らませる、児童にとって価値の高い課題設定（国語）

例えば、手紙を書かせる場面で、漠然と文章を書くのではなく、誰に、どんな思いを伝えたいのかをまず明らかにして、その上で手紙を書くという流れを大切にしている。すなわち、児童に作文の目的を明確に意識させたり、指導によって必然性のある学習課題の設定が工夫されたりしている様子が見られた。



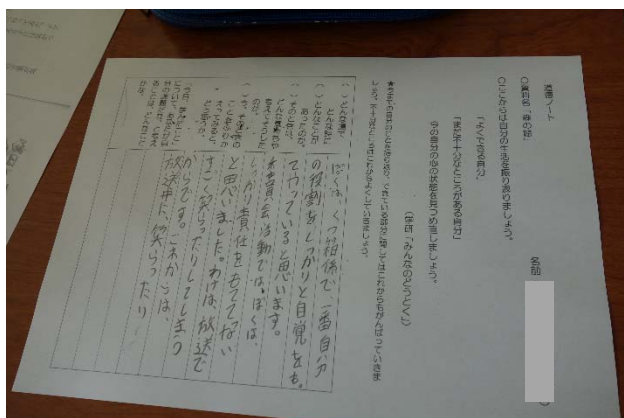
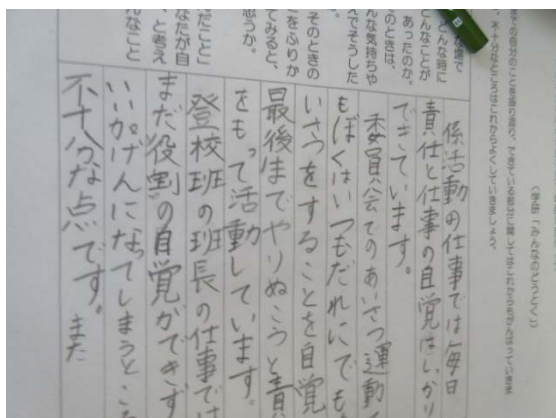
(3) 複数の資料を比較・検討する学習場面の工夫（社会）

自分の考えを明確にさせるための学習場面として、複数の資料を扱う場面を設定し、それらを比較・検討することを大切にしている。



(4) 教科等の特質を踏まえた学習のまとめ（道徳）

それぞれの学習のまとめとして、当該教科等の特質やねらいを踏まえ、学習のまとめを記述する時間や場面を位置付けている。



6 その他の特色ある取組

(1) 全国学力・学習状況調査の活用

全国学力・学習状況調査に関連して、県教育委員会が調査分析ソフトウェアを開発している。本校では、その分析ソフトを利用し、経年変化を実施したり、県や全国との結果の比較等を丁寧に実施したりしている。それらの分析結果をもとに、指導改善プランを立案し、改善に取り組んでいる。

また、全国学力・学習状況調査の実施後に、児童全員の答案をコピーし、教員全体で採点し、課題の洗い出し作業を実施している。これらの採点・分析作業を経ることで、調査対象の6年だけでなく、1年から5年までの担当教員にとって

も、授業改善に対する多くの示唆を得ることができたという。同時に、下学年の担当教員にとっては、6年生になったときに身につけているべき力を再認識し、指導改善に役立てる意識も定着したと解釈しているという。

J 小学校

読書活動や、数量の関係を表す図の指導によって、
下位層の児童割合が減少し、割合の正答率が上がった取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（明治5年開校）		
学級数 生徒数	15学級 313名	第1学年 2学級（43名） 第3学年 2学級（59名） 第5学年 2学級（45名） 特別支援学級 3学級（18名）	第2学年 2学級（52名） 第4学年 2学級（49名） 第6学年 2学級（47名）
教職員数	33名	校長・教頭	各1名
		教諭	21名（うち養護教諭1名栄養教諭1名）
		講師	2名
		司書	0名
		主事，管理員，教育補助員，介助員3名，特別支援介助員2名等	

【学校の特徴】

本校は、日本海側に位置する人口約30万の市内にあり、今年度で144周年を迎える。各学年は2クラス編成であり、今年度の6年生は48人在籍しているため、各クラス24人と、常に少人数での学習が可能となっている。

本校の教育目標は「深く考える子 仲間とともに生きる子 すなおに感動する子 じょうぶで強い子」である。教員経験20年以上のベテラン教員が52%、10年以上になると83%にも上り、全体的に落ち着いた雰囲気がある小学校である。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 全国的に課題が見られた算数A⑨(2)(1を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解する)の正答率：83.3%（全国平均：51.2%）で、全国上位。

②その他の注目すべき特徴

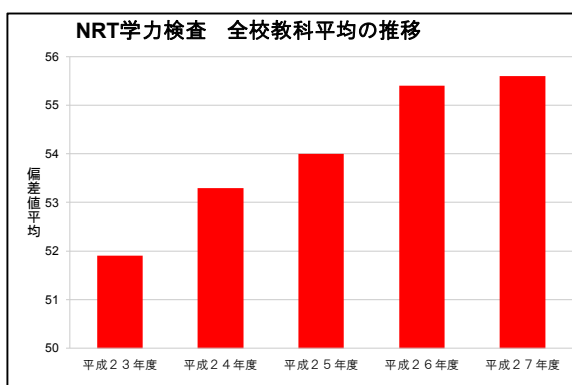
- 全国的に課題が見られた算数A \square 8(全体の大きさに対する部分の大きさを表す割合の意味について理解する)の正答率：89.6% (全国平均：74.5%)
- 国語Bにおいて、学力層下位のCD層が 18.9%
- 算数Aにおいて、学力層下位のCD層が 13.2%。16問すべて正答となっている児童が、29.2% (全国では17.5%) を占める。
- 算数Bにおいて、学力層下位のCD層が 15.1%
- 児童質問紙において、否定的な回答(4件法における選択肢3と4)が全くない問いが、以下のとおり複数ある。 ※【 】内は全国の割合
 - ・「学校に行くのは楽しいと思いますか」【13.6%】
 - ・「学校のきまりを守っていますか」【8.4%】
 - ・「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」【5.7%】
 - ・「学校で、友達に会うのは楽しいと思いますか」【3.7%】
 - ・「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」【3.4%】
 - ・「家で、学校の宿題をしていますか」【3.0%】

【参考：基本データ】※()内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
78.6%	70.6%	86.3%	56.6%	55.3%	5%未満
(73.0%)	(58.0%)	(77.8%)	(47.4%)	(46.5%)	

2. 取組の背景

現校長は赴任して1年目であり、過去の経緯を詳しくは知らない。しかし、6年1組担任でもある研究主任は5年目、教務主任は6年目であり、J小学校の過去の様子をよく知っている。様々な話を聞くと、このJ小学校が、過去において落ち着いていなかった時期があるらしかった。



訪問した当日は、元気のよいあいさつがあちらこちらで聞こえてきたが、教務主任は「6年前は、こんなにあいさつも良くなかった」という。また、同席していた指導主事も、「昨年訪問した時とは、また違う。年々あいさつがよくなっています」と話している。J小学校は、平成22年や平成24年の抽出調査時においては、抽出対象校となっていない。また平成23年は未実施であるため、平成22年から平成24年にかけての具体的な学力実態が分からない。ただし、学校から提供していただいた民間の標準学力検査によると、平成23年や平成24年は、現在より学力が低位であったことがわかる。

学校の様子としては、特別な支援を必要とする児童に対して、学級担任ひとりが対応できない場面も見られたという。学校全体として、決して安定しているとはいえない状況があったのである。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 学校の中核となっている読書教育

①機能を分けている二つの図書館

もともと一つであった図書館を、本の種類によって二つに分けた。一つは、『おはなしの部屋』、もう一つは『はかせの部屋』である。前者は読み物だけであり、物語の世界にどっぷりと浸かることができるよう、静かな3階に位置している。一方、後者は調べ学習の際に使う本だけが集められている。



②ボランティアと連携した図書館運営

本校に、専任の司書はいない。しかし、図書館自体を土曜日に地域開放している関係で、外部の方の支援が集まりやすい環境にある。その中心になるのが、保護者・地域のボランティアであったり、近くの専門学校に通っている学生であったりする。図書館内部の飾り付けや、本の整理等をやってもらっている。

③著名人を招いての「読書講演会」

毎年、絵本作家等を招いて講演会を行っている。今年度は、地元出身の児童文学作家の斎藤惇夫氏であった。

(2) 聞くことの奨励

低学年の頃から継続して「聞く力」を付けてきた。そのために、どの教室にも右のような掲示物がある。教室の中で落ち着いて聞く態度を身に付けながら、学級全体の雰囲気も良くなり、素直さを身に付け、難しさにへこたれない精神力が育っていく。



(3) 学びのユニバーサルデザインの推進

本校は、たとえば「今日のメニュー」として、授業の一時間の流れが一目でわかるように工夫するなど、児童にとっての配慮がされている。

視覚優位（目で見て理解することが得意。言葉のみの説明は理解しにくい）の児童には、適切な視覚教材をもって来る。また、聴覚優位（耳から入る情報を理解することが得意。文字や図形を正しく認識しにくい）の児童には、読む・聞くの活動に重点を置く。プリントを減らし、書く負担を減らすという取組もあった。J小学校では、年に三回、児童の情報を交流する会がある。そこでは、学びにくさを抱えている児童を特定し、決して担任一人で抱え込まずに、特別支援の知見を生かしながら、みんなで解決を図っていく雰囲気がある。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 人間関係づくり

学力形成の基盤として、安心して話ができることや、自分が話したことを静かに聞いてもらえる環境ができています。それを支える活動が、学年を縦断した縦割り活動である。

(2) 学年部ごとの個人研修計画の提出

研究主任の発案で、個人の研修計画を出させている。各教員が、自分で授業力をつけたい教科等を設定し、学年部で協力しながら指導案づくりを行う。また、全員ではないものの、指導を受けたい講師を自ら選び、そこから指導を受ける機会もある。

5. その他の特色ある取組

(1) 気になる児童への個別指導

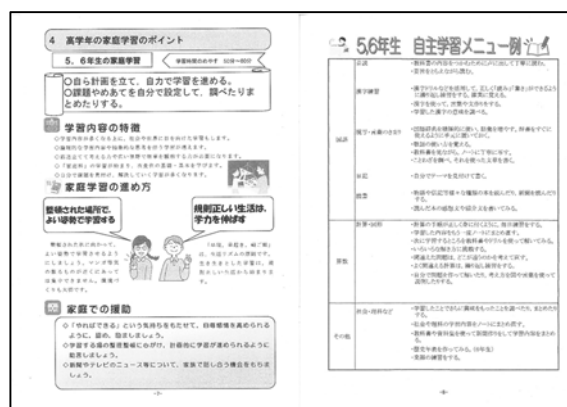
当市では、特別支援のための介助員のほかに、各校に「教育補助員」が配置されている。J小学校では、毎年行っている民間の標準学力検査「国語」「算数」において偏差値が40未満の児童を「気になる児童」として追跡するとともに、算数の授業を中心に、個別指導を行っている。

その結果、現6年生については、1年生のときに8人いた「気になる児童」が、2年生で3人、3年生で2人、4年生から5年生で1人まで減少した。

担任は、あらかじめ教育補助員に対して、予想される児童のつまずきと、その際の支援方法を伝える。授業後、教育補助員は、児童のつまずきを担任に伝え共有する。

(2) 家庭学習の手引き

家庭学習のポイントやメニュー例を提示して、入学時、保護者に知らせている。この取組みが、家庭学習の充実につながるとともに、児童が主体的に学ぼうとする態度の育成にもつながっている。



6. 授業を参観して

(1) 第6学年国語：『生きる』

①授業の概要

谷川俊太郎の『生きる』という詩の学習である。これまで各連の読み取りをしてきた。本時は、各連の読み取り終了後、「『生きる』全体から伝わってくることを考えよう」という課題を提示した。

まずは自分で考えさせた後、グループで交流させ、その後全体に発表する形態であった。

②児童の姿

まずは、課題に対する考えを一人一人がプリントに書き始めた。プリントの上段には「『生きる』から伝わってきたこと」、下段には理由を書くスペースがある。どの児童も、抵抗感なく文章を書くことができることが印象に残った。

次に、自分が書いた文章を基にしたグループでの話合いである。普段から行われているためか、自然に交流していた。必要に応じて修正している姿も見られた。

③授業者の取組

N教諭は、当校に赴任して3年目。当初から4年生を担当し、途中クラス替えをしながら、そのまま6年生まで持ち上がっている。

授業後、授業者に、なぜ「作者が伝えたいと思ったこと」を聞くのではなく、「全体から伝わってくることを聞いたのか尋ねてみた。「各連で作者が伝えたいと思ったことは、すでに学習している。本時では、全体として捉える視点を持たせながら、自分にとって何が伝わってきたのかを交流させたかった」ということであった。

④学力向上との関連

本時後の構想としては、「わたしの『生きる』をつくろう」という課題になる。これまで学習してきたことを基にした、いわゆる創作である。N教諭は、「子どもたちは読書量が多いためか、創作させたときに語彙が豊富であることを感じます。それは、きっとたくさんの文に触れているからでしょう」と語っていた。読書活動が活発である当校らしい。

(2) 第6学年算数：割合（応用）

①授業の概要

研究主任も務めているT教諭の授業である。こちらの要望で、割合に関する授業を見せてほしいとお願いしたため、本来は5年生で扱う割合の、やや難しい問題を解決する授業を見せてくれた。学習問題は、以下のとおりである。

消費税8%をふくめて、定価が675円の品物があります。このとき消費税は何円になりますか。

一般的には難しい問題である。なぜならば、問題文中にある675円と、求めなければいけない消費税どちらもが、比較量であるためである。つまり、問題解決の過程で、675円（比較量）から一旦、消費税を含まない価格（基準量）を求めた後で、消費税（比較量）を求める必要があるからである。二

段階で解決する問題である。



想定していたのは次の課題であり、普段から指導している4マス図（後で詳述）と関連付けながら解決することを期待していた。

675円は「もとにする量（基準量）」なのか「くらべられる量（比較量）」なのか、どちらなのだろう。

実際の授業では、やや4マス図にこだわりすぎたことと、割合の表し方でやや混乱が見られたことなどから、想定していたようには進まなかった。

②児童の姿

割合に関しては、これまで2本の数直線など、思考するための図を指導してきたが、やや使いづらい面を感じ、授業者は下のような「4マス（関係）図」を主に使わせてきた。

※「4マス（関係）図」とは、右のように、問題に出てくる関係を簡潔に図で表したものだ。この場合は、1500円をもとにしたときの0.2に当たる数量を□円としたもの。□円が、比較量となる。

1500円	□
1	0.2

割合については、5年生の3学期以来の学習であったためか、やや問題解決時に、混乱している面が見られた。本来、前述したとおり問題文中には基準量が存在しない。問題文に基準量が存在しない中で、675円が基準量か比較量かを検討させていた。正確に問題文にある数値等の関係を表すと、次のような6マスの図になる。（最上段にもラベリングすると、一層、関係が見えやすい。）

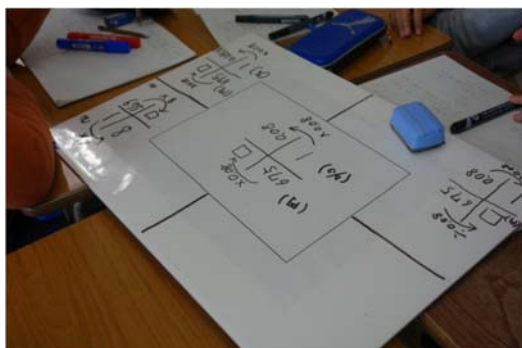
ある数値等の関係を表すと、次のような6マスの図になる。

（最上段にもラベリングすると、一層、関係が見えやすい。）

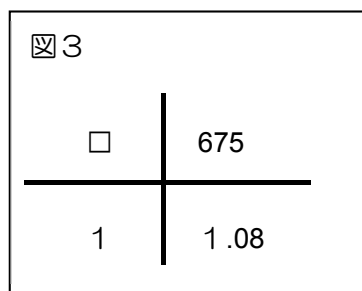
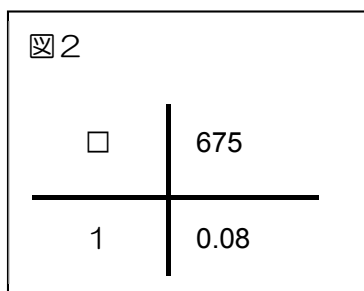
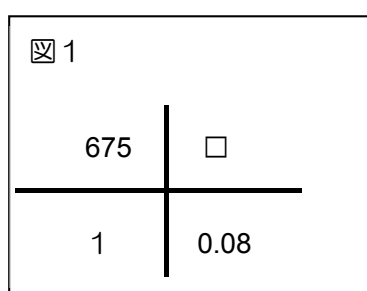
（消費税）	（消費税含まない）	定価（消費税含む）
x円	□円	675円
0.08	1	1.08

この関係性が見通せる児童にとっては、「675円は、比較量である」ことは明らかであるが、上の図で表している675円、0.08（ただし8%という

百分率と混乱している児童もいる)しか表現されていず、x円を求答させようとしているので解決が難しい。



案の定、4マス図を書かせても、課題が与えられた後、ほとんどの児童は、次の2つの4マス図を書いていた。この段階では、どちらも正解ではない。1.08という割合が見いだせていないのである。



4マス図の検討が始まり、児童それぞれが考え始めた。この段階では、消費税を□として考えているため、図2は□が明らかに675より大きくなると捉えていた。ただ図1であったとしても、 $675 \times 0.08 = 54$ となり、あたかも正解のように見えてしまう。この段階で、1人の児童が図3でははないかと主張し始めた。675円を「もとにする量」とすることに違和感をもったものと考えられる。

すぐに児童は解決できなかったものの、1.08という割合が出てきてから、納得する児童が増えた。ただし、よく考えると、この場合の□部分は、もとにする量であり、問題文中で出てくる未知数(具体的には消費税)ではない。このあたりに、このような2段階で解決する複雑な問題を扱う場合は、問題場面をイメージする数直線や線分図が必要であったのではないかと感じた。

③授業者の取組

1.08という割合が児童から出てからは、全体的な話も正答に向かい、「 $675 \div 1.08 = 625$ $675 - 625 = 50$ 」と、スムーズに出てきた。ただその前段階においては、大変苦労している様子が見えた。

問題に対して解決に向かわせる際、実際には「625円は、もとにする量か?くらべられる量か?」と「割合はどう表すか?」という二つの課題を並べてしまったこと、そして複雑な場面を4マス図に置き換えようとしたために、多少の混乱が生じたと考えられる。

ただ、これまで4マス図を使わせてきたことは、授業の中から感じられた。その一つが、左の写真にも見られる矢印を使ってそれぞれの関係を見ようとしていたことである。矢印のマークと「×0.08」の文字が見える。このような関係を矢印を使って日頃から表現させているため、あまりにも桁外れな数値を出す誤りをするのが少ない。そして割合に対する感覚も研ぎ澄まされていく。日頃から、問題場面を図に表して数量の関係を捉えさせる指導が、割合問題の正答率に表れていると考える。

④学力向上との関連

4年生以上では、通常の計算ドリルは使用せず、考えることが楽しくなり、発展・応用の問題も掲載されている問題集を与えている。これをするにより、思考力・判断力・表現力等が高まっていくという。

K 小学校

教師集団の意思統一を図り、地域や保護者とともに様々な取り組みを継続することで、自己肯定感を高めていった取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（昭和60年開校：分離新設）		
学級数 児童数 （調査日現在）	18学級 443名	第1学年2学級（67名） 第3学年2学級（69名） 第5学年3学級（86名） 特別支援学級3学級（12名）	第2学年3学級（73名） 第4学年3学級（85名） 第6学年2学級（63名）
教職員数	28名	校長・教頭	各1名
		教諭	21名（うち養護教諭 1名・司書教諭 1名）
		講師	2名（常勤）
		事務職員	事務副主査 1名
		介助員	1名
		施設管理員	1名

【学校の特徴】

隣の県庁所在市のベッドタウンにもなっている市にあり、住宅街の中にある学校である。市内には著名な史跡が数多くあり、歴史のある地域で、祭りも盛んである。隣の小学校から分離し、平成28年度に創立32年目を迎える。開校以来、「〇〇（地域の名前）の歴史と自然に学び、感謝の心と笑顔をいつも忘れず、誇りをもってたくましく生きていく児童の育成をめざす」を教育目標に掲げ、「たくましい子」「よく考える子」「仲よくする子」を目指す子ども像に、教育活動を進めている。多くの学校行事があり、子供たちは意欲的に取り組んでいる。

校地内には、芝生を植えた区域がある運動場や土俵がある。また、整備が行き届いた観察園やビオトープがあり、様々な果樹が植えられている。

平成28年度に、市の「総合的な学力向上研究」の委嘱を受けている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 児童生徒質問紙項目「自分には良いところがあると思う」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：80.6%（全国平均 36.3%）
- 児童生徒質問紙項目「国語の授業の内容はよくわかる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：80.6%（全国平均 36.5%）
- 児童生徒質問紙項目「算数の授業の内容はよく分かる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合 77.4%（全国平均 46.8%）

②その他の注目すべき特徴

- 児童生徒質問紙調査において、最も肯定的な回答をする児童の割合が非常に高い。
- 全国的に無回答率が高かった算数B $\boxed{5}$ (1)をはじめ、ほとんどの問題で無解答率0%。最も高くても9.7%（国語A $\boxed{8}$ 3）。
- 年度を追うごとに、全国平均に対する正答率が少しずつ上昇してきており、今年度になって国語A, B, 算数A, Bのすべてで全国平均を上回っている。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
75.5%	61.5%	83.4%	49.1%	69.4%	30~50%
(72.9%)	(57.8%)	(77.6%)	(47.2%)	(46.1%)	

2. 取組の背景

校長が本校に赴任したのは平成 19 年度で、全国学力・学習状況調査が始まった年度であった。その後、再雇用や任期の延長によって今年度で 10 年になる。校長が赴任した頃は、地域の中で生徒指導上の課題が非常に多い学校と言われていた。学級崩壊も起こっており、第 1 回目の学力・学習状況調査を受けさせること自体が大変だった。保護者や地域の信頼も低かった。

平成 19 年度の調査結果では、質問紙調査の「自分には良いところがあると思う」に対して、「あてはまる」と回答した児童は 17.8%にとどまっており、他の質問への、最も肯定的な回答の割合も、多くが、今年度の半分～三分の一以下の低い割合であった。各教科の平均正答率も全国平均を下回っていた。当時の学校の課題は、「自尊感情が低いこと」、「友達同士のトラブルが多いこと」、「何かに向かってやり遂げた経験が乏しいこと」、「宿題をしてこない

児童が多いこと」、「起きる時刻も定まらない等、生活自体が乱れていること」等であった。そこで、児童の居場所と出番のある学校づくりを目指し、様々な取り組みを地道に進めてきた。3～4年前頃から改善を実感するようになってきて、現在に至っている。質問紙調査結果に注目しており、知徳体をバランスよく育てることを目指し、今年度は「学びを生き方へ」をテーマに、指導改善に取り組んでいる。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 「学習の共通理解事項」を徹底することで、6年間の指導を統一し、学習規律を身につけさせる。

全教職員がそれぞれの教科とは別に、「保健体育・安全委員会」、「学力向上委員会」、「人権・生指委員会」のいずれかに分かれて、研修の旗振り役を担っている。

「学力向上委員会」は各学年から一名ずつの教員で組織されている。「学習の共通理解事項」を作成して全教職員で共有し、徹底している。教員個々の取り組みでは、それがどんなに素晴らしいものでも、年度が替わると、教員配置も児童の学級編成も変わることがあり、せっかくの良い指導が一年で途切れてしまい、子供たちの中で積み上がるのが難しい。学習の共通理解事項を全教職員で共有・実践できれば、前年度に身につけていることを使って積み上げていくことができるので、子供の力を伸ばしやすい。その積み重ねが大きな成果につながっていくと考えられる。経験年数の浅い教員にもはじめの型として身につけておくの良いものにもなっている。

学習の共通理解事項を「〇〇（学校名）スタンダード」と名付け、まとめている。その内容は、教師が守らせる学習規律、授業の進め方や授業をするときに留意すべきポイント、ノート指導のポイント等、多岐にわたる。毎年、年度の初めに内容を各学年で検討した上で学力向上委員会がとりまとめて提案し、年度の終わりに振り返って次年度への課題を洗い出して更新している。

また、同様の内容を、児童向けにまとめ直した「学習のやくそくごと」を作成して、全ての教室に掲示している。子供たちにとっては、「学習のやくそくごと」は当たり前のことになっている。

さらに、毎学期末に記名式で振り返りのアンケート（「学習のきまりアンケート」）をとって、子供たち自身には振り返りをさせ、教員はアンケート結果を踏まえて、児童一人ひとりに対する指導に生かすとともに、自らの授業の反省材料として、その後の取り組みに生かしている。

学力向上委員会では、全国学力・学習状況調査や市の「学びの診断」（3年生～6年生を対象に年一回実施）の結果の分析も担当し、毎年度の課題を見いだして授業改善の目標を立てている。その目標を、学校評価書にも反映し、4月に学校評価会議を行い、目標に対して教員がどう取り組むかを確認している。7月、11月及び2月には、目標に対する進捗状況について個々の教員の評価を行っている。3月に年度末の学校評価会議を行い、成果と課題を整理し、次年度への提言をまとめている。

また、校内ステップアップ研修として、経験年数5年未満の教員を対象に、毎月一回研修を行っている。その中で、共通理解事項を浸透させると共に、研究授業を通して授業力の向上を目指している。



全教室の前方に掲示されている「ハンドサイン」「学習のやくそくごと」「話し方や聞き方の「ルール」」

(2) 児童の思いに沿った問題解決型の授業展開

学習指導の中身に、子供たちが思考を深められるような流れを取り入れることを目指して授業改善を進めている。校長の実践経験（専門の理科）から、子供の「分かりたい」や「調べたい」という思いに沿った問題解決ができるようにすれば、子供は例えば90分ほどの長い授業でも集中して学習に取り組むことができると考えている。校長が専門の理科の授業でそのことを実践して証明している。教員が引っ張る授業ではなく、子供が思っている疑問をとことん追究するような授業を展開するために、子供が自発的に「調べたいな」と思ったことを解決する授業の流れができるように工夫してきた。そこでは、子供が、「あれ、何でだろう？う～ん？」とうなるような、ある程度難易度の高い問題を提示することが求められる。こうした問題を提示することで、児童が「他の人の考えを聞きたい。」「自分の考えを聞いてほしい。」という思いを自然と抱き、対話を始めるようになって考えている。また、一コマの授業で完結してしまうものではなく、次時へ次々とつながっていくような連続性のある単元構成の工夫をしたいと考えている。

また、例えば算数では、勉強が楽しいと思わせることをねらい、毎時間の最後に学習内容に関する簡単な問題に取り組みせて、学習内容が身についたか確認できるようにしている。

(3) 家庭学習の習慣化

全国学力・学習状況調査から、「学年の発達段階に応じて主体的な学習ができるようにすることが、学力の向上につながる」ということが明らかになったことから、自ら進んで学ぼうとする子供を育てるために、家庭学習の習慣化に力を入れている。家庭学習は、宿題と自主学習ノートがある。宿題

は毎日提出させることを徹底しており、例えば 6 年生の算数の宿題では、「日替わりセット宿題」に取り組みさせている。これは、算数の基盤的な内容を定着することを目指したものである。毎日、指定された 7 つの内容の問題を一題ずつ自分で考え、解いてくることになっている。答え合わせは子供同士で行い、定期的に学級担任がチェックしている。

家庭学習については、1～3年生は、読み・書き・計算を、4～6年生は読み・書き・計算・自主学習（興味のあることについて、調べ、ノートにまとめる。）に取り組みさせている。

宿題や自主学習が進んでくると、成果物が目に見えて増えてきて、これが子供の自信につながっている。

「家庭学習のすすめ ～自ら進んで学ぶ子どもを育てるために～」と題した冊子を配布し、冊子の中の、保護者向けのページでは、家庭学習の大切さを家庭に訴えるとともに、本校の学習面での現状と課題を一覧にして示している。

児童向けのページでは、「0年生の家庭学習について」として、家庭学習の目標や注意事項、具体的な取り組み方法や内容の例についてまとめている。そして、家庭学習点検票を用意し、「毎日決まった時刻に家庭学習をしているか」、「テレビを消して取り組んでいるか」、「学習する場所の整理整頓ができていないか」、「良い姿勢で学習しているか」、「時間割を確かめ、次の日の準備をしているか」、「決められた時間

（1年生は30分、2年生は40分、3、4年生は50分、5、6年生は60分を標準としている。）取り組んだか」、

「自主学習に毎日取り組んでいるか（高学年のみ）」について、自己評価とともに、保護者のチェックを受けるようになっている。この取り組みは、家庭学習の定着を意図しているが、加えて、10年前に明らかになった、生活習慣の乱れの改善も目指しているものである。



家庭に配布している
「家庭学習のすすめ」

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 保護者との連携

10年前、保護者からは、「学校は事実を知らせてくれない」という評価を受けていた。そこで、信頼の回復を目指し、あらゆることをオープンにした。噂が一人歩きすることを防ぐためにも、保護者が学校の教育活動に参加できる機会を増やした。調理実習や裁縫実習、水泳の陸上監視にボランティアで参加してもらっている。また、クラブ活動や遠足の付き添いや、行事の写真撮影など、保護者にお願いできることは何でも手伝ってもらい、同時に学校のありのままの姿を見てもらうようにした。このことは、教師集団の刺激にもなっているほか、教師の目が行き届かないところをフォローしてもらうこ

ともつながっている。なお、職員室の近くにPTA室を設置しており、ミーティングの場等に活用されている。

(2) 校内の美化

10年前は、校内の汚れが大変目立っていた。きれいな学校を目指し、保護者や地域の方々の協力を得て、校内の整備・美化に取り組んだ。例えば、子供たちがサッカーができるように、運動場に約2000平方メートルの芝生部分を作った。また、干上がってゴミ捨て場状態になっていたビオトープを整備しなおした。ビオトープにはメダカを飼い、理科で観察するのに活用している。さらに、観察園にバタフライガーデンと銘打った、チョウがやってくる花を植えたエリアを設けたりもした。昨年度からフジバカマを植えたところ、アサギマダラが飛来した。

授業に必要な小さな田んぼをつくることもした。

花をたくさん植え、環境を整備することで、子供の心を落ち着かせたいと考えてきた。



植物に興味を持たせる工夫。
観察園にあるクイズのコーナー（児童作）。



観察園の一角。ミカンやレモンがなっている。

(3) 生徒指導の共通理解事項

規範意識を育てることを目指し、生徒指導上の共通理解事項をまとめ、何がよくて何がだめなのかの明確な指標を作っている。その内容は、登下校時について、集会の時について、休み時間について、給食、掃除について、服装や持ち物について等、多岐にわたって細かく定められていて、どの教員も同じスタンスで児童に接することができるようになっている。そうして、全教員で徹底して、規範意識を身に付けさせてきている。前述の「学習の共通理解事項」とともに、学校づくりの両輪の1つになっており、毎年内容を検討して児童の実態に即したものにしている。



名札・帽子チェックの結果を示す掲示物

同じ内容を児童向けに書き直した「〇〇（学校名）のよい子」というプリントを配布して、学校生活の規範を意識させるとともに、学校と家庭が同じ基準で児童に接することができるようにしている。また、朝礼で名札や帽子の確認をし、その結果を掲示して改善されていく様子を児童に見えるようにしている。

5. その他の特色ある取組

(1) 総合的な学習の時間

地域教材を取り上げて、地域との連携の中で総合的な学習を進めている。これは、地域の方々に学校を見ていただく機会にもなっている。

3年生は、地域の祭りを調べる取り組みなどを主としている。

4年生は、観察園を利用した花いっぱいプロジェクトとして地域を花いっぱいにする取り組みなどを主としている。

5年生は、校内にある田んぼを使った米作りをとおして米について調べる取り組みなどを主としている。

6年生は、防災について考える取り組みなどを主としている。

いずれも、「(学習の題材に) ふれる」→「(課題を) つかむ。追究する」→「(分かったことを) まとめる。(もう一度題材に) ふれる」→「(あたらしく芽生えた疑問や課題) をつかむ。追究する」→「(学んだことや分かったことを) まとめる。生かす」という2段階の探究活動ができるようにしている。ここでも、教科の学習と同様に、あたかも児童自身が自分たちの疑問や思いを追究しているかのように授業を進めている。

(2) その他

学力や人権、生徒指導のあらゆる取り組みが相乗効果を生むよう、教師集団が一丸となってあきらめずに継続して指導することが大切であると考えている。各種の調査やアンケートを実施して児童の実態を把握し、その結果をもとに毎学期各委員会で振り返りを行い、子供の実態に即して改良を続けている。その積み重ねが、今日の成果につながっている。

子供が自ら学ぼうとする意欲を大切にしたい授業をすることで、学習に前向きに努力する子供が育ち、その結果、また成果が出て、また前向きになる。そして、子供に少しでも良いところが見えたら、すかさず褒める。褒められた子供はやる気が出て頑張り、また褒める点が増えてくる。という好循環が生まれる。そうして、子供が生き生きとした学校が形成されていくと考えられる。新しい校風を作っていくことには時間がかかるが、「ここまでできた。来年度はここをやっていこう。」という具合に小さな積み上げを継続することが大事である。

6. 授業を参観して

二学級ある6年生の学級それぞれで算数と国語を参観した。

【第6学年算数：およその面積を求めよう】

(1) 授業の概要

学級を習熟度別に2つに分け、少人数指導を行っている。

横浜市のおよその面積を求める方法を考え、実際に求める授業である。まず、黒板に横浜市の地図（教科書を拡大したもの。横浜市の地図の上に方眼が描かれている。）を掲示し、およその面積を求めるにはどうすればよいか、見通しを持たせ、次にどんな見通しを持ったか発表させて交流し、それぞれのやり方で実際におよその面積を求めさせる授業であった。

教科書に沿った内容であるが、児童の自由な発想を引き出し、児童の考えに基づいて展開しているのが、あたかも児童だけで授業が進んでいるかのような雰囲気があり、熱心に取り組む子供たちの姿が印象的だった。

(2) 児童の様子

学習に対して前向きで、自分の考えをしっかりと持ち、仲間の意見もよく聞いて、反応していた。

発問に対して、静かに挙手し適切な声の大きさを発表していた。発表している児童の方へ自然に体を向けて聞くことや、ハンドサインなど、本校の学習のルールがよく浸透しており、プラスに働いていることが分かった。

「だいたい平行四辺形と見て求める」という児童や、「いくつかの四角形に区切って、数える」という児童など、児童が発案した、およその面積の求め方は様々で、各自で良いと思った方法で調べていた。中には方眼を一つずつ数え上げる児童もあり、最後まで懸命に取り組んでいる姿があった。時間がかかっても、みんなで一緒に考えて問題を解決していこうとする雰囲気が出来上がっていた。



コツコツとマス目を数える児童

(3) 授業者の取組

明るい表情で児童一人ひとりに接し、後ろの席の児童によく聞こえる程度の適切な声の大きさを話していた。全体に話しをする時間は必要最低限で、子供の自由な発想を妨げず、「なるほど、そういう考えもあるね。」等と声をかけて、児童の意欲がそがれないように注意をはらっていた。児童の考えが偏って、あまり出てこないときに、「前にも似たようなことはなかったか」と問いかけ

て、子供の発想を広げ、既習内容との関連づけをそれとなくしていた。児童が発表する時間を十分に確保し、児童が「自分の意見を聞いてもらえた。」と感じられるようにしていた。

児童のノートをタブレットPCで撮影し、電子黒板に投影して共有を図ったり、電子教科書を活用したりしていた。



発表している児童の考えをクラスに共有する

【第6学年国語：柿山伏】

(1) 授業の概要

狂言大会で、「柿山伏」の一場面を演じるにあたってどんな工夫をするか、四人一組のグループで考える授業であった。まず、狂言「柿山伏」の場面を振り返り、狂言大会で演じるのにふさわしい場面の絞り込みをした。その後、役割分担を決め、演じるときの工夫を考えて練習し改善することを繰り返していた。

(2) 児童の様子

発問に対して静かに手を上げて、秩序ある雰囲気があった。話し合いの仕方が身につけていて、「では、話し合しましょう。」という教員の指示でスムーズに話し合い活動ができており、活動から逸脱する児童はなかった。漠然と「練習する」、「声に出して読む」のではなく、声の出し方の工夫として、「～のために～する」といった目的に応じた言語活動の工夫を意識して学習に取り組んでいた。例えば、「本物の狂言に似せるため、しぐさを大きくして分かりやすくする」、「言葉と行動を一体化させるために、おおげさにする」「声をかぶせる所を二人とも聞こえるように、どちらかが声の大きさを調節する」「動物の鳴きまねは、あせっているように言う」などと話し合っていた。電子教科書に収録された、実際の狂言の音声を参考にしながら工夫する点を探す姿もあった。児童が声の出し方を目的に応じて工夫し、またその工夫を共有するような授業づくりがなされていた。

(3) 授業者の取組

ここでも教師の指示は必要最低限で、始めに本時の目標と活動内容を学級全体で共有したあとは、「やってみよう」と声をかけて児童の活動時間を確保していた。

児童が話し合い活動を始めた後は、机間支援に徹し、学級全体の雰囲気为本時の目標から離れて、普通の音読になりかけたらしると、全体へ「狂言の特徴ってなんだけ。」と声をかけて、子供の意欲を喚起していた。

電子黒板で前時の板書を振り返り、本時の内容につなげていて、学習の継続性を大事にしていた。



電子黒板で前時の板書を振り返る

小学校

「スキルタイム」や地域との関わりで児童の基礎学力を高め、自信をもたせた取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	小学校（平成11年度開校：分離新設）		
学級数 児童数 （調査日現在）	14学級 293名	第1学年2学級（48名） 第3学年2学級（46名） 第5学年2学級（55名） 特別支援学級2学級（7名）	第2学年2学級（47名） 第4学年2学級（48名） 第6学年2学級（42名）
教職員数	32名	校長・教頭	各1名
		教諭	13名 （うち 指導方法工夫改善担当教諭 1名 主幹教諭 1名 養護教諭 1名 栄養教諭 1名）
		講師	5名（常勤講師）
		事務職員	事務主査 1名、事務補佐 1名
		学校司書	1名
		学校用務員	1名
		その他	外国語活動指導員 1名 支援員 2名 調理員 5名

【学校の特徴】

県庁所在地に接する市の北部にある小学校である。市内には、弥生時代の遺跡が点在し、今も昔も“人が住む”ための地理的条件や自然環境に恵まれている。市内で12校ある小学校の中で、11番目にできた、斬新な設計の校舎の新しい学校である。規模は市内で最も小さい。学校のすぐ近くに自衛隊の駐屯地と、大きな車庫がある鉄道の駅がある。校区は県庁所在地に接しており、古くからある町と、新しい大型の集合住宅からなる。当初から地域とのつながりが強く、いろいろな場面で地域ぐるみで学校経営をしてきた学校である。地域の自治会長さんに、様々な機会に学校に関わってもらいながら関係を作ってきた。創立に当たって、「子供たちが新しい学校生活に慣れ、自分たちの力を発揮し、自己実現できるように」という保護者や地域の願いがあり、地域と家庭と学校が一体となって新しい学校を創造していきたいと考えた。校章は地域の方のデザイン、学校のマスコットは保護者の方によるデザインである。

平成17年度よりコミュニティ・スクールに指定されている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 児童生徒質問紙項目「国語の授業の内容はよく分かる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：78.6%（全国平均 36.5%）
- 児童生徒質問紙項目「算数の授業の内容はよく分かる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：78.6%（全国平均 46.8%）

②その他の注目すべき特徴

- 算数Aの全問題について、無解答率が0%。
- 特に算数について、D層の児童の割合が低い（算数A 7.1%，算数B 4.8%）。
- 児童質問紙で、「ひとの役に立つ人間になりたい」に対して、「1 そう思う」と回答した児童の割合が90.5%（全国平均 71.2%）
- 児童質問紙で、「人が困っているときは、進んで助けている」に「1 当てはまる」と回答した児童が81.0%（全国平均 37.0%），「2 だいたい当てはまる」も入れると、100%になる。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	算数A	算数B		
75.7% (72.9%)	66.9% (57.8%)	90.3% (77.6%)	61.7% (47.2%)	59.5% (46.1%)	5~10%

2. 取組の背景

児童の半数は古くからある町から、もう半数は新しい大型の集合住宅から登校してきており、創立当初から地域の協力が大きい学校である。「(学びあいで)できる子ども」，「(優しい心が)光る子ども」，「(元気な体が)伸びる子ども」を目標に、知・徳・体のバランスがとれた成長を目指してきている。ここ数年は、「かかわり」，「つながり」，「絆」をキーワードに授業研究を続けてきている。

コミュニティ・スクールとして、学校・家庭・地域の役割を整理してきている。学校は主に学びを豊かにする役割を、家庭は主に基本的な生活習慣をつくる役割を、地域は児童の安全安心をつくる役割をそれぞれ担っている。それぞれが役割を果たしながら相互に協力し、より効果的に効率的に教育目標を実現するために、力を合わせることを大切に考えてきた。「学び」，「心」，「体力」，「安全安心」のそれぞれで三者がコミュニティをつくって会議をもち、どんな取組をするか考えてきた。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 啐啄同時の発想の教育

雛が卵の殻を内側からつつく作用（啐）を児童の学ぶ意欲に、親鳥が雛の動きに合わせて外から卵をつつく作用（啄）を教員の指導になぞらえて考えている。児童の学ぶ方向性や追究意欲と教師の教材研究や指導の工夫の方向性が合うと、児童の能力は伸びていくと考えている。

児童の姿はいろいろで、児童の気持ちの向いている方向はばらばらである。そのばらばらのままでは、一生懸命頑張ろうとする意欲も弱まるだろうと考えている。そこで、集団づくりに力を注いでいる。集団のまとまりがしっかりしていれば、児童同士が信頼できたり、安心できたりするし、児童の方向性はまとまるだろう。児童に「自分たちはまとまった集団だ。」という意識があれば、互いに声をかけ合いながら、学びに向かう意欲も高まるだろうし、それに応えるべく教師の教材研究もより深まって、よりよい授業が作っていけると考えている。

校長は、集団づくりについて、児童に対して、4月の当初から集会で常々、「かかわり」や「つながり」や「絆」を意識させている。教員もそれを聞いているので、児童にそれらの言葉を使って、随時メッセージを送っている。1, 2年生には、「友達や先生、家族や地域の人たちに「かかわり」をもっていこう。」、3, 4年生には「友達や先生、家族や地域の人たちとの「つながり」を意識しよう。」、5, 6年生には「友達や先生、家族や地域の人たちとの「絆」を作っていこう。」というメッセージを送っている。学校生活の様々な場面で児童に「私たちは一人では無い。多くの人に支えられながら今の自分がある。」ということを伝え続けている。児童に分かりやすい言葉を使って伝えることで、集団の力が伸び、それが学びに向かう力につながり、学力の向上につながれると考えている。どの児童も、分からない時には、「分かりません」と恥じることなく質問できる雰囲気ができあがってきている。

(2) 子供同士が交流しながら伸びていく授業

児童が、自分の考えをもち、教室中で交流しながら検討し、考えを高めまとめていくような授業展開を行っている。全体交流をしてから、最終的に自分の高められた考えをまとめていくようにしている。

どの授業においても、自分の考えを「作る場面」、「述べる場面」、「話し合い・修正する場面」があるようにしていて、自分なりの考えをもち、他の友人と考えを出し合い、考えを検討し、深めるようにしている。そうした展開の中で、考えが付加・修正・強化され、検討したことをもとにしてさらに自分の考えを練り直していく学びを大事にしている。本校では、この学びを「協働の学び」と呼んでいる。

低学年では、自分なりの考えをもつ点に重点を置き、中学年では、自分なりの考えを検討することに重点を置いている。さらに、高学年では、検討した自分の考えを高めることを重点にしている。

教師から提示されたものを取り組むのではなく、導入から、自分が立てた目当てをはっきり言いながら授業に入り、まとめも自分でさせる授業を目指している。児童は、授業の初めに本時の目当てを、終わりに本時のまとめを自分で考え、それを学級の全員に向けて発表し合う。そこで互いの内容を聞き合いながら、修正していき、本時に何を学んだかをきちんとまとめることができている。

また、全職員で共通で意識しているのは「教師のしゃべる時間」：「児童が追究する時間」：「児童が話し合い、交流し、学びを深めている時間」を1：1：1にしていこうということで、実現にむけて努力している。

（3）全教員が全児童の課題を把握して、組織的に取り組む

年度初めと毎月、全児童について、子供が困っていること、学習課題、生活指導上の事項等を全教職員で共通理解を図っている。

子供の学びについては、教員同士で前期と後期の終わりに学年が取り組んできた内容を互いに報告し合っている。実情を有体に伝え合っているため、全教員で共通理解ができている。

また、給食の準備時間に、当番ではない児童のうち、学習に課題を感じている児童を集めて、「昼の学習」と名付けた学びの補助を行っている。指導方法工夫改善担当の教員や主幹教諭、教頭、校長が国語、算数を中心に、学習の基礎的な内容を補習している。各学級2～3名の児童を対象にしており、専用のファイルを用意して学習を進めている。内容は指導方法改善担当の教員がそれぞれの児童用のプリントを準備している。月、水、金曜日が4、5、6年生、火、木曜日が1、2、3年生を対象としている。対象の児童は、分からないところができるようになるので、昼の学習に喜んで参加し、自主的に取り組むようになっている。学級担任にとっても、学習の基盤となる内容をある程度補完できているので、子供が一定の理解を共有しているところから授業を組み立てることができる。その結果として学力D層の割合を下げることができていると考えられる。

（4）短時間を活用した学習「スキルタイム」

毎週火曜日と木曜日の朝に15分間、発声、音読、視写、計算等学びの基礎となる取り組みをする「スキルタイム」を行っている。基礎基本の確実な定着とともに、朝からしっかり声を出して、みんなで気持ちを揃え、集中していくことが大切だと考えている。そのことで、一日を充実して過ごすことができると考えている。

取り組む内容については、毎年、学年主任研修会で相談して更新し、全教員が同じ取り組みができるようにしている。使用するフラッシュカード等をまとめた、「スキルタイムセット」があり、引き継いでできている。年度の初めに、新し

く赴任してきた教員のためにも、モデルクラスの授業を参観する研修を行っている。学力の基盤の定着を学級担任任せにせず、全校で組織的に取り組んでいる。

はっきりと大きな声で話すことができ、計算等の能力も高まってきている。子供自身でもそれが分かるようになり、「できた」と実感することを積み重ねることで、自信につながっている。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 学校・家庭・地域の連携（「学びコミュニティ」）

児童は、学校の一員としてだけでなく、家庭の一員、地域の一員として過しており、所属場所は様々ある。児童が、学校内での友達や教員との関係、家族との関係、地域の人々との関係をしっかりとした絆にして深めていけるようにすることが、知・徳・体のバランスが取れた人間の育成につながると考えている。児童にとって、様々な場面で学校や家庭、地域が連携して関わってもらえることで、いろいろな人からほめてもらう機会が多く、それが自尊感情の高まりにもつながっている。

コミュニティ・スクールになったために教員の負担が増えるということではなく、「三者がうまく協力することで負担が増えないようにするためのコミュニティ・スクールであるはずだ。」という考え方でそれぞれの役割を整理してきている。地域の人々はほぼ変わらないが、教職員は異動があるので、変わっていく。だからといって、学校側が新参者で、「この地域はこういうふうにするのだ。」と地域がリードする形になってはならないと考えている。何でもみんなで一緒にしようとなってはならないので、どんな役割分担をしていくのかを整理している。職員全員が、「学び」と「心」と「体力」と「安全安心」の組織（コミュニティ）のどこかに入り、業務を整理している。各コミュニティ部会で話し合いをしっかりとし、学校・家庭・地域の三者で取り組むことは何か、学校と地域で取り組むことは何か、学校と家庭で取り組むことは何か、それぞれで取り組むことは何かを整理し、業務の効率化を図っている。学力向上は「学びコミュニティ」の担当である。

①学校の役割

児童の学力向上に向けたプランの立案、「協働の学び」による授業の実施、スキルタイム、各種学力調査の結果の分析、「昼の学習」等の補充学習を実施している。

②家庭の役割

中学校区で共通して作成されている「家庭学習のすすめ」に基づいて、決まった時間、決まった場所で集中して学習するように働きかけている。下学年のキーワードは「ていねいに」、「繰り返して」、上学年のキーワードは「自主的に」、「計画的に」である。内容は、国語と算数に加え、日記や視写、自主学習等である。

家庭学習が定着しており、質問紙調査によれば、一日の家庭学習の時間が30分より少ない児童はいない。

また、「〇〇（学校名）っ子ノート」という日記帳と連絡帳の性質をもつ冊子があり、子供自身が日記と生活の振り返りを書き、保護者も子供が書いたことに対するメッセージを記入するようにしている。児童と家庭の心をつなぐことになっているとともに、数行の量だが、毎日日記を書くので、児童は書くことにあまり抵抗がないようになっている。

③地域の役割

月に2回、土曜日に「まなびや〇〇（市名）」を開催し、市の教育委員会が企業と連携し、そこから派遣された人材に来てもらって、学びに課題を感じている児童を対象に、学力の補充をしている。

④学校と家庭、学校と地域

例えば、家庭科の授業で、ミシンの指導の時に保護者にお手伝いをお願いしたり、低学年の校外学習で安全見守りをしてもらったりしている。また、毛筆の授業の一部では、習字教室をされている地域の方が、教えに来てくださっている。学校の畑で、野菜を作る活動をする時には、自治会長さんの呼びかけで地域の方が教えに来てくださっている。

⑤三者での取組

夏休みに「サマースクール」と称して、プリント学習の時間をつくっている。そのときの採点（丸付け）は保護者にその場でしてもらっている。自分の子供の分だけでなく、他の児童の分もしてもらうことで、現在、どんな学びをしているのか、どんな課題を抱えているのかを実感してもらっている。我が子だけでなく、地域の子供という視点で児童の育ちに関わる視点を三者で共有できている。児童にとっても、親や学校の先生では無い大人に関わってもらうことで、新鮮な気持ちで学習に向かうことができている。

「〇〇っ子ノート」の内容を毎年検討し、更新している。



支えてくださっている地域の方々を紹介する掲示物

5. その他の特色ある取組

(1) 年に2回の検証改善

市販のテストや標準学力調査の結果を指標としている。4月に前年度の担任

と本年度の担任で各児童の学力状況、指導に対する成果、積み上げた指導方法等について情報交換している。その情報をもとに、担任は指導方法を検討し実施する。同時に、様々なデータを収集し、整理している。10月に、各学年の取組、成果の状況、今後の指導方法等について協議し、全職員の共通理解を図っている。学級担任は協議の結果を踏まえて改善し、データの収集、整理を続ける。2月には年度末復習計画を作成し、3月には全職員で、一年間の成果を互いに共有して、次年度の担任への引き継ぎ事項を整理している。4月から10月までで1サイクル、10月から3月まででもう1サイクル、検証改善サイクルを回している。

6. 授業を参観して

【第6学年算数：場合の数 ならび方や組み合わせ方を調べよう】

(1) 授業の概要

教科書にある題材を用いて、駅からサッカー場へ行くまでの行き方について、かかる時間や運賃など様々な条件を設定して、最も良い行程を検討させる授業である。

まず、場合の数の調べ方について、既習事項を確認し、今日のめあてをつかませた。

次に、「運賃がいちばん安い行き方」、「かかる時間が一番短い行き方」、「600円以内でいく行き方」等の条件を提示して、どうすれば良いか、個人、隣同士、学級全体の様々な規模で考えを交流させた。

(2) 児童の様子

教師の言葉をよく聞いていて、発言は大きな声ではっきりできていた。発表の仕方（「私は〇〇だと思います。なぜなら、～～だからです。どうですか。」）が身に付いていて、どの児童もできていた。どの児童も臆すること無く自分の考えを発表できていた。一人の児童が発表しているときには、その児童の方向を向いて聞くことが自然にできていた。授業のめあてやまとめを自分の言葉でノートに記述しており、しっかり発表していた。教師が板書しためあてやまとめも参考に、ノートを作っていた。



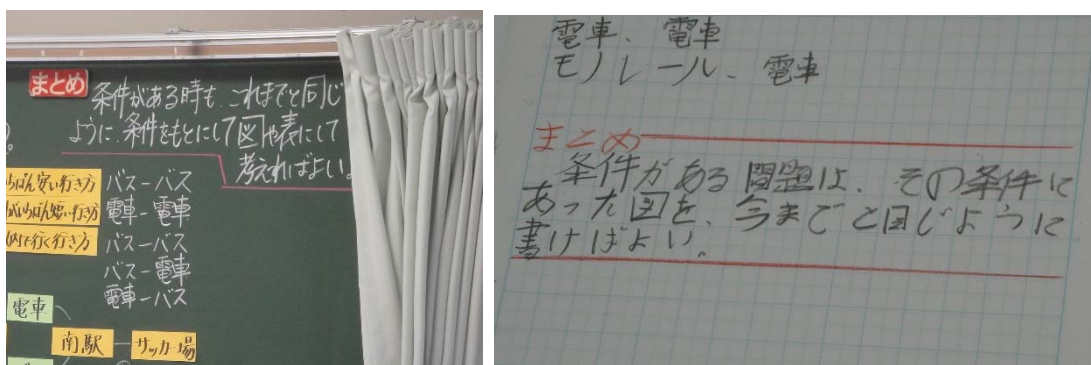
教室内で自由に意見交流する児童

(3) 授業者の取組

児童に自信を持たせることを念頭に置いて授業していた。児童に自由に発言させる場面と、拳手させてしっかり発表を聞かせて考えさせる場

面を設けていた。児童は大きな声で発表しているが、授業者は必要最小限の声で語りかけていて、そのことが教室の雰囲気を引き締めていた。児童が自分の言葉で説明できるように、隣同士や学級全体で交流させ、児童自身が学級の仲間の意見を受けて、付加・修正・強化していくようにしていた。

また、音声でやり取りする場面が多く、授業者は児童の発表を整理して視覚化して共有するとともに、「今、〇〇さんはどう考えたのか。」「今、〇〇さんはどんなふうにして答えにたどり着いたのか。」と問いかけて、自分で解釈しなおすようにさせていた。「違いは何ですか。」「どちらに似ていますか。」など、解釈を求める発問を意図してしていた。振り返り、まとめる時間を十分に取り、子供がじっくり考えられるようにしていた。



黒板に書かれた教師によるまとめ（左）と児童が自分で記述したまとめ（右）

【第6学年国語：言葉について考えよう】

（1）授業の概要

学校や地域の様々な行事に地域の人や保護者を招待する手紙を考える授業である。まず、人に伝える表現には、書き言葉と話し言葉があることを振り返り、その違いを整理した。その後、手紙の中で使う丁寧語や敬語等を学習し、グループで話し合いながら、個人で考えた文案を書き換えた。書き換えた文案を全体で交流し、人に伝える表現にする際には、伝える方法や相手、場面などを考えながら、適切な表現を選ぶ必要があることを整理した。



書き換えた文案を全体で交流する

（2）児童の様子

表現の仕方について児童同士で議論ができていた。そのとき、自分の考えの根

拠として辞書を有効に活用し、関連する言葉を次々と調べ、学びを深める姿がみられた。

一人一人がめあてを明確にもっていたため、提示された文章を、相手や場面に応じた適切な表現に書き換えることに主体的に取り組むことができていた。グループによる交流活動においても、伝える相手や伝える手段という視点でよりよい表現の仕方について話し合うことができていた。

(3) 授業者の取組

本学級の児童は説明的な文章を読むことや、文や文章を書くことに苦手意識を持っている児童が多い。そのため、少しでも楽しく学習に取り組むことができるように授業づくりを行っている。

本時においては、相手や目的に応じ、適切な表現の仕方を考えることができるよう、日常生活と結び付け、学校行事への案内や参加以来についての文章を教材として取り上げた。各グループにおいて、異なる学習課題に取り組み、相手や目的に応じ、書き換えた文章を比較することを通して、伝える方法、相手、場面に応じて適切な表現にすることが大切であるということに気づくことができるようにした。

辞書を活用する際には、調べた言葉に付箋を貼るよう指導している。全学年で朝の時間に「辞書引き学習」の時間を設けているので、児童は、辞書を使うことや辞書とはどういう書物かを理解して慣れていて抵抗がない。分からなかったら辞書を引くということが定着している。

【第4学年：「スキルタイム」】

(1) 授業の概要

まず、学習に向かうときの姿勢等が書かれたフラッシュカードを読み上げる。次に、詩の音読、国語の教科書の文章の視写、50問の割り算の計算、近畿地方の県庁所在地の確認といった内容の学習を行う。15分の時間を短く区切り、次々と課題が提示されるようにしていた。



視写をする児童

(2) 児童の様子

「スキルタイム」における学習の進め方が身に付いており、次々と提示される課題に遅れることなく取り組んでいた。また、一つ一つの課題は長くても数分間なので、集中力を持続させることができていた。終了後は、すっきりとして、明るく清々しい雰囲気が出ていた。

児童は楽しみながら学習に取り組んでおり、「これから頑張るぞという気持ちになる。」、「自分ができることが増えることが楽しい。」、「身に付いたことが日常の学習の中で使えることが楽しい。」、「なんだかすっきりする。」という感想を持っているとのことであった。

(3) 授業者の取組

短い時間でテンポよく進めていった。割り算の計算では1～2週間同じ問題を解かせており、日々繰り返し解かせることで、タイムが縮まったり、解けた問題が増えていったりすることで児童に自信を持たせていた。ある程度緊張感を持たせて脳の活性化を狙っており、文字や数を意識することを大切にしているということであった。できないことを取り上げるのではなく、それぞれの児童の成長を認め、励ましの言葉をかけていた。

C 中学校

全国学力・学習状況調査に関する詳細な結果分析と補充学習や家庭学習などによる基礎基本の定着を目指した取組によって、学校全体の学力を維持向上させた取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和 22 年開校：平成 25 年K中学校と統合）		
校区内小学校	2校		
学級数	3学級	第 1 学年 1 学級（28 名） 第 2 学年 1 学級（31 名）	
生徒数	90名	第 3 学年 1 学級（31 名）	
教職員数	18名	校長・教頭	各 1 名
		教諭	8 名（うち養護教諭 1 名）
		講師	美術 1 名
		司書	1 名
		事務主査，校務員，調理員，ALT 等	

【学校の特色】

都道府県内でも歴史のある中学校であり、南北に伸びる市の南側の山間部に位置する学校である。過疎化に伴い、何度か周辺の中学校と統合を図ってきた。近年では平成 25 年に隣の中学校と統合した。

かつては農村地区であり、米やたばこの生産や杉の植林、製炭などの産業が盛んだった。現在は過疎化及び少子高齢化に伴い、第 2 種兼業とサラリーマン及び自営業で生計を立てている家庭が大半である。人情豊かな地域性が受け継がれ、学校教育や社会教育、文化活動への関心も高い。地域のお年寄りが子供たちを温かく見守り、挨拶や声掛けをしてくださることが多く、地域一体となって子供を育む土壌がある。学区内には鉄道の駅や、首都圏に見られるような繁華街がなく、他地域から人が集まるような状況にない環境である。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 平成 27 年度の通塾率 27.9%（全国平均：60.9%）であり、通塾率が 30%を下回る中学校のうち、国語Bの正答率が全国で5番目に高かった（75.2%）。
- 平成 28 年度は、全ての教科で昨年度の正答率を上回る結果であった。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
84.5% (76.0%)	80.6% (67.1%)	73.6% (62.8%)	57.6% (44.8%)	32.3% (60.8%)	5%未満

②その他の注目すべき特徴

- 平成 19 年度から全ての教科において正答率が全国平均を上回っている。
- 国語Bの標準偏差が 1.6
- 学校の授業の復習をする生徒の割合が全国平均に比べ、30 ポイント以上上回っている。

2. 取組の背景

多くの生徒は訪問者に対して立ち止まって挨拶をしたり、授業中も集中して教員の声に耳を傾けたりするなど、素朴で素直な印象を受けた。服装や頭髪の乱れもなく、落ち着いた様子だった。参観した授業の中でも、教員の卒業を意識させる発言に対して素直に寂しさを表現したり、教員の手伝いを率先してしたりする姿が見られたが、周りもそういう姿を見ても茶化すようなことはない。大半の生徒は幼稚園・保育園から同じという状況下において、人間関係に変化のないことがマイナスではなくプラスに働いている。

このような生徒の背景には、地域の力が大きいと考えられ、学校評価においても故郷に誇りを感じている生徒は90%以上おり、平成28年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査でも「今住んでいる地域の行事に参加しますか」という質問に対し、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答している生徒は80%以上と、全国に比べ、約40ポイント上回っている。

地域の教育力がC中学校の取組を支える背景としてあり、人の話を素直に聞くなど学習面にもよい影響を与えていると考えられる。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 学力調査の活用

全教科において、県と全国の平均正答率を大きく上回っている状況ではあるが現状に満足せず、「教科により正答率に差が生じている」という問題意識から全ての教科において、基礎基本の定着の徹底及び活用力・応用力の伸長を図り、「全教科の正答率 70%以上」を目指して、以下のような取組を行っている

る。

①全国学力・学習状況調査の独自の結果分析（対策重要度A～Dの設定）

C 中学校の全国学力・学習状況調査の結果を独自に分析し、「結果分析，考察，改善策について」というリーフレットを作成している。

それぞれの教科の設問ごとに，対策重要度（A～D）を設定していた。今後，それぞれの教科でどのように授業を改善していくか具体的に示したり，領域・内容・分野等を分けて3学期までの指導計画を立てたりしていた。また，生徒質問紙調査から分かる「本校生徒の特徴」もまとめ，学校通信等で生徒・保護者に分析の考察や改善策も含め伝えることで，共通理解を図っている。

A：正答率 80%以上
B：正答率 70%以上
C：正答率 50%以上
D：正答率 50%未満

対策重要度の基準

②基礎基本の確実な定着

授業中の確認テストや定期テスト前の部活動停止期間中に行う補充学習（ガリガリタイム：全校生徒が食堂に集まって，1時間程度の自主学習に取り組む時間。生徒が互いに頑張っている姿を見ることがにより，自らの学習意欲を高める目的で行われている。教員に対して質問をすることもできる。）で，基礎学力の定着を図っている。

③学力ロードマップによる計画的な対策

低正答率問題を意識した単元計画づくり及び宿題の提示に努め，月1回学力ロードマップを使って進捗状況を確認している。学力向上ロードマップの取組は県の公立小中学校で実施しているもので，C中学校では実践したことを校内研修の場で全体確認をし，付箋を使ってその場で「見える化」をしている。また，職員が常に意識できるように職員室前の廊下に掲示している。



学力向上ロードマップ

④活用力を高める取組

市では学力・学習状況調査や県の基礎学力調査などの過去問を1問ごとに分割して朝学習や宿題など活用できるようにしたチャレンジシートを作成している。チャレンジシートの活用計画を作成し，教員による解説を行うことで活用力・応用力を高めている。

（2）〇〇中授業スタイルの推進

C中学校では校内研究の主題を平成 24 年度より「自ら進んで学習する生徒の育成」として、校内研究に取り組んできた。副題には、前年度の反省を踏まえて校内研究の重点となる内容を以下のように設定している。

平成 24～26 年度	「言語活動を充実させる学習活動を通して」
平成 27 年度	「生徒と共に創りあげる『ふり返し活動』を通して」
平成 28 年度	「生徒と共に創りあげる『見通し・ふり返る』学習活動を通して」

平成 26 年度の研究の際に、『〇〇（学校名）中授業スタイル』として生徒が主体的に学ぶ授業スタイルを以下のように設定した。

- | |
|---|
| ① 既習事項のふり返し（定着を図る） |
| ② 本時の課題を明確にして示す
○本時のねらいの達成に結び付く課題。具体的で分かりやすい言葉で提示。 |
| ③ 課題解決に向けての確認事項（指導事項）を確認する |
| ④ 思考・判断・表現の場面の設定（バードハミングとセイモア）
○バードハミング
生徒の言語活動を小鳥のさえずりと重ね、多くの生徒に対して、言語活動のハードルを意識させないで、思考・判断・表現させることができる授業スタイルの総称。
○セイモア
生徒の言語活動を活発にするための教員側の働き掛けの総称。 |
| ⑤ 本時のまとめ
○一般化（公式・要語に置き換えるなど）の視点や生徒の思考に沿ったまとめ。 |
| ⑥ ふり返り
○授業で分かったこと、気付いたこと→文章表記でふり返る
○授業でできるようになったこと→問題を解答することでふり返る |
| ⑦ 家庭学習の提示（宿題、予習、復習） |

言語活動を中心にした「〇〇中授業スタイル」は、最後のまとめ・ふり返りをする時間にたどり着かないこともあった。平成 28 年度は各教科のねらいに即した個々の生徒の学習が大切と考え、50 分の中で必ずまとめ・ふり返りを行い、学習課題の定着と学習意欲の高揚を図る時間を確保できるよう「単元見通し表（単元全体の計画表したもの）」を作成して、タイムマネジメント力向上のため「見通し」に重点を置いて「〇〇中授業スタイル」の推進に取り組んでいる。

(3) 家庭学習の充実

平成 28 年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査「家で授業の復習をしていますか」において、「している」、「どちらかといえば、している」と肯定的に回答をしている生徒の割合が、全国に比べ 30 ポイント以上上回っている。また、学校評価でも「その日の復習、次の日の予習に取り組んでいる」において 80%以上の生徒が「当てはまる」と回答している。十分な成果を上げている状況ではあるが、学校評価において 90%以上を目指し、家庭学習習慣の更なる定着を図るため、「ガリガリノート」と呼ばれる自主学習ノートの取組を充実させている。

ガリガリノートによる予習・復習を毎日 1 ページ以上取り組ませており、各教科からの宿題は別にあるが、提出率は 100%に近い状態である。意欲付けの一つのアイデアとして、ガリガリノートの 1 冊目は東京大学のロゴが入ったノートから始まる。これは「日本の最高学府のノートを使用させることで、C 中学校も名門校であるという意識を持たせたい」という前校長の思いから始められたものである。



ガリガリノート

3 年前までは予習・復習に取り組んでいる生徒は 20%台であったが、年々向上している要因の一つにガリガリノートがなっている。今では段位認定（取り組んだ冊数を段位としている）をしており、平成 28 年度の最高段位は 24 段である。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 教科専用教室で行われる授業

社会科、保健体育（保健分野）以外の授業は、全学年とも教科の専用教室で行われている。音楽科などのように元々、専用教室がある教科だけではなく、国語科、数学科、外国語科（英語）の授業についても、生徒数の増加がない状況で空き教室の活用法を考え、8 年前より教科専用教室で授業を行うようになった。

各学年で学ぶ学習の要点や作品等が掲示物等で残されていた。教科の学年の系統が生徒に自然に見える学習環境づくりがなされている。

また、教科専用教室の黒板横には、研究主題



国語科専用教室の背面掲示

における取組の一つとして生徒に学習の見通しを持たせることを目的として、単元見通し表が掲示されている。単元の中で関連のある掲示物を見つけ、学習の見通しが更に深まることにつながるのも教科専用教室の有効な点である。

(2) RG-PDCAサイクル

PDCAサイクルは多くの学校で行われているが、C 中学校では年度初めの4月にR (Research) とG (Goal) を位置付け、RG-PDCAとしていた。

R (Research) とは、生徒の現状を把握するということを意味している。アンケートを実施、目指す生徒像に対して、年度初めの生徒の具体的な姿を教員が把握することを目的にしていた。

G (Goal) とは、R (Research) で把握した生徒の実態に対して、数値目標を検討し、決定することを意味している。

RG-PDCAサイクルは、前期後期で2サイクル行っている。後期は学校評価(7月)の結果や前期のPDCAを基に、新たな数値目標を立てて10月から行っている。

(3) 主任会議の充実

校長は毎週行われる主任会議で、そのときに最も重要と考えられる指導事項や学校経営方針を伝え、それを具現化する取組を主任会議で立案していた。主任会議の構成は校長、教頭、教務主任、研究主任、進路指導主事、生徒指導主事の役職に該当する教員である。主任会議に参加する教員は、数々のアイデア豊かな取組を立案するとともに、生徒や保護者、教職員が親しみを持てる名前(ガリガリノートなど)を取組に命名し、学校全体に取組が浸透するように配慮されていた。C 中学校ではこの主任会議の充実が、学校を活性化する大きな原動力になっている。

(4) 研究授業の充実

全教員で1年に2回以上の研究授業、研究授業の授業参観及び研究協議を行っていた。研究授業を実施する際には、必ず県・市の指導主事を派遣依頼し、助言を受けている。

研究授業を終わった後には、授業者の反省をまとめて研究通信「教師ガリガリ物語」を発行している。内容は授業の実施までの取組、「実践の反省点」、「生徒の様子」、「課題」、「助言者の講評」で構成されており、生徒だけではなく、教員自ら「ふり返り」をする姿が「教師ガリガリ物語」の中には綴られていた。

5. その他の特色ある取組

(1) 小中連携

C 中学校の地区には2校の小学校があり、「家庭学習」と「授業における基本的なルール」を中心とした合同研修を年に2回実施している。C 中学校でも家庭学習の基盤となる自主学習については、児童生徒のノートを持ち寄り、形式や書き方について話し合いを行っている。

実施していることは、多くの学校で取り組まれている内容ではあるが、形だけの研修で終わらないよう、「そろえる」、「やり切る」ことを大切にして取り組んでおり、その成果がC 中学校の生徒の姿となっている。

6. 授業を参観して

(1) 授業の概要（第3学年国語：論旨を捉える）

論旨を捉える単元の第1時で、教材文「作られた『物語』を超えて」（山極寿一著 光村図書）の全文を読んで、本時の課題「筆者は『作られた物語』を超えるためにどんな態度を取る必要があると述べているか」を解決する内容である。

まずは、筆者の主張を表す三つの語句を見付けさせ、どの語句に着目しなくてはいけないか全員で共有した後、その三つの語句を使って、筆者の主張を生徒にまとめさせている。

『〇〇中授業スタイル』のとおり、バードハミングやセイモアも取り入れ、ふり返りまで50分の授業をタイムマネジメントした授業であった。

①生徒の様子

筆者の主張を表す三つの語句探しについて、大半の生徒は見付けることができていた。単元の第1時で初めて読む生徒も多い中、全体的に読み取るスピードも速い。生徒の「読む」力の土台の高さが印象的であった。見付けた語句についてのバードハミングも個で考え、周りの生徒と意見交換をし、全体の場で更に考えを交流し合う姿を見ることができた。

筆者の主張をまとめる段階では、三つの語句の語順を考えながら、字数制限を意識して半裁の原稿用紙に記述することができていた。記述中に教員の指示もあったが、しっかり耳を傾け、三つの語句に関する語順も考えながら筆者の考えをまとめることができていた。

ふり返りの意見交流では、筆者のまとめ方に関する自分の考えを伝えるには至らなかったが、単元名でもある「論旨を捉える」力も十分に備わっていることを感じさせる生徒の姿であった。

②授業者の取組

授業者のS教諭は研究主任でもあり、「C中授業スタイル」を一番意識している教諭である。「見通し・ふり返る」学習活動を実現するために50分の授業をタイムマネジメントすることや生徒のバードハミングを活発化するためのセイモアは、入念な授業準備があるからである。

生徒の思考を整理する板書、意見交流のためのホワイトボード、単元を見通すための単元見通し表などS教諭の計画通りに授業が進められていたのが印象的であった。



生徒の思考を整理する板書

③学力・学習状況の改善との関連

平成27年度全国学力・学習状況調査において、C中学校の課題がある問題は以下のとおりである。

平成27年度全国学力・学習状況調査におけるC中学校の課題がある問題の正答率（％）

出題の趣旨（問題番号）	C中	全国
複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書く (国語B ² 三)	46.5	23.3
文章の構成や展開などを踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書く (国語B ³ 三)	25.6	31.7

C中学校では対策重要度D（114ページ参照）として、生徒及び保護者にも学校通信特別号で「立場と根拠を明確にして書く等の学習を通して、書く力を伸ばしていく」、「論旨を捉える単元学習を通して、読む力を更に伸ばしていく」と今後の対策を伝えている。

本時の授業は、平成27年度の課題を意識した授業であったが、筆者の主張の根拠となる語句を明確にすることを多くの生徒はできていた。

今回の授業だけではなく、結果を真摯に分析し、授業だけではなくチャレンジシート等でも課題を改善しようと取り組み続けた結果、平成28年度全国学力・学習状況調査において、平成27年度と同趣旨の問題においては以下のような結果であった。

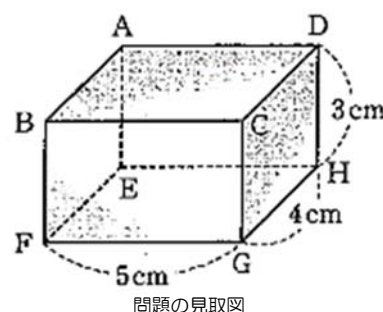
平成 28 年度全国学力・学習状況調査における C 中学校の課題がある問題の正答率 (%)

出題の趣旨 (問題番号)	C 中	全国
本や文章などから必要な情報を読み取り, 根拠を明確にして自分の考えを具体的に書く (国語 B 3 三)	74.2	58.4
文章の構成や表現の仕方について, 根拠を明確にして自分の考えを具体的に書く (国語 B 1 三)	83.9	68.4

前年度の課題を意識して, 第 2 学年の後期から授業の中でも意識してきたことが分かる授業であった。

(2) 授業の概要 (第 3 学年数学: 三平方の定理)

「三平方の定理」の単元の後半の授業で, 「右の図のような直方体に点 B から点 H まで糸を巻き付けるとき, どのように糸をかければ糸の長さが最も短くなるのか」という課題に取り組む授業であった。



まず, 授業の導入時には, 手作りされた格子状の直方体の模型に糸を巻き付ける様子を授業者が見せ, 糸の巻き付け方により, その長さが変わることを確認した。また, 巻き付けた糸が接する部分を展開図に書き込むことで糸の長さを計算で求めることができるという見通しを生徒に持たせていた。

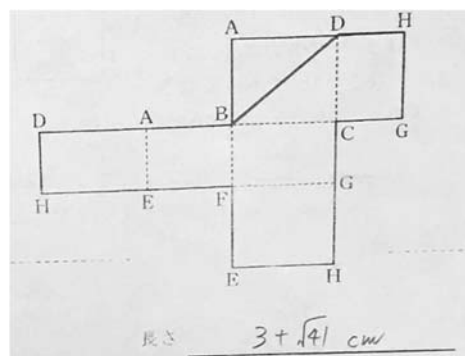
解決への見通しを持たせた後は, 個別に問題解決に取り組み, その後で 3~4 人の小グループを作り, 互いの考えを交換する流れであった。

計算の結果からどの巻き付け方のときに最も糸が短くなるのかを全体で確認し, 本時の課題を解決した後, 適応問題として類似の問題を演習した。

① 生徒の様子

通塾率が低いこともあってか, 本問題の解き方をあらかじめ知っていた生徒はあまり多くなかった。それゆえ, 生徒は点 B から点 H に向かう糸の巻き付け方について様々な検討をしており, グループ単位の活動においては, 糸の巻き付け方とその長さについて活発に話し合う姿が見られた。

特に興味深かったのは, 展開図に描い



展開図: 生徒の最短距離を求める考え方

た糸の様子から「点 B から FG を通って点 H に向かう糸の長さが最も短く、 $\sqrt{74}$ cm となるはずだ」と結論付けたものの、「点 B から点 D を通って点 H に向かう糸の長さ $(3 + \sqrt{41})$ cm が $\sqrt{74}$ cm よりも短いのではないかと考えたグループの話し合いの様子であった。それぞれの値を 2 乗して比較した際に、 $(3 + \sqrt{41})^2 = 3^2 + (\sqrt{41})^2$ と考えたことによる誤りであったが、この間違いに気付くまでに展開図について検討したり、計算の見直しをしてみたりと、問題解決に向けて真剣に考え、話し合う姿が印象的であった。

②授業者の取組

授業者の Y 教諭の授業も S 教諭の授業と同様、「C 中授業スタイル」を意識したものとなっていた。課題に対して個別に取り組ませる前に、模型を利用した操作から解決への見通しを持たせていた点やバードハミングを意識したグループ活動を取り入れていた点など、効果的な指導方法が多く盛り込まれていた。特に、バードハミングについては解決に向けて生徒同士が積極的に話し合う姿が自然なものとなっており、普段から話し合いによる解決を促す授業が展開されている様子を感じ取ることができた。

③学力・学習状況の改善との関連

本時の授業においては、「糸の巻き付け方」や「巻き付けた糸の長さ」について、子供たちが互いの意見を交換しながら課題解決に向かう姿が多く見られた。このように子供たちが話し合い活動を通じて課題解決に向かうことができた要因としては、図形や計算における基礎的・基本的な知識・技能が定着していたことが考えられる。

平成 28 年度全国学力・学習状況調査における出題の趣旨と問題の正答率 (%)

出題の趣旨 (問題番号)	C 中	全国
整式の加法と減法の計算ができる (数学 A <u>2</u> (2))	93.5	84.3
空間における直線と直線との位置関係 (辺と辺とがねじれの位置にあること) を理解している (数学 A <u>5</u> (1))	100.0	75.9
筋道を立てて考え、証明することができる (数学 B <u>4</u> (1))	38.7	30.0
付加された条件の下で、新たな事柄を見だし、説明することができる (数学 B <u>4</u> (2))	48.4	38.1

平成 28 年度全国学力・学習状況調査の結果からもわかるとおり、C 中学校においては、計算の技能や図形の知識など、基本的な知識・技能は定着している状況にあり、これが基盤となってより深い学びとなる授業が展開されている。チャレンジシートの活用やガリガリノートによる家庭学習の習慣化などが要

困となり、基礎・基本の定着を実現させている状況においては、授業もより深まりのあるものとなっている様子がうかがえた。

D 中学校

国語の総合的な学力形成を基盤にしながら すべての平均正答率を向上させた取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和22年開校）		
校区内小学校	1校		
学級数	10学級	第1学年 2学級（46名）	第2学年 3学級（72名）
生徒数	192名	第3学年 2学級（65名）	特別支援学級 3学級（9名）
教職員数	24名	校長・教頭	各1名
		教諭	16名（うち養護教諭1名）
		講師	3名
		司書	0名
		事務，学校用務員，サポーター等	

【学校の特色】

瀬戸内海沿岸に位置する本校は、その近くに総延長約8kmにおよぶ美しい海岸を有している。様々な「百選」にも選定され、夏は観光客が絶えることがない。波も静かで、明治初期まで北前船の港町として賑わっていたという。

もともと、学校とのつながりがとても強い地域ではあるが、4年前からコミュニティ・スクールとして、これまで以上に地域との連携を深めている。校長は、赴任して4年目であり、まさにコミュニティ・スクールの始まりを自分の眼で見てきた。さらに、校長は赴任した当時、教頭職であり、そのまま校長として昇格している。校長の眼とともに、教頭の眼も併せ持った学校経営を行ってきた。

地域は安定し学校に対しても親近感を持っている家庭が多いが、その反面、外部の者を受け入れるまでに少し時間がかかる面もあるという。しかし、いったん地域の人たちに受け入れられ信頼されれば、その後は大変協力的な態度になってくれるという。就学援助率は、ここ最近30%を超える年度が多い。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

就学援助率が30%以上の学校のうち

- 国語Bの正答率：75.6%（全国平均：67.1%）で、全国上位に位置
- 数学Aの正答率：70.6%（全国平均：62.8%）で、全国上位に位置
- 数学Bの正答率：51.9%（全国平均：44.8%）で、全国上位に位置

②その他の注目すべき特徴

- 昨年度からの推移は、全国平均と比べ、国語Aで2.3ポイント、国語Bで6.7ポイント、数学Aで7.8ポイント、数学Bで6.4ポイント上昇
- 国語Bにおいて、学力層下位のCD層が22.8%(全国平均:約36.0%)
- 記述式設問に対する無解答率 国語Bで 5.5%(全国平均 12.2%)
数学Bで 13.6%(全国平均 18.0%)
- 生徒質問紙「国語の授業内容がよくわかる」に「当てはまる」と答えている生徒が53.0%(全国平均 26.4%)

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
79.5%	75.6%	70.6%	51.9%	40.9%	30～50%
(76.0%)	(67.1%)	(62.8%)	(44.8%)	(60.8%)	

2. 取組の背景

本校は地域が安定しており、これまで取り立てて生徒指導上の困難さはなかった。平成19年からの3年間は、就学援助率も10%前後であり通塾率も70%前後であった。これまで特別に学力の低さを感じたことはなく、さらには生徒指導上の問題も特別になかった。質問紙調査「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という問いには、86.4%の生徒が肯定的な回答をしている(全国平均は45.2%)。

平成27年から文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」における「強化地域拠点を形成する研究校指定」を受けており、様々なアプローチから、さらなる学力向上を目指してきた。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 豊かな言語活動を基盤とした様々な学習

①「話し合いたい」気持ちを大事にした国語授業

3年間、生徒を指導してきたY教諭の授業スタイルは独特である。何かを強引に教え込もうとは一切しない。「どうですか？」という発問を用い、対峙した教材文に対して生徒自らが働きかけようとする気持ちが生まれるのを、じっくりと待つ。与える教材を吟味し、そこから様々なことを連想させ、生徒同士の対話を重視する。国語の学習がすべての学習の基本であることを実感させる。

②「国語便覧」を活用した発展学習

すべての生徒に副読本として持たせている「国語便覧」。古文を学習した際は、百人一首の学習に発展させるなど、生徒に興味を持たせる意味でも、「国語便覧」を活用することが多い。

③ミュージカルの実施【詳細は、後述】

毎年行われる文化祭の最近のメインは、生徒のミュージカル上演である。1か月前から準備し、役者とともに裏方の生徒も、多くのことを学ぶ。

(2)「学力向上推進リーダー」を中核とした「ユニット型授業研究」

たいていの学校には研究授業があるが、特に中学校だと教科の壁があり、さらに小規模校であると人数も限られることから、なかなか校内研究が活性化されることが少ない。しかし本校では、少人数による教科の壁をこえた授業論を中心とした「ユニット型授業研究」が行われている。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 文化祭におけるミュージカルの実践

Y教諭が赴任して以来、毎年、文化祭にミュージカルを行っている。三年生を担当するY教諭とH教諭は、2人ともミュージカルが大好きである。ミュージカルの題目も様々であり、これまで『人間になりたかった猫』『夢から目覚めた夢』など劇団四季のものをアレンジする場合もあれば、「吉本新喜劇」のように、独自に台本作りをする場合もある。すべての学年からの応募があり、その数は50人以上。そのうち、約半数が裏方に徹する。準備は1か月以上かかるという。

Y教諭は、ミュージカルの完成までの過程が生徒を成長させると力説する。劇中で使うセリフについても吟味しながら、表現活動を充実させている。

(2) 学力向上推進リーダーによる「ユニット型授業研究」

今この県では、加配教員予算の一部を、特定の学校の教員加配に利用するのではなく、日常の授業改善のために役立つ「学力推進リーダー」に充てている。

市町村ごとに小学校中学校1名ずつの「学力向上推進リーダー」、そして数名の「学力向上推進教員」が配置される。平成23年からスタートしている。「学力向上推進リーダー」は職名としては、小中学校の教頭であるが、実際には週3回は外部の学校に出かけ、授業の指導をする。定期的に授業に入ることで、児童生徒の学習意欲や学力の向上が期待でき、さらには、指導

方法・指導形態の工夫や効果的な少人数指導への取組、他校での取組事例の紹介などで校内研修を活性化することもできるようになる。学力向上推進リーダーは、授業づくりに対する見識も深く、実際の教頭業務を現場でも行っているため、助言は適切であり、各学校の教員に素直に受け止められることが多いという。なお、学力向上推進リーダーが来校する頻度は、一か月に6時間分である。

職員を4人のチームにする。例えば、2時間目にA教諭の授業研究、3時間目にB教諭の授業研究が続く。その2時間は、そのほかのC教諭、D教諭とも授業参観をする。そして、5時間目には研究協議が4名の教諭と学力向上推進リーダー、そして管理職も交えて行われる。時には、授業を受けた生徒自身が協議会の冒頭で、授業感想を言う場合もあるとのことである。違う教科の者が組むことが多く、自ずと教科論ではなく、授業論になっていくという。

(3) 『学び愛』の時間

定期テスト2週間前から、「学力向上週間」が始まる。通常、期末テストでの保健体育、美術、音楽、技術家庭の扱いは他の教科と同一日で設定されるが、D中学校では、1週間前の段階で保健体育、美術、音楽、技術家庭のテストがある。

その後の1週間は、部活動も中止となり、6時間目終了後に「学び愛」が始まる。清掃があるときは30分、ないときは50分である。各自が自主学習を行い、家庭でのテスト勉強の見通しを立てる。不明な点は教師に質問したり、生徒同士で教え合ったりする。ここでの特徴は、たとえば数学担当の教員だけが数学に対応するのではなく、全職員一丸となっていくことである。校長は保健体育の免許を持っているものの、数学も個別に教える。数学の免許を持っていなくても、数学が得意な教員は、積極的に生徒に教える。「みんなが学習者」というスタンスで臨む。

5. その他の特色ある取組

(1) 小中の緊密な連携

コミュニティ・スクールである本校には、校区内の小学校と共通のロゴマークがある。また、合同研修会が一年に二回ある。両小中学校の教員が三部会（国語・算数数学・理科）に分かれ、全国学力・学習状況調査の結果から正答率が低かった問題を抽出し、その原因や具体的な指導方法について協議する。小中連携推進委員会も、年に4回開催され学力に関する情報交換を行っている。

(2) 互いをよく知り合っている学年団

基本的には3年間の持ち上がりで同じ生徒集団を担当させている。そのため、1つの学年団で結束力が生まれ、仲が良いことが特徴的である。現在3年生を受け持つY教諭とH教諭は、さらに二人とも演劇に興味を持っており、協働して生徒を高めていこうとする気持ちが強いと感じられた。

(3) 生徒による授業評価アンケート

例えば「授業の最初には、何について学ぶのか、授業のめあてや学習課題がはっきり示されていたか」のような質問を10項目設定し、年間3回のアンケートを実施し、その結果を校内で共有している。併せて、生徒の自由記述もあり、そのアンケートに基づいた授業改善を心がけている。

(4) 学習委員会の取組

テスト勉強に対する意欲を向上させるため、「日めくりカレンダー」「学習時間累計カード」を作成している。

6. 授業を参観して

(1) 第3学年国語：状況を読む

①授業の概要

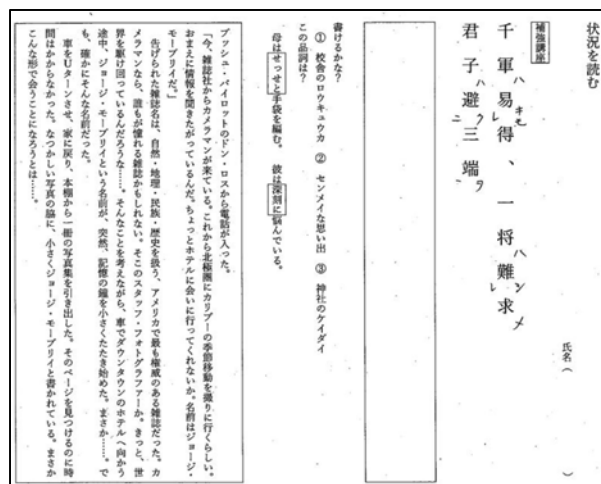
授業が始まり、右のプリントが配られた。Y教諭が必要部数を前の席の生徒に配るのだが、自然と「ありがとうございます」という言葉が返ってくる。それに対して、ごく自然に「どういたしまして」と応える教員。言語環境が整っている一面が垣間見えた。

まずは、漢字の書きである。間違った漢字については、「ノートに心を込めて2・3回書きなさい」という指示のみ。また、「老朽化」と確認した際

は、「不朽の名作」という言葉を例として出し、どのような意味なのか生徒に問うた。様々に関連させて漢字を覚えさせたいという思いが強く見られた。

品詞の学習の後、漢文の学習に入った。漢文の書き下しをさせ、まわりの生徒同士で確認し合った。

漢文の1行目を取り上げ、「どういう意味だと思う」と問うた。漢字だけでおよそイメージはつかめるので、そのイメージを、まずは出させることから始



めた。

『千軍易得，一将難求』については，ある生徒が「千人いても，すぐれた人は一人もいないことかなあとと思います」と発言した。それに対して，Y教諭は「リーダーはなかなかいないことか」と反応する。また，「千人を倒すことができても，将軍を倒すことは難しいことだと思います」という解釈を言う生徒に対しては，「本当か？」と投げかける。「千人の兵隊ならよいのだが，優れた才能を得るのは難しい」という応えには，「サッカーに例えたなら？」と，すかさず問い返しをする。「日本人はゲットできるが，海外の有名選手を獲得するのは難しい」。「野球に例えるなら？」と，次々に会話が続く。それらを聞きながら，自分の考えを形作っていくのである。

『君子避三端』については，まず「君子ってどういう人？」と問う。生徒が「身分の高い人」と即座に答えると，「本当にそうかなあ…，はい，近くの人と確認しましょう。」と投げかける。間の取り方がうまく，生徒同士の話し合いも約30秒程度である。テンポがあり，リズムがある国語授業である。「欲がない人」という生徒の反応には，「あながち間違っていない。」と返す。「あながち」という言葉を自然と使っていくのも，大切な言語環境である。次は「三端」の意味である。教師側から，その意味を教えるということは決してない。「端から，どんなイメージを受ける？」と問うことで，「はしっこ」などの反応が生まれる。「本当に立派な人（君子）は，これを避ける」と考えるが，なかなか考えをまとめきれない。

Y教諭は「ヒントほしい？」と焦らす。このあたりもベテランらしい展開である。生徒から「ください」という声があがると，黒板に「筆端・鋒端・舌端」と書いた。ここから様々に連想させ，生徒なりの言葉で表現させる。この段階で「めあて」として，「状況を読む」という言葉を板書する。「LINE（ライン）はどれになると思う？」と，さらにヒントを投げかける。「つつい尖った表現をしてしまうよね。それは筆端だね」と，まとめる。最終的には，筆端（筆の先），武士の鋒端（刀の先），弁士の舌端（舌の先）と，話をまとめる。

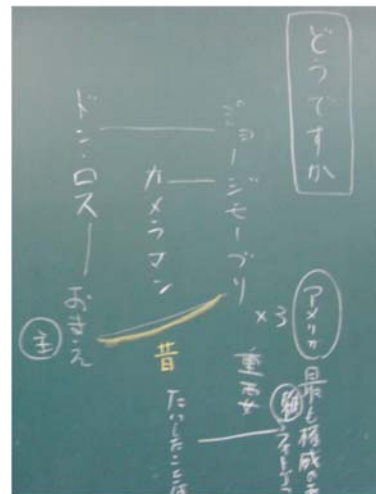


最後に，プリント左側のお話を読むように促した。この文章は，教科書に載っている文章の冒頭部分である。最終的には，次の展開を予想させるのであるが，それまでに，読み取りをする。

Y教諭は、「君たちは、いきなり文章のかけらを渡される。ある一つの文章であっても、その途中から読んで、ある程度の全体像を把握する必要がある。」と言う。読み取りとは、結局「状況を読む」ことに尽きるのかなと思う。「どうですか」という発問によって、「ジョージ・モーブリが3回出ている」とか、「カメラマンも3回出ています」という発言が続く。

②生徒の姿

下の図は、ある生徒が書き込みをした途中の様子である。登場人物や行動したことを丸で囲んだり、矢印で関係を表現したりする。



読み取りをしている時間、どの生徒も、自分でこのような活動をしていた。特別に何らかのきまりがあるわけではないらしい。ただ様々な生徒の書き込み様子を見てみると、少なくとも登場人物を囲み、「ジョージ・モーブリ→カメラマン」など、関係を結び付ける表記を多用していることがわかる。

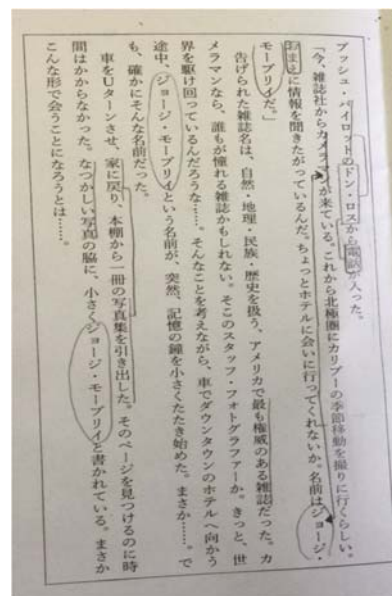
授業後に、3年間、Y先生から国語を習った男子生徒に授業感想を聞いた。彼は、国語が好きだという。その理由を尋ねてみると、「Y先生が好きだから」という。一般的にこのような反応は小学生に見られると考えていたが、中学生にも当てはまることに驚いた。

③授業者の取組

形式的にグループを組ませ、話合いの機会を持たせたとしても、必ずしもその話合いが深まることはない。それは、「どうしても友達と話合いたい」という思いがないからである。Y教諭は、生徒が話をしたくなるまで待つという。実際、授業の中でも、発問に対して生徒の言葉がなくなってもY教諭は決して慌てず待つ。そうすることによって、自ずと生徒は考えざるを得なくなる。

④学力向上との関連

ノートに意見を書かせたら、必ず友達同士で見せ合う。そうすることによって、よい書きぶりは自然に真似するようになるという。



(2) 第3学年数学：円の性質

①授業の概要

本時は、第三学年単元「円の性質」の単元における円の性質を利用して問題解決する時間である。

導入では、前時の学習内容について復習の場面を設けた。具体的には、前時に学習した「円の接線の作図方法」について確認した。特定の生徒だけに指名するだけでなく、その作図方法について、手を使った動作でも確認し、学級のほとんどの生徒がその作図方法について理解していることを、授業者は評価しようとしていた。その後、前回と同様に「円の性質」を利用して解決していくことを指示することで、学習に対する目的意識をしっかりと持たせていた。

展開では、問題解決への見通しを立てる場面を設け、三角形の相似条件について確認した。生徒は、周りの生徒にその条件を実際に音声言語として伝えるとともに、授業者も個々の生徒の状況を把握し、細やかに声をかけていた。

解決の見通しを立てた後、自力解決に取り組んだ。授業者は、生徒の様子を見ながら、証明を書き終えた生徒を集め、個別に助言をしていた。正誤だけを見るのではなく、生徒の躓きにに応じて声をかけており、個の学びに寄り添った指導が見られた。自力解決をする中で、生徒は周りの生徒に尋ねたり、席を立ち歩き、教え合ったりする姿も見られた。授業者が生徒同士で解決方法について確認し合うことを促し、証明を書くことのできる生徒だけでなく、証明を書くことが難しい生徒も意欲的に取り組み、学級の生徒みんなの問題解決に向かった。

終末では、本時に取り組んだ証明に「円の性質」が利用されていたことを確認し、さらに問題が提示された。残り時間の関係でそれを解くことはできず、家庭での課題として取り組んでくるよう指示をした。

②生徒の姿

図形の論証の時間であるが、多くの生徒が自分で考えることや、既習を基にして考え、そのことを表現することに前向きに取り組む姿が見られた。学習者が横のつながりの中で問題を解決していく様子は自然で、むしろ、そこで教え合ったり、説明し合ったりすることができ、協働的に学習を進めることができる集団であった。集団で解決することのよさ、そこから得られる学びに達成感を感じ、自ら学びを進めることができる。話し合いにおける生徒どうしのやりとりをみても互いに聞き合い、そして認め合うこともでき、集団としての営みが数学以外の教科、領域等を含めた教育課程全体で培われていることが考えられる。

こうした生徒の動きの中で特徴的であったのは、生徒が問題解決をした後、その解決の正誤についてまたはその方法について、助言を授業者からもらう場

面があったこと、さらに、助言をもらった生徒は、自席に戻り再び修正や加筆を行ったという生徒の行動である。自席に戻った生徒は、授業者からのコメントをもとに周りの生徒とよりよい解決方法を話し合ったり、自分たちの誤りの原因を見つけ修正したりと、粘り強く問題解決に取り組む姿が見られた。理解に困ったり躓いたりする生徒がそのままにされず、生徒どうして問題点を見いだし、自分たちを評価していく様子がみられた。

③授業者の取組

授業者は、生徒が数学における基本的な事項を習得すれば、それを活用して問題解決をすすめることができると考えている。実際、「知識・理解」の評価にあたるようなことを、みんなで確認する時間をとっている。

本時の問題について、その提示や解決の見通し等の場面が設定されているだけでなく、発問もシンプルであり、授業者の指示も少ない。そのため、生徒の自力解決の時間も保障されることとなり、生徒が考える時間が多くとられている。

解決をした生徒は、教師に自分のノートを見せにいき、教師からの助言を受ける。間違った生徒は自席に戻って再び取り組む。一見、教師の指示的な授業に見えるが、生徒が自身で取り組んだり考えたりする場面をしっかりととっていることもあり、生徒は自立的に学びを進めることができている。

④学力向上との関連

前述したとおり、本校は、平均正答率の高さだけでなく、中学校3年生における低位層の改善が特徴的である。このことについて考えられることが2点ある。

一つは、評価の観点である「技能」「知識理解」についての習熟に取り組んでいるところである。授業での確認であるが、日常的に教師より提示される家庭で行う課題についても意図的・計画的に組まれており、またそれをほとんどの生徒がしっかりと取り組むことができているという実情からくるものだろうと考えられる。

2つ目は、3年生の生徒が協働的に問題解決を進めることができる学習集団となっていることが影響していると考えられる。先述したとおり、わかる生徒も躓いている生徒も一緒になって考え、みんなで問題解決を進めることができる生徒たちであることが、改善に影響を与えていると考えられる。

E 中学校

国語の「根拠を明確にして自分の考えを具体的に書く」問題の正答率が高く、質問紙「考えの理由が分かるように気を付けて書いている」について、肯定的な回答の割合が高い例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和23年開校）		
校区内小学校	1校		
学級数	11学級	第1学年 3学級（84名）	第2学年 2学級（80名）
生徒数	251名	第3学年 3学級（82名）	特別支援学級 3学級（5名）
教職員数	24名	校長・教頭・主幹教諭	各1名
		教諭	16名（うち養護教諭1名）
		講師	数学、英語、理科各1名
		司書	1名
		事務職員、学校用務員、スクールカウンセラー、ALT等	

【学校の特徴】

都道府県庁所在地である大都市に隣接し、近年、商業地化、宅地化が進み、生徒が増加している地域に位置する町に1校設置された中学校。校区の小学校は1校のみの中規模校である。地域の学校としての使命感をもち、教職員が同じ価値観とベクトルを共有させ、組織として有効に機能すること、生徒の「学力」を保障する責任を持ち、指導技術を高めること、そして、「学び合い」が定着した学校を構築すること、これらの取組を実践することによって、生徒の豊かでゆとりある生活と文化の向上を目指している。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 平成28年度国語Aの正答率：81.1%（前年度：69.7%。全国平均：76.0%）。
- 平成28年度国語Bの正答率：75.5%（前年度：61.5%。全国平均：67.1%）。国語B1三の正答率：87.8%（全国平均：68.4%）。
- 平成28年度国語BのC層の割合：9.8%，D層の割合：11.0%。
- 児童生徒質問紙項目「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：50.0%（前年度：19.3%。全国平均：23.1%）

②その他の注目すべき特徴

- 全ての教科でC層，D層の割合が減少。

【参考：基本データ】（ ）は平成27年度

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
81.1% (69.7%)	75.5% (61.5%)	67.1% (53.6%)	50.1% (34.2%)	53.7% (60.2%)	20~30%

2. 取組の背景

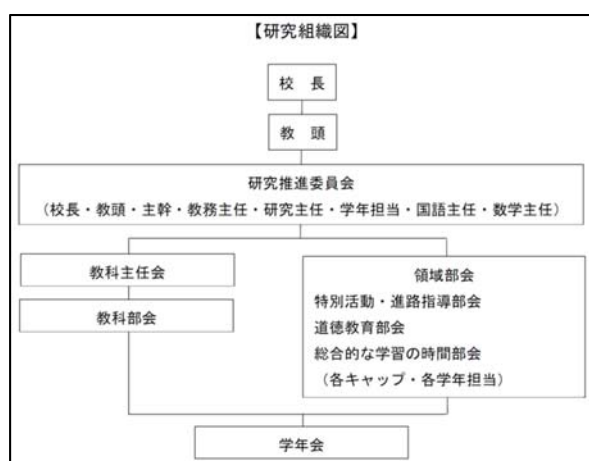
県の学力向上及び組織力向上に係る事業の研究指定を受け、学校経営計画を基に、生徒の学力向上を目指した組織的な授業改善の取組を進めてきた。しかし、取組を始めた数年間は、全国学力・学習状況調査等において、思うように生徒の学力の定着を図ることができない状況があった。

そのため、平成24年度から、「各教科等の基礎・基本を身に付けさせること」、「生徒が意欲的に関わり合う授業を構築すること」を二本の柱として、深く学ぶことのできる力の育成を目指してきた。授業研究を中心として、学校全体がチームとして一丸となって、研究に取り組むことができるような仕組みづくりを行ってきた。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 研究の組織づくり

研究推進委員会のメンバーを、学年担当だけではなく、複数の学年を担当する教科主任を加えて構成し、学校全体で研究を進めていくことができるようにしている。また、教科の連携を図るための教科主任会を位置付けるほか、国語と数学については、週1回の教科部会を時間割の中に組み込み、授業実践を通して、研究の方向性を修正しながら進めることができるようにしている。



研究組織図：国語・数学については、週1回の教科部会を時間割の中に組み込んでいる。

(2) PDCAサイクルを意識した校内研修の実施

①校内研修計画の早期提案・確定

研修計画を早期に提案することで共通理解を図り、授業研究の準備の時間を確保することができるようにしている。

②授業づくりの共通理解を図るための全校授業研究の位置付け（4月実施）

4月に全校での授業研究を実施し、新しい組織で授業づくりの共通理解を図ることができるようにしている。

③全教科で進める授業研究の際の視点「5つのポイント」の明確化

- ・本時の目標を生徒は達成することができていたか。
- ・生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するような学習課題が設定されていたか。
- ・本時の学習内容を理解し、生徒は言語活動の充実を図ることができていたか。
- ・生徒同士の意見をつなげていたか。
- ・表現力を付けさせるために、発表のさせ方の工夫や全体共有がなされていたか。

④学習指導案検討会の充実

授業研究会などを行う際は、教科部会→各学年→研究推進委員会という流れで学習指導案を検討し、生徒の具体的な姿や活動を想定しながら、教科の枠を越えた教員同士の教材研究を行っている。

⑤「授業参観ミニカード」の活用

授業研究の際の視点「5つのポイント」を示した「授業参観ミニカード」を用いた授業研究を行っている。また、教師の発言や生徒の反応などについて観察・記録したことを事後の研究協議で活用するとともに、「今回の授業提案を通して学んだこと」、「今後の授業に生かしたいこと」という観点で授業を振り返り、日々の授業改善につなげることができるようにしている。

日時	月日()第 校時	教科	授業者	学級	年組
題材・単元			授業者		
参観の視点				評価	
1. 本時の目標を生徒は達成することができていたか。				4	3 2 1
2. 生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するような学習課題が設定されていたか。				4	3 2 1
3. 本時の学習内容を理解し、生徒は言語活動の充実を図ることができていたか。				4	3 2 1
4. 生徒同士の意見をつなげていたか。				4	3 2 1
5. 表現力を付けさせるために、発表のさせ方の工夫や全体共有がなされていたか。				4	3 2 1
【今回の授業提案を通して学んだこと】					
【今後の授業に生かしたいこと】					

授業参観ミニカード：授業研究の際に全校で活用している。

⑥教育委員会の定期的な訪問による検証場面の設定

県の組織力向上に係る実践研究事業の研究指定校として、学力向上スーパーバイザーや指導主事による定期的な学校訪問の際に、校内研究の推進状況や授業改善の状況などについて適宜指導・助言を受け、学校の取組の検証場面の一つとしている。

(3) 授業研究の充実

①キャリア教育の視点に基づいた各教科の授業の構成

人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力などを意識した授業提案を行っている。

②授業研究の際の視点「5つのポイント」に基づく授業づくり

授業研究の際の「5つのポイント」に基づく授業づくりを行い、授業後は、これらのポイントに的を絞った協議を行っている。また、全教員が年間2回以上の研究授業を実施しており、毎年1月には、自主公開授業研究会を開催して全教員が授業公開を行い、学校全体で授業改善のための取組を進めている。

③協働の具体モデルの提示

各教科の目標を達成させるために、グループでの思考を深める手立ての一つとして、全教科で「学び合いの方法」のカードを活用している。カードに示されている話し方や聞き方、言葉の使い方などはあくまでも例であり、実際の学習場面では、ここに示されたものだけではなく、多様な表現をするように生徒に促している。

④教科部会の実施

過年度においても一つの学年を複数の教員で受け持つ状況があり、本年度からは、国語科と数学科で実施し、時間割の中に教科部会を組み込むことで、生徒の情報共有を密に行うとともに、授業改善を図るための指導方法の共有化を進めている。

学び合いの方法

～相手にきこえる声で、はっきりと～

【グループ交流の流れ】

司会 「今から（ ）について話し合います。」
全員 「お願いします。」
司会 「時間は（ ）分です。では、〇〇さんから発表してください。」

*発表者の意見を主体的にきく。
*全員が意見を積極的に言う。
*意見が言えない人は「少し考えさせてください」と伝える。
*敬体（「です」「ます」）を使って話す。
*参考にしたい意見をメモしながら交流する。（赤ペンを使う）

〇〇 例「私が興味をもった ① のは、教科書〇ページ〇行目のところです。なぜかというと……からです。」

司会 「ありがとうございました。」
「〇〇さんの発表を聞いて意見や感想 ② を言ってください。」

司会 「次に、〇〇さん。発表してください」
*2人目以降、1人目の流れを踏まえて交流する。司会は最後に発表する。

〈意見の内容をまとめる場合〉
司会 「話し合いをまとめると（ ）です。」
〈意見の内容を整理する場合〉
司会 「話し合いを整理すると……のような意見が出されました。」

司会 「みなさん、よろしいですか。」
全員 「いいです。」
司会 「以上で、交流を終わります。」

(注: 下線部分は、交流の内容によって異なる。)

【つなぎ言葉の主な例】

・～さんに賛成で…	・もし～だとしたら
・～さんと同じで…	・～さんが言ってくれたように…
・～さんに反対で…	・～さんの言ったことをもう少し詳しく言うと…
・まとめて言う、つまり…	・～さんに聞きたいのですが…
・言い換えると…	・～さんの意見で分らなかったのは…
・例えば…	・図や絵で表すと…、記号や式にすると…
・ここで大事なことは…	・分かったことは…

「学び合いの方法」カード：グループでの思考を深める手立ての一つとして全校で活用している。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

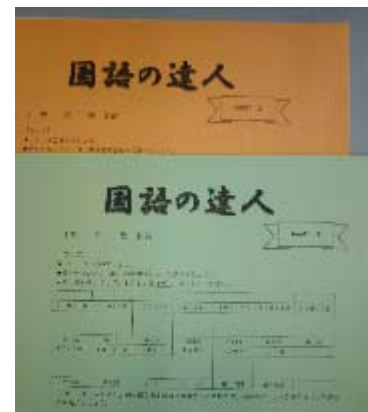
(1) 全国学力・学習状況調査の効果的な活用

毎年、全国学力・学習状況調査の実施後には、教科担当が直ちに自校採点を行い、分析を行っている。その分析結果を、教科部会、学年部会、職員会議で共有し、「学校全体でどのようなところを改善すればよいか」、「どのような授業づくりを行っていくのか」などについて全教職員で考え、授業改善に生かしている。また、校内研修で、全教職員で全国学力・学習状況調査の各教科の問題を解き、今求められる力を具体的に捉える取組を行っている。その上で、国語・数学・理科・社会・外国語の5教科で授業改善プランを作成している。さらに、その検証項目として、定期テストにおける思考力等を問う評価問題の到達状況を位置付けている。

(2) 宿題の質と量の確保

全ての生徒に、各教科の基礎的・基本的な知識及び技能を定着させ、家庭学習の習慣化を図るために、各教科で独自に作成した家庭学習冊子に取り組みさせているほか、授業とリンクした内容の課題を提示している。

その際、研究推進委員会を中心に教科主任会、学年部会での連携を図り、生徒の実態に応じて宿題の量や内容等を調整しながら取組を進めている。



家庭学習冊子：生徒が取り組んだ内容について、その都度教員が評価している。

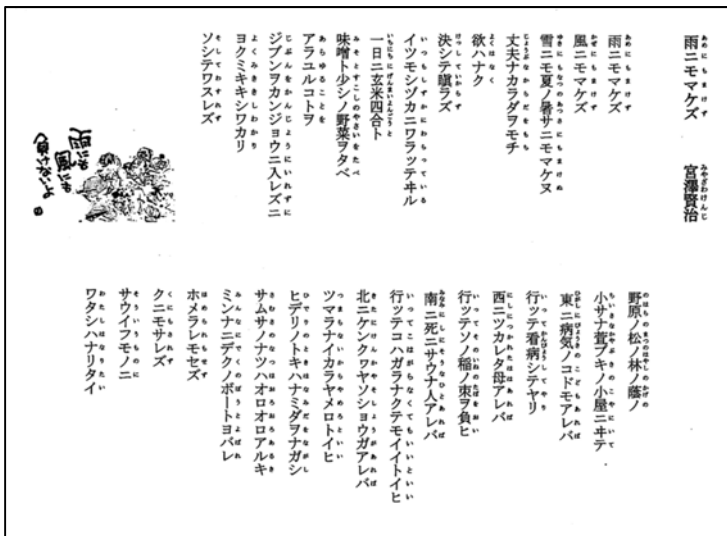
(3) 補充的な学習の充実

生徒の学習状況を的確に捉え、その課題解決を図るために全校体制で、放課後や長期休業中に補充的な学習を行っている。学習内容については、全国学力・学習状況調査等の分析を踏まえ、研究推進委員会による提案を受けて、教科部会や学年部会で検討して決めている。また、定着状況を把握するために、到達目標を設定した評価問題に取り組ませている。

(4) 小中連携の強化

一小一中の利点を生かし、月1回の管理職、研究主任による小中連携会議の実施、両校の校内研修への参加、夏季休業中の小中合同研修の実施などを通して、授業づくりや家庭学習、生徒指導の在り方等について協議を行っている。

また、全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえ、各教科における小中9年間のカリキュラム作成を行っている。さらに、平成28年度には、学力向上に資する副読本を作成するなど、学習内容での連携にも力を入れている。



小中の教員が児童生徒の実態を基にした協議を行うことで、系統立てた指導方法や取組を共有し、発達段階を踏まえた連携を行っている。



『音読集』編

名前

副読本：小学校と中学校が連携して作成した『音読集』。

6. 授業を参観して

(1) 授業の概要（第3学年国語：「思い出を記す『地域のほそ道』（仮称）を書こう」

① 単元の見目標

- ・論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くことができる。
- ・文章に表れているものの見方や考え方の違いを整理し、人間、社会、自然などについて自分の意見をもつことができる。
- ・歴史的な背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむことができる。

② 単元の見学習活動

- ・『おくのほそ道』を読んで捉えた構成や内容、表現の特徴を参考に、思い出を記す俳文『地域のほそ道』（仮称）を書くという単元の学習の見通しを持つ。
- ・『おくのほそ道』の書かれた時代背景や作者、他の作品について知る。

- ・歴史的仮名遣いを確認しながら本文を音読する。
- ・自分の作った俳句及び感じたことや思ったことを書いた文章について交流する。(本時)
- ・「門出」を読み，芭蕉の旅立ちに当たっての思いを捉える。(本時)
- ・「平泉」を読み，構成や内容，表現の特徴を捉える。
- ・『おくのほそ道』を参考に，俳文『地域のほそ道』(仮称)を書く。
- ・書いた俳文を互いに読み合い，構成や内容，表現の仕方などについて感想を交流する。
- ・学習のまとめを行う。

③ 本時の目標

- ・文章に表れているものの見方や考え方の違いを整理し，人間，社会，自然などについて自分の意見を持つことができる。

④ 本時の主な学習活動

- ・自分の作った俳句及び感じたことや思ったことを書いた文章を交流する。
- ・「門出」を読み，芭蕉の旅立ちに当たっての思いを考える。
- ・グループで意見を交流し，交流した内容を学級全体で共有する。
- ・自分と芭蕉の旅に対する思いの違いについて考える。
- ・旅に対する思いをグループで交流する。

(2) 生徒の様子

思い出を記す『地域のほそ道』(仮称)という俳文を書くために，教科書教材である『おくのほそ道』の構成や展開，表現の仕方について評価するという学習活動の見通しを全員が持つことができていた。現代に生きる自分が旅行をするときの気持ちと，芭蕉の旅に対する思いとの違いについて，個人で考えた後にグループで互いの考えを交流することを通して，それぞれの考えを深める姿が見られた。旅立ちに当たっての芭蕉の思いについて交流する場面では，文章中の根拠となる箇所を明示しながら互いの考えを交流していた。



授業の様子①：グループで活発に互いの意見を交流。

(3) 授業者の取組

導入時の自分の作った俳句及び感じたことや思ったことを書いた文章を交流する場面では、ペアで交流するよう指示し、説明を受けた後には必ずコメントを返すことを徹底させていた。文章を読み、芭蕉の旅に対する思いを考える場面では、芭蕉の思いが分かる部分に線を引かせたり、ワークシートに記入させたりするなどの時間を十分に確保していた。「努力を要する」と判断した生徒に対しては、適宜必要な支援を行っていた。芭蕉の旅に対する思いをグループで交流する場面では、全員が必ず発言するように促していた。また、自分の考えを相手に伝える際には、前述の「学び合いの方法」のカードを活用し、相手が納得できるように説明することを求めている。さらに、グループで交流した内容を学級全体で共有する場面では、発表者の発言が終わるまで教師はコメントを交えずに聞いており、発表者が最後まで説明することを求めている。一斉学習の際は、机をコの字型に配置しており、これは互いの発言が相手によく伝わるようにすることを意図した全校での取組の一つである。



授業の様子②：学校図書館での授業。



授業の様子③：必要に応じて関連図書を活用。

(4) 学力・学習状況の改善との関連

文章を読み、芭蕉の旅に対する思いを考える場面で活用したワークシートには、根拠を明確にして書くことを促す内容が示されており、生徒は、注目した箇所を引用しながら自分の考えをまとめていた。このような日常的な取組が、平成 28 年度調査の児童生徒質問紙項目「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」に対する「当てはまる」の回答割合が 50.0%で、全国平均を 26.9 ポイント上回っている要因の一つであるものと考えられる。

また、自分の考えを発表させる際に、最後まで自分の言葉で話し切らせているほか、記述に当たっては、他の人が読んで分かるように書かせたり、他の人の表現で参考になった事柄を赤ペンで記入させたりしていた。このような取組

が、生徒が自分の考えを話したり書いたりして他の人に伝えることへの苦手意識を少なくしているものと考えられ、平成28年度の国語Bの記述式問題の正答率が高かったり、C層及びD層に属する生徒の割合が少なかったりしている要因の一つになっているものと考えられる。さらに、単位時間ごとに「どのような力を付けたいと考えているのか」について、教員が明確に意識し、それに基づいた学習を展開させていることも大きく関係しているものと考えられる。

現学校長は、生徒指導面、学習指導面ともに「授業が分からない」という生徒をなくすることが重要であるとして、平成23年度に着任してから「授業改善」を柱に学校経営を行ってきた。校内研修の際の学習指導案については、研究推進委員会の中で学校長も共に検討を行っており、学校長の日常の授業を基盤とした学校づくりの考えが全校に浸透している。

国語ワークシート⑥ 三年 三組 番 氏名 ()	
つまみ取り 思い出を記す 資料を適切に引用するなどして読者のある文章を書く	芭蕉の旅立ちにあたっての思いを読み取ろう
1 俳句や文章には、旅立ちにあたっての芭蕉のどのような思いが込められているだろう。古文中で芭蕉の気持ちが分かる部分に線を引き、そのときの気持ちを想像して書こう。	「芭蕉の俳句」 元の芭蕉にも、新しい任人が届んできて、私の住んでいた頃の わびしさとは違って家わり、華やかに人形などを飾っている。 葦の戸も住み替はる代々離の家
2 現代の私たちが旅行をするときの気持ちと、芭蕉の旅に対する思いとは、どのように違うかを考えて書こう。	★自分の考え(例)古文中の「と」から、〇〇という気持ちが想像できます。

授業で活用したワークシート：根拠を明確にして書くことを促している。

F 中学校

多様な生徒の実態に応じた計画的な学力向上の取組を行うとともに、総合的な学習の時間の充実によって、生徒の学力や学習活動に好循環をもたらしたと考えられる取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和22年開校）		
校区内小学校	学校選択制		
学級数	7学級	第1学年 2学級（51名）	第2学年 2学級（70名）
生徒数	190名	第3学年 2学級（52名）	特別支援学級 3学級（17名）
教職員数	46名	校長・副校長	各1名
		主幹教諭	1名
		教諭	16名（うち養護教諭1名）
		講師	12名
		事務職員，学校用務員，介助担当，ICT支援員，スクールカウンセラー，ALT等	

【学校の特色】

古くからの家内工業によって発展した地区であり、地域の結びつきが強く、3、4代は現在の地に住んでいる家庭が多い、新制中学校として創設された伝統ある学校であるが、近年の人口減少により、平成20年度前後にかけては全校生徒数が2ケタまで減少。その後、生徒数は増加。学校選択制が導入されている中で、多様な地域から生徒が通学しており、平成28年度の新入生51名の出身小学校は実に16校。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 就学援助を受けている生徒の割合が30%以上の学校の中で、国語A・国語B・数学A・数学Bの平均正答率が高い。特に、H28国語B1三の正答率が90.2%と、全国平均68.4%を大きく上回る。

②その他の注目すべき特徴

- 生徒質問紙において、教科に関する質問項目の結果も比較的高い（例：「数学の授業で、問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」について、「1. 当てはまる」の回答が56.9%（全国平均：35.5%）。「国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりごとに内容を理解しながら読む」について、「1. 当てはまる」の回答が48.1%（全国平均：26.8%）。
- 生徒質問紙において、総合的な学習に関する質問項目の結果も比較的高い（例：「『総合的な学習の時間』では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」について、「1. 当てはまる」の回答が61.5%（全国平均：18.1%）。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
81.7%	76.7%	68.9%	53.1%	64.7%	30～50%
(76.0%)	(67.1%)	(62.8%)	(44.8%)	(60.8%)	

2. 取組の背景

多様な地域から進学する生徒の実態は、学校から同じ区域の中学校には進学を希望しなかった生徒、人間関係にやや苦手を感じている生徒、以前から好成績を上げているバスケットボール部に興味を持って進学する生徒、インクルーシブ教育の研究指定を踏まえて進学する生徒などと多様である。他方、地域の状況を反映してか、保護者からは、学力を特別に高めてほしいという強い思いは感じられない。

平成22年度に着任した現校長の問題意識は、①生徒数が少ないことと②自己肯定感が低いことであった。多様な生徒がその実態に応じて、入学時からどれだけ伸びるか、失敗を恐れずに自分の力を信じてチャレンジし、将来に通用する力を身に付けるためにどのようにすればよいかという視点で取組を進めてきた。

平成26年度より独自の総合的な学習的な時間の充実に取り組むことなどを通じて、逆境に強いしなやかな心（レジリエンス）・自分の力を信じて失敗を恐れずに物事を解決する「突破力」の育成に取り組み、多様な生徒が将来を通じて活躍できることを目指している。

平成28年度は教育委員会より指定を受けた特別支援教育に関する研究を

実施している。校長は本校に着任して7年目である。26年度までで定年退職を迎えた後、28年度、再任用により継続して校長を務めている。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1)「シラバス」の作成：学習意欲の向上と学習習慣の維持，家庭学習の充実，授業改善への追求

平成23年度に、授業に対する取組やポイント、ノートの取り方、定期考査に向けての取組、家庭学習のポイント、先輩たちの勉強方法などをまとめて「シラバス」を作成し、全生徒に配布した。授業の年間計画を生徒に対しても示すとともに、前述のポイントについて、極めて具体的に記述されている。また、卒業生のノートをコピーして例示するなど、生徒が実践しやすいように配慮されている。

本シラバスについては、生徒への配付のみならず、年度初めの保護者会でも紹介して、家庭に協力を求めたことも注目すべきところである。

また、家庭学習の在り方についても改善を図った。以前は、授業やテストと家庭学習とのつながりが図られていなかったが、それらを体系化（「学習のトライアングル」と表現）することで、生徒も、徐々に家庭学習に取り組むようになったという。さらには、1，2年生では家庭学習の課題を与えていたが、3年生では課題を与えずとも自主的に取り組むようになってきた。

(2) 総合的な学習の時間（「〇〇学」※〇〇は学校名の略称）

平成26年度に、教育委員会の研究指定を受け、総合的な学習の時間を「〇〇学」と位置づけ、「6つのスキルの修得と今後の社会で活躍するための7つの能力・態度を育てる」ことを目標として学校独自の協同学習・探求学習に取り組むこととした。その概要は以下のとおりである。

- ・ 全学年の生徒について、興味・関心に基づく希望テーマを踏まえ、1年・2年・3年・特別支援学級から原則1名ずつ、3～4人の「縦割り」チームに構成する。（まずは、教員側が設定した研究領域の希望調査を取ったのち、生徒たちが具体のテーマを決定する）。なお、1年生については、入学前の説明会の時点ですでに「〇〇学」の内容を説明し、イメージを持たせることに努める。
- ・ 1人の教員が3チームを受け持ち、週1時間・通年で研究活動に取り組む。各教員は、担当グループについて研究の到達目標や活動計画等を記載した「ストーリープラン」を作成する。
- ・ 年度途中で、校長の助言・指導を受ける中間報告会を行い、12月～1月にかけて、発表会を行う。

教員は、自分の担当教科にかかわらず担当が割り当てられる。また、「ファ

シリテーター」の役割を求められ、生徒自身の力で課題を解決に導くような指導が求められており、手探りかつ困難度の高い取組である。

校長は、取組み当初担当する研究主任に若手教員を充て、ベテラン教員にバックアップさせる態勢を取り、校内委員会で組織的に推進を図った。また、生徒に対しても、全チームのリーダー（3年生）を集め、研究の進め方などについて指導する会議において、自らが指導するなど、主導的な役割を果たした。

2年間の活動の結果、生徒アンケートから、本研究での修得・育成が目標とされていたスキルや能力・態度を意識して学習するようになったとの成果が見られた。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 校長による計画的な学校経営

前述2のとおり、校長は、着任時の問題意識（①生徒数が少ない②自己肯定が低い）を踏まえ、年度毎に、経営計画の柱を設けて取組を推進してきた。

- ・22年度 グッドマン魂 ※本校の特色を一言で表現 帰属意識と自信
- ・23年度 シラバスの作成 ※家庭学習の充実
- ・24年度 レジリエンスの育成，学習のトライアングル
- ・25年度 インクルーシブ教育システムの構築
- ・26年度 「〇〇学」の誕生
- ・27年度 「〇〇学」の創設
- ・28年度 「〇〇学」の発展，インクルーシブ教育システムの発展

その結果、生徒数については、22年度以降増加傾向で、28年度の生徒数（190人）は、22年度（116人）を大きく上回っている。また、自己肯定感については、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果によれば、「自分にはよいところがありますか」という質問について、肯定的回答の割合は21年度：

55.6%→28年度：84.6%，最も肯定的な回答の割合は、21年度：5.6%→28年度：42.3%と、値が大きく上昇している。



(2) 総合的な学習の時間を“接着剤”としたバランスの取れた学校づくり

平成26年度以降重点的な取組が進められている総合的な学習の時間だが、単に当該時間の充実を図ればよいわけではない。校長としては、各教

科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動・学校生活が偏りなく、バランスの取れている姿を目標とし、職員会議等で繰り返し話をする事により、教員一人一人の意識改革と取組を求めているという。

(3) 生徒の「伸び」に注目させる姿勢

10月の学校だよりにおいて、平成28年度の全国学力・学習状況調査の結果について保護者等への報告がなされた。両面刷りの学校だよりの表面全面を用いての報告である。そこに記載されている文章は、「本校は学年毎（前年度の3年生と今年度の3年生）の比較という視点を持たず、生徒の伸びという視点で考察している」との文言である。もちろん、全国学力・学習状況調査は中学校3年生のみの実施であるため、中学校2年生で実施した都道府県調査との比較を記載している。その際の指標は、都道府県平均との差である。都道府県平均との差が学力のすべてを表すわけではないものの、生徒の伸びに注目させるという姿勢は、肯定的に捉えるべきだと考える。

加えて、校内では、①入学直前の新入生を対象にクラス分けの参考のために実施する「プレテスト」、②設置者の実施する学習状況調査、③上記の都道府県の調査、④全国学力・学習状況調査のデータが学年ごとに整理されていた。これらのデータを比較することで、集団としての「伸び」に注目することができる。

もちろん「伸び」への注目は学力に限ったことではなく、前述の総合的な学習の時間において中間発表・最終発表の機会を設けていること、次に述べる「自己PR校長面接」などにも表れている。

(4) 生徒一人一人に目を向けながら、主体性を引き出す仕掛け

① 自己PR校長面接

校長が着任以来、継続的に取り組んでいるものである。朝の時間・昼休み・放課後の時間を活用して、全生徒を対象に年に1回の面談を行う。事前にA4一枚の「面接カード」を記入させておき、校長室で、カードの内容などについて簡単に話をするもの（「雑談」に近い、とのこと）。

校長室へ緊張して入ってくる生徒の多くは、話が終わると笑顔で帰っていく。一方で、時間に遅れた生徒には厳しく接するなど、生徒の自律性（自立性）の育成にも配慮している。

② 生徒の「困っている」サインへの注目

生徒を見る視点として、

- 学校として「困った子」ではなく「困っている子」として捉え、どのような支援ができるかを考える

- ・「何やっているんだ」ではなく「どうしたの」という声掛けの姿勢
 - ・「ちがい」は「まちがい」ではない
- という考え方を、各教員が共有している。

28年度、教育委員会より指定された「インクルーシブ教育」の研究指定についても、これらの視点からの取組を進めている。

5. その他の特色ある取組

(1) 教育委員会による支援

前述のとおり、26年度～27年度は総合的な学習の時間に関する指定を受け、28年度はインクルーシブ教育の指定を受けて研究を実施してきたが、特に前者については、研究指定期間終了後の28年度も取組を継続し、更なる発展を目指している。26年度の開始年度の1年生が今年度3年生を迎え、生徒の伸びについては、当初からリーダーシップを発揮していた校長のみならず、今年度研究主任を務める3年生の担任教諭も、徐々に手応えを感じてきていた。

6. 授業を参観して

(1) 国語

本時の課題は、「物語の登場人物の立場に立って主張する」であり、前時までの学習をもとに、本文中の記述を根拠として、自分の主張をまとめ、次回の授業で行うスピーチのためのメモを作成する、というものであった。

授業者は、授業開始の挨拶とともに、机を整頓し、開いているバッグの口は閉じるように話をした。学習規律については特に強調しているわけではないが、通常のこととして気を配っているとのことであった。

本時のポイントである、根拠を明確にして自分の主張をまとめることについては、本年度の調査問題のB1三の出題で問うた内容であり、主張と根拠が区別されていないなどのつまずきが見られた点である。授業者は、冒頭に課題を板書した上で、「主張」を「言いたいこと」、「根拠」を「理由」と言い換え、主張だけではなく、根拠を明らかにすることの重要性を解説した。言葉が非常にはっきりしていて、メリハリのある話し方であった。

自分の主張をまとめるワークシートは、主張と根拠を区別して書くように構成されているとともに、授業者からは、①主張は端的にまとめる、根拠は本文などから持ってくる、②まとめてみて、主張と根拠が混在してしまった場合は、矢



印で位置を変えてもよい、という指示があった。内容がまとまった生徒には、改めてスピーチメモに用いるワークシートを配布した。

冒頭の解説後は、ほとんどが生徒個々の活動となり、教師は机間指導を丁寧にやっていた。特に、主張と根拠の境界が曖昧な生徒については、丁寧に問い掛けし、区別ができるよう促していた。授業後に伺ったところ、普段からこのように根拠を明らかにする指導を行っているとのことであり、今回の国語B 1 三の正答率が高かった一因なのではないかと考えられる。



スピーチメモの作成に入った生徒には、授業者から、読み上げ原稿にはしないこと、読み上げ原稿にしてしまうと、下を向いて効果的な発表ができないことについても注意があった。授業後に伺ったところ、3年生はスピーチを比較的得意とする生徒が多く、それが総合的な学習の時間の成果であると捉えていることがわかった(なお、授業者は1年生からの持ち

上がりである3年生の担任、かつ今年度は前述の総合的な学習の時間に係る研究主任)。

授業の多くの時間は個人の活動になったが、冒頭や机間指導の際の授業者と生徒とのやりとりや、生徒どうしのインフォーマルなやりとりからは、コミュニケーションが普段から円滑な学級の雰囲気を感じられた。

(2) 数学

TTの授業である。1名は、教育委員会からの加配教員であり、サブとして個別指導に当たる。

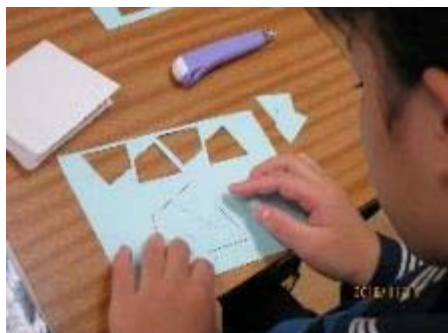
授業開始の挨拶後、教師が色紙を配った。相似比1:2の三角形がかかれており、「大きな三角形に、小さな三角形はいくつ入ると思うか」と授業者が問いかけた。生徒からは、「3つ」、「4つ」、「5つ」といった声上がる(思いのほか、「5つ」が多い)。生徒一人一人が実際に紙を切って確かめ、「4つ入る」という結論に至ることができた。その後、板書で、相似比が1:2である図形の面積比は1:4であることを確認した。



次に、授業者は「では、四角形だったらどうか?」と問いかける。先ほど確認

した知識を踏まえ、「4つ入るはず」との声。相似比が1：2の四角形がかかれた色紙が配布され、生徒たちはどのようにすれば4つ入るかを考えることになった。まずはノーヒントで、授業者はクラス内を回る。

生徒は、三角形の場合と異なり、単純に小さな四角形の向きを変えるだけでは



ぴったり入れることができないことに気が付き「切ってもいいですか」の声。しばらくすると、切れ目の入れ方が分かった生徒が現れ始め、授業者がそれを確認する。その際、生徒によって方法が異なっていること、授業者自身が考えていなかった「面白い」方法で生徒が答えを発見したこと、一つの方法でできた生徒も、もっと他のやり方も考えてほしいことを

伝え、生徒に意欲を持たせていた。

その後、授業者が「三角形に分割する」というヒントを出す。その際、既習知識である三角形の合同を引き合いに出し、どんな多角形も、分割すれば三角形になるから、三角形で考えたことは、四角形、五角形…に使えるはず、との説明をしたところ、気づく生徒が増えた。予定の時間を過ぎた時点で、授業者は「粘りたい人はいるか」と問いかけ、正解（解答例）はここでは明らかにしないこととした。

授業の後半は、相似比、面積比について問題練習を行う時間となった。A3のワークシートが配布され、知識の確認として相似比、面積比について記入した、数問の問題演習がある。授業後に伺ったところ、教科書の問題を授業者なりにピックアップして順序を変えるなどのアレンジをしていた。問題練習中は、2人の授業者が机間指導し、その都度生徒の解答に○をつけ、つまずきのある生徒にはその場でヒントを与える。面積比について初めて学習したと思われる本時では、相似比と面積比との関係がまだ修得できず、問題文に相似比のみが与えられているような問題では、誤って相似比を用いて解答している生徒が多く見られた。本時では問題演習の途中で時間が来てしまい、改めて次回以降でまとめを行うものと思われる。

「相似比が1：2ならば面積比は1：4」という内容は、ともすると、授業外で学習していたり、既存の知識から推測できたりする生徒もいると思われるが、敢えて相似比、面積比という概念よりも、「何枚入るか」というあくまで生徒が自身の手を動かして実感する課題に取り組ませ、さらに、「三角形の次は四角形でどうなるか」と、発展的に考えさせる授業展開は、学習意欲や理解を深めることに重要な役割を果たしており、次回以降の授業において、改めて知識の確認や、つまずきの多かった問題の確認を通じて定着を図ることが期待された。

G中学校

教員同士が授業を見合い、高めあう風土のある授業改善や、生徒の学習の振り返りを重視した取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和35年開校）		
校区内小学校	4校		
学級数	10学級	第1学年 3学級（95名）	第2学年 3学級（91名）
生徒数	288名	第3学年 3学級（97名）	特別支援学級 1学級（5名）
教職員数	34名	校長・教頭	各1名
		教諭	18名（うち養護教諭1名）
		講師	0名
		事務職員	2名
		学校用務員	2名
		英語指導助手，特別支援教育支援員	各1名

【学校の特色】

中核市に設置された学校。旧市街地に位置し、4校の小学校を校区に抱える広い学区を構成している。私立を含めた高校も点在する学園地域である。近くには市民会館や体育館もある。市内でも教育に関心の高い地域・学校で、保護者も学校行事やPTA活動に協力的であるが、近年は、保護者の学校の期待・要望も多様化しており、教育活動や生活指導上の配慮も課題になっている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 全国的に課題が見られた数学A8（証明の必要性和意味を捉える）の正答率：87.6%（全国平均：62.3%）

②その他の注目すべき特徴

- すべての問題における無解答率が低い（国語Bや数学Aはほぼゼロ）。
- 児童生徒質問紙項目「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：51.7%（全国平均：32.2%）
- 児童生徒質問紙項目「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：48.3%（全国平均：28.5%）

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
82.1% (76.0%)	80.6% (67.1%)	70.7% (62.8%)	52.4% (44.8%)	43.8% (60.8%)	20～30%

2. 取組の背景

現校長は平成25年度に着任。前年度まで市の教育部長を務めており、いわゆる学力向上の先進県の取組を研究することもあったが、流行りのみを追うのではなく「凡事徹底」「教員とじっくり話し合うこと」が重要であると認識していた。

25年度の全国調査の結果はすべての教科で全国平均を下回るなど前年度よりも課題が大きくなったが、校長はその理由を生徒指導上の課題とするのではなく、あくまで「凡事徹底」を重視し、教員に対してデータを示しながら、自らも道德の授業を行ったり、各教員の授業を認め、励ましたりなど、リーダーシップを発揮しながら学校全体の授業改善を推進した。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 教科指導の「凡事徹底」：きめ細やかな生徒の学習状況・定着状況の把握

①短いスパンでの生徒の学習状況の把握

生徒の学習状況を把握するためのノート点検を、単元毎や毎週というスパンで行い、教員が授業で取り組んだ問題や宿題も含めて、ノート上に赤ペンを入れ、添削するとともに、細かな学習上のアドバイスや称賛を記載することで授業への意欲に寄与している（前述の質問紙の結果参照）。

また、日常的に基礎基本の定着を図る小テストの実施とともに、単元終了時には教員自作の単元テストを実施し、生徒の理解や定着状況をきめ細かに把握している（漢字書き取りの小テストは毎週。数学の基本事項・基礎的な計算力の補充指導は毎時間の冒頭で行い、授業への参加を促すことと基礎的な学力の向上に寄与。）。理解度が低いとみられる生徒には放課後や朝の補充学習を実施し、習得すべき学習内容の定着に努めている。

②テスト等の詳細な解説と間違えた問題の解き直し、自己分析のレポート提出

定期テスト後に徹底して詳細な解説を行う時間を確保し、生徒の自らのつまずきへの把握を促した上で、再テストの実施や、間違えた問題についての解き直しをさせ、なぜ間違えたかの分析を含めて「レポート」として提出させてい

る。この「レポート」の作成から、生徒の学び直しを促し、学習内容の確実な習得へとつなげている。

(2) 全国調査を含めた「客観的な評価」を授業改善や補充指導等へ活用

全国調査の活用に当たり、校長から各教員に対して以下の意識付けを行い、全校での学力向上の取組の改善を牽引している。

- ・「学力の向上」は、生徒の進路選択の幅を広げるためのもの。
- ・全国調査は、各校が費用を負担することなく、国が全国スタンダードの調査（テスト）をしてくれる絶好の機会であり、積極的に活用してほしい。
- ・全国調査は中3の国語・数学が対象であるが、調査は中1・2の内容であり、各学年の国語・数学の授業で活用できるもの、かつ、他教科にも応用できるもの。

4月の調査の実施直後は、調査の自校採点を校長も加わって行い、校内の学力向上委員会で分析を行う。ゴールデンウィーク明けには教科部会で議論し、間に合うものから年間指導計画に取り入れている。これまでも、例えば、長文の構成を把握し、中心的な内容を捉えて要約する取組を授業や長期休業の課題に取り入れたり、伝わりやすい説明ができるよう、論理的な話し方を考えさせ、発表活動に自信を持たせたり、数学において、根拠を明らかにしながら発表させる等を行ってきた。

また、中1入学時に実施する実力テスト（小学校の内容の復習テスト）の分析を行い、小学校での4教科の学習状況を把握し、特に下位層の生徒については4月から放課後に補充学習を実施する。数学（算数）に関わるものが中心であるが、数学の教員のみならず、担当教科外の教員も一体となって行う。これにより、学習におけるいわゆる中1ギャップの防止を図ることに寄与している。

さらに、都道府県が実施する単元の学習内容の定着を測る調査（年間複数回）を実施し、その結果を分析して、各教科の基礎基本の定着に役立てている。

(3) 家庭学習の支援

『Let's Try 家庭学習の手引き』を発行し、毎月「家庭学習がんばり週間」を設定して、家庭学習の習慣化を図った。加えて、更なる習慣化を図るため、家庭学習ノート等の提出を行い、保護者のコメントや担任からの励ましコメントを必ず添えるなどによって、生徒の学習意欲を高めることを徹底した。

『家庭学習の手引き』は全体が4ページと短いものであるが、

- ①家庭学習の位置付け：家庭学習は宿題ではない。家庭での自主学習
- ②家庭学習を長く続けていくコツ
- ③国語の家庭学習の進め方

④数学の家庭学習の進め方

がコンパクトにまとめられており、比較的取り組みやすいものとなっている。

このことは、児童生徒質問紙調査の結果からも効果が高いことがうかがえる（児童生徒質問紙項目「家で、学校の授業の復習をしていますか」に対する肯定的な回答の割合が61.8%（全国平均50.0%））。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

（1）「一人一授業」：授業公開の日常化—授業を見合い、高め合う風土の醸成

校長のリーダーシップの下、「一人一授業公開」として教員同士でお互いの授業を参観し合う取組を行っている。その際、校長は、全ての教員の授業に対して、A4用紙で1枚程度の短信を配付し、学習指導要領解説を踏まえながら実践を励ますコメントを記載して授業改善を促している。また、校長自身が道徳の授業を行うなど、全校で授業改善を進める雰囲気醸成している。

（2）各教員を後押し、自らも積極的な役割を果たす校長のリーダーシップ 明確な理念の提示

平成28年度の年度初めの職員会議において、学校経営について校長が職員に伝える中で、学力向上に向けた基本的な考え方（校長としての理念）と具体的な取組を別様の資料にまとめて配布した。以下には、「基本的な考え方」の記述を要約して示す。

- ・ 各教員の積み上げてきた実践への自信と誇り、新たな視点での見直し、生徒のための授業改善・新たな実践。
- ・ 全国スタンダードで分析できる全国調査を全教科の学びの見直し資料として活用。
- ・ 厳しい言葉だが、「学び続ける教師のみ、生徒に教える資格がある」を合言葉に。授業を公開し、助言をもらい授業の質を上げることこそ学力向上の最大の近道。
- ・ 学力向上のみへの特化ではなく、あくまで知・徳・体のバランス。
- ・ 「0点に悲しむ生徒を出さず、1点の向上に喜ぶ指導を。」生徒を見捨てない。わかる喜びのためにがんばる。

これらの記述には、教員の持てる力を最大限発揮しながら、客観的なデータも踏まえつつ、一人ひとりの児童生徒のため、指導の改善に学校が組織的に一丸となって取り組む決意が示されている。

5. 授業を参観して

(1) 授業の概要（第3学年数学：円の性質 1時間）

円周角と中心角の関係についての発展問題。コンピューターソフトを使い、円周上の点をいろいろと動かして問題を提示。円に内接する四角形のもつ性質や接弦定理について理解することをねらいとして展開している。

(2) 生徒の様子

教師は、常に前向きな声かけをしており、のびのびとした雰囲気の中で授業が進められた。問題を自身で解きながらも、分からないことや疑問に思ったことなどを自然と周りの友達と共有して話し合える状況であった。よく分かる発表を聞いた際には、「おっ、すごい！」と声が漏れるくらいに問題場面に取り入っていた。

(3) 授業者の取組

生徒一人一人の状況を見ながら、個別指導においては、生徒のできている部分を積極的に褒めるなど肯定的な評価を伝えるようにしている。また、既に正答を出している生徒についても、その理由を聞くなど、クラス全員に目を向けているように感じられた。また、ワークシートについては、「考えを書いてみよう」という枠を大きく取っており、問題が単に解けるだけでなく、考えた過程を記述するように仕向けている。

(4) 学力向上との関連

単に与えられた問題を解くだけでなく、コンピューターソフトを使い、ある条件を維持した中で図を動かし、それを基にして生徒に考えさせている。例えば、円に内接する四角形の向かい合う角の和が 180 度であることを、円周上の四角形の頂点を画面上でいろいろに動かしながら演示し、成り立ちそうな性質を見いだすことができるようにし、それについて説明を求めている。平成28年度全国学力・学習状況調査数学A8は、「証明するためにかかれた図は、すべての代表として示されている図であることを理解すること」について課題があることを受けて出題されたものであるが、本授業のように、様々な図で成り立つ状況を演示し、説明を考えさせることで、「証明するためにかかれた図は、すべての代表として示されている図であることを」について生徒の理解が深まっていくものと考えられる。

H中学校

すべての教員が結果責任としての生徒の成長を支えつつ、数学科を中心とした課題発見・解決学習の追求を通じて、数学的に説明しきる力を向上させたと考えられる取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和63年開校：分離新設）		
校区内小学校	2校		
学級数	7学級	第1学年 2学級（65名）	第2学年 2学級（76名）
生徒数	208名	第3学年 2学級（65名）	特別支援学級 1学級（2名）
教職員数	34名	校長・教頭	各1名
		教諭	16名（うち養護教諭1名）
		講師	数学、英語、美術、保健体育、技術各1名
		司書	1名
		事務職員、学校用務員、ICT支援員、スクールカウンセラー、ALT等	

【学校の特徴】

都道府県庁所在地である大都市に隣接し、古くから交通の要衝として栄えた地域に位置する町に2校設置された中学校のうちの1つ。小学校や公立高校が隣接することによる連携した取組が行われているほか、比較的コンパクトな学区であることで教育委員会も訪問しやすい環境にある。学校と地域とのつながりも深く、地域の行事に生徒による企画を実施したり、学校が行う地域清掃活動に地域住民が参加したりするなど、協力的な関係が構築されている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 全国的に課題が見られた数学B5（1）（資料の傾向を的確に捉えて判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明する）の正答率：72.6%（全国平均：48.1%）
- 児童生徒質問紙項目「数学の授業がよくわかる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：68.3%（全国平均：31.9%）

②その他の注目すべき特徴

- すべての教科を通じて、ほぼ全ての問題で無解答率0%。
(数学Bの記述式問題の無解答率は0.5%(全国平均:19.6%))
- 全ての教科でC層, D層の割合が減少。
- 数学に関する以下の質問紙項目について「1.当てはまる」の回答割合が全国平均を大きく上回る。
 - ・数学の授業で問題を解くとき, もっと簡単に解く方法がないか考える
:58.7%(全国平均:35.6%)
 - ・数学の授業で公式やきまりを習うとき, その根拠を理解するようにしている
:54.0%(全国平均:32.4%)

【参考:基本データ】※()内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
82.6%	76.5%	77.0%	62.6%	55.6%	20~30%
(76.0%)	(67.1%)	(62.8%)	(44.8%)	(60.8%)	

2. 取組の背景

平成24年度まで, 町全体として学力や学習状況について課題が見られた。平成25年度から町全体として教育改革を進める中で, 町全体では改善傾向が見られた一方, 本校は課題が継続し, 校内では無気力な生徒が多いなどの状況も見られた。

平成26年度から, 教務主任と生徒指導主事が中心となって, 学習指導と生徒指導の両面からの一体的な改善に着手した。

平成27年度には, 前年度まで校区内にある小学校の校長であった現校長が着任。生徒・保護者・地域の状況を熟知している校長は, 前年度からの取組を踏まえつつ, 本校だからこそ/自分だからこそできること, という視点で学校づくりを進めた。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 数学の授業改善への追求

①経過

- 平成26年度
 - ：教務主任に着任した数学教諭を中心として取組に着手した。平成25年度までの状況を知る教務主任自身が意識を変え, ①興味・関心を高める課題設定, ②ノートに目標・まとめを書くことの徹底, ③グルー

プを使っての課題解決, ④習熟度に応じた課題設定, ⑤毎時間記入する自己評価カードの作成等に取り組んだ。うまくいったものは継続し、いかなかったものはやめるといった試行錯誤の連続だった。

○ 平成27年度

: 県の教育に関するアクションプランが開始とともに, 数学の研究大会の担当校となり, 授業提案に向けて研究を進めた。関数領域の授業提案において, 「地震波の到達予想」「世界の人口は2050年に何人になるか」といった, 日常生活と結びつき, かつ未知の課題を取り上げ, 「課題の発見→情報の収集→整理・分析→まとめ・創造・表現→実行→振り返り(数学の有用性の発見)→またほかの課題を発見…」という授業展開を提案した(この授業展開を, 教員間では「ぐるぐる」と呼び, 授業で「ぐるぐる」が起こっているかという視点を常に意識している)。

○ 平成28年度

: 前年度に引き続き, 「生活の中にある数学」を授業に取り入れる。「パスタメジャーで2倍の量のパスタを量るためにはどうするか」「ダイヤグラムを用いて, 特急電車が地元の駅を何時に通過するか」

②数学科教員のチームワークと継続的な授業改善の追求

○ 教務主任と研究主任を含めた4名の数学科教員(うち1名は平成28年度に着任した講師)は, 他教科を先導する形で積極的に取組を進めている。

特に大切にしていることは,

- ・生徒に「数学が役に立つ」「こんなところに数学がある」と言わせたい(数学のよさを伝える)
- ・生徒に「わからない」と言わせたい(わからないから勉強する)
- ・無解答ゼロ(問題の中から何かヒントを見つけて, 考えて書こうと言い続けている)
- ・よいものはよいと評価(とにかく評価し, また掲示する)

とのことであり, 日頃も, ふと4人が職員室内で集まりミーティングが始まって, 授業や生徒の様子等について意見交換が行われている。

○ 生徒の指導を, 担当する学年や学級にとらわれず, 数学科全員で行おうという意識が強い。授業形態は, TTや少人数指導等を単元の指導内容に合わせて意図的に使い分けるとともに, 担当する学級の授業がない時間でも, 担当していない学級の授業に参加し, 生徒への支援を積極的に行っている。

- 個別の取組として、単元ごとの「まとめカード」の作成（高校受験の際、それを見れば振り返りが可能）、統計グラフコンクールへの応募、これらの学習室や文化祭での掲示（生徒の意欲喚起のため）等を行っている。



「まとめカード」：生徒自身による間違いやすいポイントの記載がある



統計グラフコンクールへの応募作品：すべての応募作品を壁一面に掲示している

(2) 習熟度別学力定着週間

毎学期設けられる、個別・補充学習指導の機会である。一つの学年に集中して、講師、副担任そして管理職も含めた全教員（教科には関係なく）に担当生徒を割り振り、HR 学習（教える）・家庭学習（分かる）・朝学（確かめる）・補充学習のサイクルで、わからないところを積み残さないために集中的に指導する。割り振りは教科担任からの案を基に教務部が行い、特に指導の必要な生徒は管理職が担当し、丁寧に対応する。「わかったふりをさせない」ことがポイントであり、「ここまではわかるけど、ここがわからない」と生徒自身で説明させる。また、同じ教員が集中的・継続的に、スモールステップを見せながら、できたことは評価して成功体験を積みさせることで、生徒の学習意欲や主体性が向上し、「授業で手を上げることができた」「教室で認められた」などの結果につながる。家庭学習などに関する保護者の協力も得ることができ、好循環を生み出している。

「学び方を身に付けよう週間」「宿題をやりきろう週間」など、毎回テーマが設定されている。

(3) ○○（学校名）中検定

国語・数学・英語について校内検定を実施。第1回～3回の検定は全生徒が受検し、追加検定は任意受検であるが、合格証を目指して、ほとんどの生徒が受検。内容は基礎的で「絶対に受かってほしい問題」を教員が自作し、B4で1枚、20分程度、6割以上で合格としている。通知表へも記入する。生徒への「やればできる！」という声掛けの材料にもなり、生徒の意欲の向上が図られている。

(4) 家庭学習ノート

1日1ページ、何をやってもよいという自主学習の取組。毎週、5日分＝5ページを提出させ、教員が具体的なメッセージを付して次週返却する。学級担任のみならず、時には部活動の顧問や管理職もノートを見て、コメントを付す。また、良いノートを校内に掲示し、本人の意欲を喚起するとともに、他の生徒が参考にできるようにする。その際、ただ掲示するのではなく、教員の「何が／どのようによかったのか」というメッセージを必ず付している。



家庭学習ノート：問題を解く際のポイント等を自分なりにまとめている。



家庭学習ノートの掲示：教員のコメントが付されている。

(5) HR学習、ジョイスタ (joyful of study)

1日の授業後、20分の学習定着のための「HR学習」と呼ばれる時間を設け、さらに週に1回は＋20分（校内清掃を割愛）の40分の拡大HR学習＝「ジョイスタ」と呼ばれる時間を設けている。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1)「H中だからこそ」：校長による明確な問題意識の発信と強みを生かす学校経営

現校長は、校区内の小学校の校長を2年間務め、児童生徒・保護者・地域のことを熟知し、小中の系統性を実感を伴って意識している。前年度までの本校の状況も、小学校の校長の立場から熟知している。これらの経験を基に、改善のための明確な問題意識の発信と学校の置かれた状況＝強みを生かす重要性の双方を「H中だからこそ」（できる／すべき）という言葉で象徴し、具体的な取組の基盤として、強く校内に浸透させている。

【明確な問題意識と改善のための発想の転換（再認識）】

①説明責任から結果責任へ

①生徒の学びの姿（学力保障）②生徒の育ちの姿（成長保障）を追求することによって、信頼され誇れる学校を目指してきた。「結果に責任を持つ」という姿勢を前面に出すことは、時に困難が伴うとも予想され、校長

自身の強い思いがなければできないものと考えられる。

②「上げ底」ではなく「底上げ」

学校の（生徒の）良いところをみせるのではなく、すべての生徒に光を当て、すべての生徒に自信を持たせることを追求してきた。前述3及び次項（2）等の至るところにこの思想が生かされているものと感じられる。

③最低限の行動統一と最大限のチャレンジ精神

一般論として、学力向上を含めた学校における種々の取組は、学校全体が一体となって推進できるかどうか鍵になるが、現実には困難も伴う。この点について本校校長は、教職員全員が納得することはそもそも難しい、という意識から、「意識統一」ではなく、最低限の「行動統一」を教職員に求めてきた。同時に、新たなことに最大限チャレンジし、教職員自身の「主体的・対話的で深い学び」の実現を求めた。この点については、（3）で詳述する。

④小中連携の意味を意識：中一ギャップを乗り越える力を育てる

小学校を経験した現校長にとっては、小中連携は、いわゆる中一ギャップの解消のためではなく、ギャップは解消できない、むしろ乗り越えるための力を育てるための連続した取組と捉え、乗り越えるための力として、粘り強く自力解決に取り組む力・自分の考えを論理立てて説明する力を位置づけている。

【学校の置かれた強みを生かす】

①スケールメリット

本校の生徒数は1学年が60～70、全校で約200と、大規模校でないこともあり、教員は生徒全員の顔と名前が一致している。これをスケールメリットと捉え、先述のとおり、すべての生徒に対する個別・補充学習指導を、校長を含めた教員全体で行うことや、授業での複数指導（担当教科外の教員が入ることも含め）の実現等につなげている。オーダーメイドの様々な学習プログラムを生徒の努力への評価とセットで実現することで、生徒の心に響くものとなっている。

②立地条件

本校は、小学校及び県立高校が近接している。後述するあいさつ運動及びクリーンキャンペーンについて、校区内の小学校2校と合同で実施（年1回は町内全小中学校（小4・中2）及び高校も参加）するほか、高校生による出前授業や高校の行事参加などの機会を設け、進路への意識を持たせている。

③地域力

「学校外の人と付き合い、地域の方から学ぶ」機会を多く設けることで、

生徒に、自分も大人だという意識を持たせている。また、生徒会活動の活性化を図り、地域行事への参画（子ども議会、町政周年行事）や、地域の支援を得た「ひまわりをいっぱい咲かせようプロジェクト」など生徒たちの企画の実現を図っている。

（２）「学びと育ちの姿の見える化」： 生徒の成長で語るという意識

①校内研修等での視点

毎学期、教員が５グループ（１グループ３～４人）に分かれて、２週間の間でお互いの授業を見合う。その際の視点は、①すべての生徒が学んでいるか②学びが深まっているか（「やればできる」「やってみたい」）の２点であり、教員同士が「点検」するのではなく、生徒に注目する、ということを徹底している。「この生徒は（もともと）こうである」といった決めつけ＝言い訳を認めないという姿勢も課している。「生徒がこうだった」という会話が研修を通して行われることで、職員室の普通の会話も、授業を中心、かつ、生徒が主語になっている。

②生徒の取組を評価し、評価したものを掲示

教員は、授業を含めた学校生活の中での生徒一人一人の伸びや頑張りどころを見た上で、的を射たほめ言葉と表情で生徒に返す、という意識が徹底されている。それは校内の様々な「掲示物」に象徴的に表れている。前述２．（４）の家庭学習ノートや調べ学習の発表、行事の感想、ボランティア活動の報告、各種コンクール等の作品など、実に様々な掲示物がある。重要なのは、教員が「何が／どのようによいのか」という評価を折に触れて記載している点である。他の生徒の気づき書き込まれることもある。作成した生徒自身はもとより、他の生徒にとっても改善の意欲向上につながる、質の高い教育環境の実現が図られている。



学校行事、地域行事の記録：生徒や教員の一言が記載されている。



一般紙への生徒の投稿記事を紹介：生徒、教職員、来校者が必ず通るところに掲示している。

③校長と生徒とのランチミーティング

毎日、学級の班、部活、委員会等の様々な単位で、校長と生徒が校長室で昼食をとりながら、ざっくばらんに会話する。校長自身が生徒の生の声を聴き、実態を把握しつつ、関係教員に情報共有する。教員の取組の成果に関することは積極的に職員室で共有し、本人のみならず他の教員を含めた意欲喚起につなげている。

(3)「最低限の行動統一と最大限のチャレンジ精神」：全職員がやるという意識

①全校学活、保護者会、学校だより

全生徒、全教員が一堂に会する「全校学活」の場で、全国調査や県の調査の結果を見せる。正答率を生徒の学力の「結果」として受け止めながら、例えば、「分からないことは、分かるまで努力する」に肯定的に回答している生徒ほど、教科に関する結果がよいことを示し、「分かりなさいとは言わないから、分かるところまで書いてみよう。何かが生まれてくるはずだ」などと声掛けをし、併せて「先生たちも頑張る」という姿勢を宣言する。保護者会でも同様の機会を設けている。

生徒や保護者の前で約束することは、全教員で取り組む意識を醸成することにもつながっている。「結果が出るまではやりきる」ことを教員に求めている。

また、学校だよりで家庭や地域へ結果を示す際、学校側の取組や生徒の頑張りを伝え、家庭学習の取組への協力を求めるなど、一体となった取組を進めている。

②数学科教員の試行錯誤と他教科への波及

教務主任と研究主任が所属する数学科に対して、校長は、とにかく「外のものを見る」「よいと言われている（思った）ことはやってみる」ことを求め、全国各地での研修に参加した成果を研究発表で校内で共有している。また、夏休み期間は、全教員が課題発見学習に関する単元研究を行い、校内で発表する。数学科の取組が成果を上げる中、英語科も平成28年度取組に着手し、県の調査が向上した。各教科で「次は自分たちが」という思いが芽生えつつある。

5. その他の特色ある取組

(1) 学校図書館との連携

非常勤の図書館司書が各教科の教員と積極的に連携し、授業に関連する本や郷土の偉人に関する本、教員の薦める本を、コメントを付して配置している。また図書委員の主体的な活動を促し、ビブリオバトル等なども開催しながら、

校内の読書活動を進めている。司書が中心的な役割を果たし、毎月の図書だよりの発行、図書室の利用案内（読んだ本のチェックもできる）の作成等を行っている。

6. 授業を参観して

(1) 授業の概要（第3学年数学：円の性質 アドバンス/パースペクティブ各1時間）

円周角の定理を利用して問題解決を行う授業である。少人数指導を行っており、生徒が自ら選択したコースに分かれて学習を進めている。前時に学んだ円周角の定理を利用し、様々な問題に挑戦する問題練習の時間であった。

通常、問題練習の時間を設定した場合には教員が問題を配付し、個別指導をしながら最後に解答を合わせるとというのが考えられるが、本校は、意図的に生徒の交流や発表する場面を設定し、授業を行っている。特に本時は具体の評価規準で考えると「技能」であり、解答が正答か誤答かというところにのみ視点が向けられるものだが、生徒が表現する場を大切にして、授業に参加する生徒皆が理解することができるような授業であった。

2つのコースで使用する学習シートには内容的な差は無いが、問題数が異なる。評価規準を一致させることを優先しているため、実質的に2つのコースの差はなく、生徒の実態に合わせた支援が行われている。

いずれの授業も、教員2名によるチームティーチングであったが、メインの授業者が設定されているものの、サブの教員も、時には黒板の前で説明するなど、臨機応変な指導が展開されていた。

(2) 生徒の様子

生徒は落ち着いており、授業の始まりには道具をそろえて先生を待ち、皆が授業での問題解決に集中できている。グループで解法を教え合う場面や、生徒が黒板の前で問題の解法を発表する場面でも積極的に交流し、わからないことはわからないと言い、既習の学習内容に問題を照らし合わせながら、粘り強く考えることができる生徒の集団である。教室全体に「間違えても大丈夫」という雰囲気がある。また、教員の発問や活動の促しに対して応えようとする意欲があり、目の前の先生を信用し安心して授業に参加している。

(3) 授業者の取組

授業者は、他者に説明することを大切にしており、生徒が周りの生徒に相手意識を持たせて説明させることを重視している。その際に、次の2つのことについて意図し生徒の発表の機会を設けている。

①既習の学習内容の活用

既習の学習内容を想起させながら問題を解決することは一般的な授業で見られるが、本時の授業では、すでに学習した円周角の定理を黒板に貼ることで、今取り組んでいる問題にどのように適用することができるかを生徒が自発的に考えていた。円周角や中心角、弧について問題の図形を観察し、それらを見つけた生徒は自発的に図の中に線を引いたり、指でなぞったりしながら、既習の学習内容が使えないかどうか考えていた。そのような姿をみた授業者は、生徒の考えを個別に表現させながら、自分の考えを整理することを促していた。

②何を説明させたいのかを吟味すること

授業の中で、説明することについて促す発問があることはもちろんのこと、その発問にも授業者の意図やねらいが感じられた。例えば、生徒に数学的な事柄について表現することを促し、実際に前に出て発表させる場面があった。円周角の定理を使って問題の図を解釈し、「円周角は中心角の大きさの半分である」と説明した生徒に対して、円周角の定理を使うことを補足した説明を促した。「 $\bigcirc\bigcirc$ のとき、 $\triangle\triangle$ である」といったような話形として指導するのではなく、生徒の不十分なところに生徒自身で気がつくように問い返して気づかせることは、生徒の表現力を高めるのに大変効果的である。

授業者が意図とねらいをもって、生徒に表現させることを取り組ませていた。手を上げていない生徒へも発言させ、「分からない」で終わらせず、分かるところまで説明させる。また、生徒の解答が間違っていたり、冗長な解法を取っているとしても、止めずに、行きつくところまで説明させ、自身が気づいたり、周りの生徒がフォローできるよう導いている。

生徒と授業者、生徒と生徒の間で表現し合うことは、互いの考えを交流するのみならず、表現している自分自身と向き合い、理解を深めていくことにつながっていると考えられる。また、日常からあきらめずに問題解決に向かうとともに、自分を外に表現することが、全国学力・学習状況調査における無解答率の低さにも表れていると考えられる。



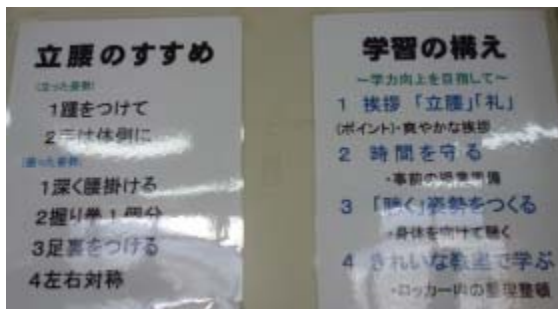
左：アドバンスコースの授業、右：ベータコースの授業 授業のスタイルはほとんど変わらない。



アドバンスの授業：「サブ」の教員がふと前に出て説明。



たどり着いた答えが違うことで、真剣に問題の解法を議論する生徒たち。
 (※敢えて答えが分かれることが推測される問題を取り上げている。)



立腰のすすめ

- ① 踵をつけて
 ② 三ヶ体側に
 ① 深く腰掛ける
 ② 握り拳 1 握分
 ③ 足裏をつける
 ④ 左右対称

学習の構え

- ～学力向上を目指して～
 1 挨拶「立腰」「礼」
 (ポイント) 真やかな挨拶
 2 時間を守る
 ・事前の授業準備
 3 「静く」姿勢をつくる
 ・身体を閉じて聞く
 4 きれいな教室で学ぶ
 ・ロッカー内の整理整頓

学習規律についても徹底されている。
 特徴的だったのは、「立腰」というもの。
 授業の冒頭・終わりの挨拶でも「立腰」と
 全員で声を合わせ、姿勢を正した上で、礼
 をする。

Ⅰ 中学校

互いを認め合う人間関係作りをねらい、授業を「楽しく」進めることで、国語の授業がよく分かる生徒の割合を向上させた取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和22年開校）		
校区内小学校	1校		
学級数	5学級	第1学年 1学級（24名）	第2学年 1学級（39名）
生徒数	107名	第3学年 2学級（42名）	特別支援学級 1学級（2名）
教職員数	21名	校長・教頭	各1名
		教諭	10名（うち養護教諭1名）
		講師	国語、英語、美術 各1名
		司書	なし
		事務職員、学校用務員、スクールカウンセラー、ALT等	

【学校の特徴】

創立70年を迎える本校は、市街地が一望できる小高い丘の上に学校があり、地域のシンボリックな役割を果たしている。かつては「1村1幼1小1中」だったことから、地域と学校との関わりは強い。

全校生徒数は5学級107名、教職員数は21名という小規模校である。生徒数が増えた時もあったが、1年生は24名の単学級であり生徒数は減少傾向にある。本校のあるA市では「夢育」をキーワードとして取り組んでいる。「夢育」とは、将来に向けて子供たちが生きる力を身に付けて自分の夢を実現するという理念のことで、本校ではそれを踏まえて学校目標を「志を高くもち 将来の夢に向かって 一生懸命頑張る生徒の育成」としている。心の教育を基盤とし、特に徳育に重点を置き指導・支援を行っている。

また、こういう子供になってほしいという行動指針「時を守り 場を淨め 誠を尽くす」を制定し、学習の中や各教科領域で取り組んでいる。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

①学校選定の際に用いた特徴

- 児童生徒質問紙項目「国語の授業がよくわかる」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：67.5%（全国平均：26.4%）
- 児童生徒質問紙項目「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がわかるように気を付けて書いている」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：40.0%（全国平均：23.1%）

②その他の注目すべき特徴

- すべての教科を通じて、全国平均正答率を上回っている。
- 特に、国語BのC層、D層を合わせて25%未満である。

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
83.9%	75.3%	66.3%	50.7%	52.5%	5%未満
(76.0%)	(67.1%)	(62.8%)	(44.8%)	(60.8%)	

2. 取組の背景

前述のとおり、幼稚園から中学校までほとんど一緒に生活してきた生徒たちであるので、一緒にいる安心感がゆったりとした人間関係を築いている。全体的にアットホームな雰囲気の中、明るく素直な生徒が多い。しかし一方で、自分の夢や将来に対する期待感が小さく、夢の実現に向けて努力していこうという態度があまり見られないということが課題であった。学習においては、県独自の学力テストや全国学力・学習状況調査の結果は、全国平均、県平均のいずれも上回っている。しかしながら、教師から与えられた課題にはよく取り組むが、自ら課題を見付けたり、発展的な学習に取り組んだり、授業中に進んで自分の意見や考えを述べたりする生徒は少なく、学習に対する主体的な態度があまり見られないことが課題であった。以上のようなことを課題に持ちながら学校づくりに取り組んでいる。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 三つの視点による授業モデルの確立

本校はA市から「活力ある学校づくり推進事業」「学力向上推進事業」という研究指定を平成27・28年度の2年間受けている。研究主題を「基礎・基本の定着と自ら学ぶ生徒の育成」として研究を進めている。

研究の中で、本校は、「〇〇(学校名)中学校授業モデル」として以下の三つの視点を生かした授業作りに取り組んだ。

①課題の工夫

生徒が学びたい、学ぶ必要性を感じることができるよう課題の設定を行う。学びたいと感じることができるよう課題の設定や提示方法を工夫することで、生徒が主体的に学習に取り組もうとする意欲を育てることをねらいとしている。

課題の工夫とは、課題そのものの工夫と課題提示の工夫の両方を含めて

いる。生徒が学びたい、学ぶ必要性を感じるような課題の設定、どの教科でも必ず生徒から疑問が生まれるような課題の工夫を追究している。

②他者とのかかわり

授業の中で、他者とかかわりながら協働で学習する場を設ける。アクティブ・ラーニングの視点に立った、問題解決的な学習やペア・グループ活動等における対話的・協働的な学びの場面を設定することを通して、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることをねらいとしている。

③まとめ（終末の工夫）

学習したこと、身に付いたことを振り返りまとめる。単元末評価やまとめの表現活動等を活用して本時の振り返りを行うことで、基礎・基本の定着状況を確認したり、思考力・判断力・表現力の高まりの様子を確認したりすることをねらいとしている。まとめについては、毎時間振り返るものと単元ごとに振り返るものとを状況によって使い分けている。教師は、生徒のまとめを確認することによって、生徒の学習状況等を分析し次に生かしている。

（2）「夢育」の実現を目指すポートフォリオ「夢の羅針盤」の作成

子供たちに将来どんなことに向かって頑張っていきたいか、そのために何を今するべきなのかを考えさせ、学期ごとに見直すものが「夢の羅針盤」である。自分で目標を書き、保護者がそれに対してコメントを書き、学期ごとに見直して、自分は今頑張れているかを見直し、次の学期につなげるという仕組みである。「夢の羅針盤」をキャリア教育の中心に位置付けることで、中学校の3年間で一人一人の生徒が自分の夢を持ち、その夢を意識しながら生活できるように支援し、「夢育」の実現を目指していく。

子供たちなりの将来への展望を持たせることで、学習への意欲付けにもつながり、学力の向上にもつながる道筋ができる。

（3）授業と家庭学習、生徒と教師をつなぐ生活ノート

本校で様式を検討したオリジナル生活ノートは、毎日のショートホームルームの中に設けた授業を振り返る時間の中で、今日の家庭学習はどのように取り組んでいこうか、自分はどんなことを学んでいこうかということなどを考えて書き込んでいくものである。

これによって、授業と家庭学習をつなぎ、更に一日の中であったことについて子供たちがコメントを書く欄もあるのでそこに様々なことを書き、それに対して担任が毎日コメントを返している。書いてある内容を基に子供たちに話し掛けたり、話すのが得意でない生徒に対しては、コメントの文字

の量を増やしたりして、教師と生徒の人間関係を深める役割を果たしている。また、家庭との連携を深める一助になっている。生徒が安心して学習に取り組める環境を作ることが学力の向上につながっていると言えるのではないだろうか。

4. 学力の向上や学習状況の改善を支える学校づくり

(1) 全校で統一された教室環境の整備

教室内の掲示物は、年度初めの職員会議で話し合い決定する。その際に、ユニバーサルデザインの視点を取り入れている。全教室が同じ配置で掲示をしていて、特に教室前面は情報が整理されてすっきりとしており、学習に取り組みやすい状況を作り出している。

また、教室内に「ミニ図書カン」を設置し、持ち運び可能な収容容器に各学級の図書委員が学級に配置する本を入れ設置している。朝読書や休み時間等に活用しており、生徒は学級内ですぐに本を手にとって読むことができる。さらに、「読書通帳」



ミニ図書カン

に、読んだ本のタイトルと著者名を記録している。ちなみに、県で1年間に30冊読むと表彰をする制度がある。

教室や廊下の掲示物を見るとただ整然としているだけでなく、生徒が作成したものには教師のコメントや励ましが随所に入っており、全体に温かい雰囲気にも包まれているのも特徴的である。

(2) 「楽しく」学習を進める

今回は主に国語についての調査で本校を訪問した。国語の担当B教諭（本校勤務2年目）によれば、それまでの全国学力・学習状況調査の結果の中で、特に「国語の学習が好きか」との設問に対し否定的な答えが思いの外多いことに驚き、危機感を持ったようで、1年生から3年生まで国語の授業を一人で受け持つことになったことを機に、その理由を分析し「楽しく」学習を進めることにしたという。

生徒に国語が好きではない理由を聞いてみると、「書くことが嫌い」という回答が多かった。そこでB教諭は、意欲を高めて生徒の自主性に任せるという考えの下、ノートをなくし、ワークシートをファイリングしていきやり方で学習を進めていくことにした。

B教諭が考える「楽しく」とは、「自分が意見を持てること、自分の意見

を否定されないこと、認める・認められることを大切にすること」ということであり、ほとんどの場面で生徒たちに唯一解としての答えを求めていない。国語の授業では、教師が学習のねらいを考え構成されたワークシートにより、学習の視点を絞りながら、生徒が自分の考えを書き込んでいくという形をとることにより、板書を写すだけということではなくなった。また、書くことが苦手な生徒にも考えの手順を丁寧に示したり、T2が生徒について指導したりすることで生徒の書くことへの苦手意識も軽減させることができた。ワークシートは、1年時からファイルに積み重ねていて、事あるごとに振り返ることができるようにしている。

このような授業づくりの工夫を積み重ねることによって、前述のとおり、全国学力・学習状況調査質問紙（平成28年度）の「国語の授業内容がよく分かる」と答えた生徒が67.5%に上った。この結果は、これらの取組の継続によって確かな成果が表れてきていると考えられる。

（3）教育委員会の支援と校内連携

平成27・28年度に市の「活力ある学校づくり推進事業」及び「学力向上推進事業」の研究指定を受け、研究主題を「基礎・基本の確かな定着と自ら学ぶ生徒の育成」と定め、日々の授業実践を核として研究を進めている。また、心の教育を基盤とし、特に徳育に重点を置き、幼小中連携等でもそこに重点を置き子供たちを育てている。

教師も校内研究等で研鑽を積み重ね、教師も生徒も「学ぶことの楽しさ」を共有できるようになってくることで、「学校が楽しい」、「先生や友達と一緒に勉強できてうれしい」という声が聞こえてくる活気あふれる学校を作り上げることができてきたという。

5. その他の特色ある取組

（1）学力・学習状況の改善との関連

これまで述べてきたように、様々な工夫の下に授業を「楽しく」行ってきたことが、「国語の授業がよく分かる」ことにつながり、学力・学習状況の改善にもつながっていると考えられるが、そのほかにも以下のようなことが考えられる。

①単元構想表の作成・活用・修正

全ての単元について、「単元構想表」を作成している。単元の流れをあらかじめ考え実行している。ただし、これは適宜修正が必要であるし、生徒の様子を見て年度によっても修正している。生徒の実態に合わせて学習の内

容を考えていくことで、学力の向上にもつながっていると考えられる。

単元構想表		単元名 『故郷』の効果を探ろう		【第3学年】	
教材(単元)名		『故郷』 鲁迅 作			読む「文学 二」
全6時間扱い	学習活動	学習活動	重点化	指導事項	授業作りのポイント
1	●目標とする単元を貫く学習活動を確立する。 ●全文を読んであらすじを確認するとともに、漢字や標句を確認する。			□学習の最終段階で、作品を読んだ人にとってどのような影響を与えるかについての批評文を書くことを確立する。 □作品の背景となる時代や中国社会、登場人物の特徴や関係、場面展開に即してあらすじを確認する。	次からの学習に関心・意欲をもって取り組もうとしている。 【「授業者が」教える】こと
2	●1場面を読んで、「私」が感じた故郷の様子や「私」の心境から、これからの展開を予測する。 ●チャーターと鶴ねあについて地の文から想像力を働かせて書く。	『故郷』の効果を探ろう		□挿入語句に着目し、それらが主人公の心情とつながっていることに気づかせる。また、主人公の強理由について押さえる。 □これまでの既習学習を生かして、文章からどんなことが分かるかを想像力を働かせて書くように指導する。	①登場人物のものの見方や考え方、心情などは、文章中に暗示を求めながら考えること。 ②小説である以上、主人公一人者ではないこと。 ③社会の中で生きる人間の姿について、自分なりの意見を持つ。
3	●2場面から、かつの「私」とルントーの関係を探る。 ●表紙の仕方や挿入の展開や登場人物の設定など、2～5場面を読み、「変化したもの」に着目して、内容を読み取る。			□「私の故郷はもっというと良かった。」という主人公の思いとルントーの思い「出とつな」がかりを確認する。 □ワークシートに、事柄を対比させて整理しまとめる。 ・ヤンおばさんの過去と現在の様子 ・ルントーの過去と現在の様子	Ⅲ「表現する」 □構成や表現、表現の仕方について評価する。
4	●3場面から、「私」とルントーとの関係の場面を、ルントーの立場からラライトすることルントーの心情や立場に迫る。		◎	□私の目線から書かれている再会の場面を、ルントーの目線からラライトする。ルントーの様子を描写している場面から、ルントーの心情を探る。 □ラライトした文章を相互評価し、自分の考えを確かめ、深めることができるようにする。	Ⅳ「活用する」 □作品をひとつの契機として、社会の中で生きる人間について自分の意見を述べ、
5	●4場面から、「私」の考える「希望」や「新しい生活」について捉え、『故郷』が当時の人々に与えた効果や批評文として文章化する。			□6場面での人物の関係について確認し、「私」の考える「希望」や「新しい生活」について、文章の内容をもとに読み取る。 □作品の背景となる時代や社会を押しさながら、『故郷』の読み目は何かを考えて批評文として文章化する。	
6	○自分が今読んでいる本や好きな本が、どんな状況の人にオススメかを考えて、作品のもつ価値や意義を考えた。			○自分の読んでいる本に感動を広げて、その本がどんな状況の人に、「どんな読み目」があるかを文章化する。 ○書いたものをグループで意見交換し、自分の考えを深め、強さを広げられるようにする。	
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項		(1) イ		□慣用語・古字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感や響き、語義を豊かにする。	・本文に出てくる語について、知識を広げ、語感や響き語義を豊かにしている。
読書と情報活用に関する指導事項		『阿Q正伝』・『藤野先生』・『狂人日記』 鲁迅			・本や文章などを自ら読み進め、知識を広げ、自分の考えや作品理解を深める。 ○学校図書館の活用 ○市立図書館の本紹介

単元構想表

②ミニテストの実施

毎時間、授業の最初の数分間は漢字・現代仮名遣い・文法のミニテストを行っている。最低限の知識としてこれらの振り返りを行うことは、特に国語が苦手な生徒が国語を嫌いにならないためには大切なことである。

③全国学力・学習状況調査や国語に関するアンケートの分析

国語について、全国学力・学習状況調査の解答用紙をコピーし自校で採点・分析を実施している。特に誤答についての傾向や内容を分析している。分析結果については以下のように活用している。

- ワークシート作成において、調査結果から見られる課題について解決の手立てを取り入れた。今年度については、「本や文章などから必要な情報を読み取り、根拠を明確にして自分の考えを書く」設問について課題が見られたという分析に基づき、課題解決を意識したワークシートを作成した。
- 分析結果を校内で共有するとともに、全職員で研修を行った。
- 各教科ともほとんどが教員一人態勢のため、全学年の授業の中で、全国学力・学習状況調査の自校での分析結果を意識した授業づくりを行った。

6. 授業を参観して

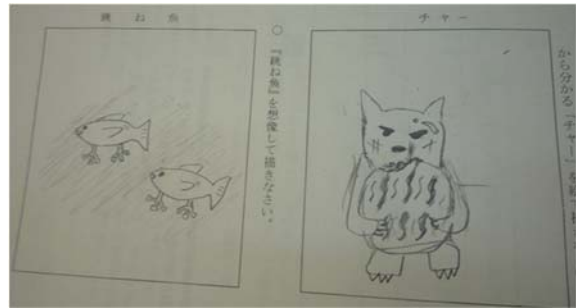
(1) 授業の概要（第3学年国語：故郷）

教材文『故郷』の全文を読んで感想を持ち、六つの場面に分ける。その場面ごとに「10文字以内」という条件を付けて小見出しを付ける。個人で考えたあと、グループになって意見交換を行う。全体で確認を行う際は、場面の想起を適宜行いながら進めていく。

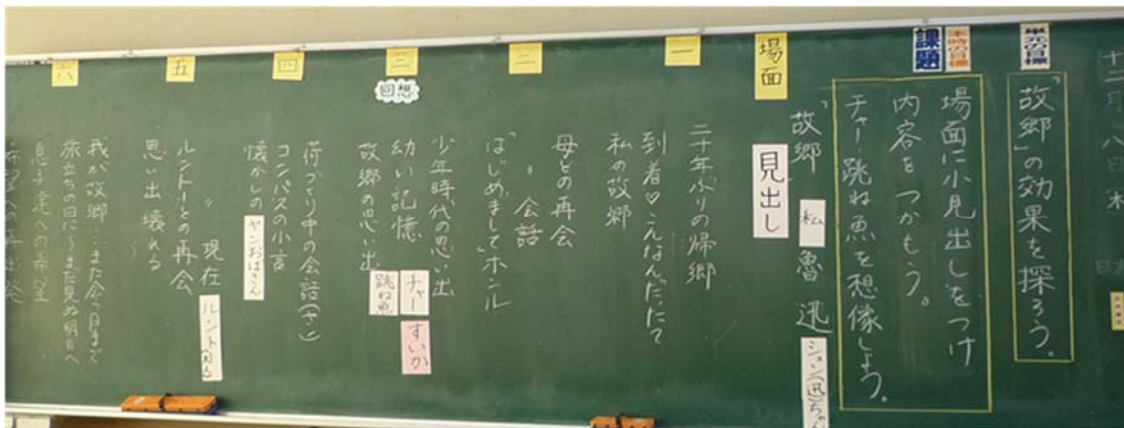
登場人物である「跳ね魚」と「チャー」について、それぞれ表現されている記述に線を引き、発表し合う。記述からのイメージを個々がつかみ、それを基に絵を描く。小見出しと絵から『故郷』全体のイメージを膨らませたところで、単元シート（評価）に本時の感想等を記入する。



教科書を見返しながら根拠を持って話し合う



イメージした「跳ね魚」と「チャー」



生徒の意見を中心とした板書 黒板を写すという指導はしない

(2) 生徒の様子

何よりも強く感じたのは、生徒が自分の思いを自由に述べることができる雰囲気である。その背景には、B教諭のどんな解答でも方向性を外さない範囲であれば許容するという姿勢があると考えられる。

生徒たちには唯一解としての答えを求める場面が極めて少ない。前述したようにB教諭の考える「楽しく」授業を進めていくなかで、自分の意見を

持つ大切さ、互いに認め合う大切さを学んできた生徒たちは、例えばグループ活動では、互いの意見に「いいね」と認め合い、グループの枠を越えて「なんて書いた？」と相手の意見に興味を持って話合いに取り組んでいた。

(3) 授業者の取組

生徒は「楽しく」授業に取り組んでいたが、授業者の動きからは、緻密に計算された意図を感じた。以下、授業者が国語の授業を通して手立てとして講じていることを紹介する。

①単元シートの活用

全ての単元について、課題、学習目標（身に付けたい国語の力）、自分の学習目標、自己評価、単元を振り返ってという項目ごとに生徒が学習に見通しを持ったり、振り返ることができたりするようになっている。また、授業者は定期的にチェックをして個々の成果や課題を洗い出すこともできる。

単元を振り返って		自分の目標					
6	5	4	3	2	1	時月	学習内容
批評文にまとめて提出する。	第六場面の言葉をとらえ、「故郷」の効果文として文章化する。	第五場面を読み、ルントの立場からリライトする。	第一―五場面までを読み内容をとらえる。	第一場面から故郷の様子を捉え、想像力でチャイロ・絵の輪を描く。	全文を読んで感想をもち、六つの場面を分ける。		学習を振り返って
最終目標：『故郷』の効果を探ろう。 ～読んだ人にどんな影響を与えるか？批評文を書く～							評価
							先生から
◎ PRONOUNS この物語の社会や人物関係も、「自分」と同じく合わせて考えることが出来るはず。これが、これから物語を読んでいく中で大切になります。 例えば、みずさんやみずは小説や興味がある本を読むとき、登場人物の心づかなくて読むのでしょ。うっ！こどもはそれが大切です。							

自己評価 ◎十分満足・○まずまず満足・△不満足

国語科単元シート 今年()組()番(名前) 『故郷』 魯迅(ロジン)

課題 作品が、読んだ人にどんな影響を与えるか、自分の意見をもち批評文を書く。

学習目標(身に付けたい国語の力)
 ① 長文である文章のあらすじを理解できる。
 ② 人間・社会・自然などについて考えて、自分の意見をもち、批評文が書ける。
 ③ 故郷の人々の様子と「わたし」の心境をとらえることができる。

自分の学習目標 「学習目標」をふまえて、自分が特にがんばろうとする目標(今まで自分でできなかったことやもっと伸ばしたいこと)を自分の言葉で書いてみよう。

単元シート

②いつでも振り返ることのできるワークシート

前述のとおり、国語ではノートは使用していない。毎時間ワークシートを用い、ファイルに積み重ねていき、いつでも(1学年時のものまで)振り返ることができるようになっている。生徒の習熟度には差があるので、ワークシートの中で、個々のレベルに合わせて取り組めるような工夫も

されている。

国語ワークシート③ 『故郷』書評 三年() 姓() 氏()

目録は、目に効く。風邪薬は、風邪に効く。ロキソニン[®]は、頭痛に効く。では、『故郷』は、当時の中国の人々に対して、どんな『効果』『効き目』があったのか。一〇〇文字以内で、批評文を書こう。

○ 批評文とは？

『故郷』とは、簡単に言えば、
『良いところ(長所)』と悪いところ(短所)を指摘して、自分の考えを付け加えた文章のことです。
だから、『故郷』で言うと、こんなふうに書けばOKです！

と書く点が優れており(長所であり)、逆に、
という点では、少しもの足りない。残念である。
全体的に暗いイメージがある。もう少し分かりやすいと良い。

最後に、私は、『故郷』で(.....)ということを手伝った。

何となく分かりましたか？

○ では、できる人は、自分の力で、難しい人は、となりの文例に合わせて書いてみよう。

ワークシート 批評文の書き方を示し、個々の技量に合わせて書けるようになっている。

③自分の意見を認め合う人間関係作りの構築

国語の授業を「楽しく」をモットーに行うB教諭。生徒に対して、1時間の授業の中でできるだけ全員を指名しどの意見も認める、否定をしないということを強く意識して生徒に関わっていることがよく伝わってきた。本時でも、登場人物の心情について様々な観点から意見が出されたが、これらの意見を教師が価値付けるのではなく、生徒たちが積極的に評価をして学習を進められるようにしていた。また、教師が内容を一つ一つ詳細に確認するのではなく、生徒と内容を確認し合いながら授業を進めていた。この教師と生徒の学習の一体感が意見を出しやすい雰囲気を作り、学力の向上にもつながっていくのだろうと感じた。

J 中学校

生徒のよさを認める指導を重視することで、
自己肯定感の向上をより促進させていると考えられる取組例

1. 学校の概要

(1) 学校紹介

学校種	中学校（昭和33年開校：2校統合により創立）		
校区内小学校	2校		
学級数	6学級	第1学年 1学級（34名）	第2学年 2学級（41名）
生徒数	130名	第3学年 2学級（53名）	特別支援学級 1学級（2名）
教職員数	22名	校長・教頭	各1名
		教諭	9名（うち養護教諭1名）
		講師	5名（国語、数学、英語、美術、家庭科各1名）
		事務職員、技能士、事務補、図書補、学力向上支援員、教育相談員	

【学校の特色】

農村地帯にあり、3世代同居率が全国的に見ても高いと思われる地域にある学校である。2つの小学校から本校に入学してくることとなるが、全校で130名であり、各学年、30人台～50人台で、1～2学級の編成である。

生徒の家庭の状況としては、祖父母が農業を営み、両親は農業を手伝いながら働きに出ている世帯が多い。家庭、地域は、学習面を含めて、学校に対して協力的で、勉強熱心な地域である。そのような地域の中で、生徒たちは小さい頃から、地域の人と触れ合いながら生まれ育ってきている。全般的に生徒は落ち着いており、精神的な部分での安定も見られ、以前から問題行動などは少ない。素直で明るく、努力を惜しまない姿もある一方で、幼少期から形成された友達関係の中で新しい環境や新たな関係への適応の困難さにつながったり、自他の考えや思いの理解や表出が苦手だったりするといった課題もある。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴

① 学校選定の際に用いた特徴

- 生徒質問紙項目「自分にはよいところがあると思う」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：62.7%（全国平均：27.5%）
- 生徒質問紙項目「数学の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけ・根拠を理解するようにしていますか」に対する「1. 当てはまる」の回答割合：56.9%（全国平均：32.4%）

②その他の注目すべき特徴

- 国語及び数学に関する以下の生徒質問紙項目について「1. 当てはまる」の回答割合が全国平均を大きく上回る。
 - ・国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている：43.1%（全国平均：23.1%）
 - ・数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える：54.9%（全国平均：35.6%）

【参考：基本データ】※（ ）内は全国平均

平均正答率				通塾率	就学援助率
国語A	国語B	数学A	数学B		
79.3%	72.3%	69.8%	49.5%	39.2%	5%未満
(76.0%)	(67.1%)	(62.8%)	(44.8%)	(60.8%)	

直近3カ年の各教科の正答率の状況は、次のとおりである。

全国平均と比して、国語Aは3～5%程度、国語Bは5%強高い値で安定している。数学A、数学Bともに、平成27年度調査では全国平均とほぼ同じ値であるが、平成26年度調査及び28年度調査では全国平均と比して5～10%程度高い値を示している。なお、平成19年度からの全国学力・学習状況調査の各年度の平均正答率の推移を見ても、概ね全国平均以上の値を示す結果を残しており、学力的には安定していると言える。

今回の訪問調査に際して、当該校の特筆すべき事項として、平成28年度調査の生徒質問紙における、質問番号6「自分には、よいところがあると思いますか」に対する回答、並びに質問番号79「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしていますか」に対する回答のうち、「当てはまる」と回答した生徒の割合が顕著な伸びを示したことが挙げられる。

それぞれの質問項目別に見ると、次のような状況が見られる。

① 質問番号6 「自分には、よいところがあると思いますか」

3カ年の推移を見ると、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」との肯定的な回答は、全国平均が70%弱であるのに対して、当該校は85%前後で安定している。このうち、「あてはまる」の回答に限ってみると、平成26年度調査及び平成27年度調査では全国平均をやや上回る程度であったが、平成28年度調査では、30%以上高い値を示している。

- ② 質問番号79 「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしていますか」

3力年の推移を見ると、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」との肯定的な回答は、全国平均が70%前後であるのに対して、平成26年度調査及び平成28年度調査においては全国平均と比してプラス5%超の値を示している。このうち、「当てはまる」の回答に限ってみると、平成26年度調査及び平成27年度調査では全国平均と概ね同様であったが、平成28年度調査では20%以上高い値を示している。

これに関連して、平成28年度調査の数学Bの記述式問題の正答率を見ると、「理由の説明」に係る問題のうち、B1(3)及びB2(2)においては、全国平均よりも15%前後高い正答率を示している。

2. 取組の背景

学習面、生徒指導の両側面ともに、学校として大きな課題はなく、比較的安定している学校と言える。学力の水準を維持する一方で、前述のような、この地域の児童生徒のよさ(素直で明るく、努力を惜しまないなど)と課題(人間関係の広がりや自他の考えの理解と表出など)を踏まえ、学習指導、生徒指導に地道に取り組んできている。

当該の学校の生徒たちは、幼少期からの人間関係の中で基本的には相互をよく理解しており、男女の別なく関わりが持てる。一方で、固定的な小グループでの関係が中心となり、グループ間でのトラブルがあったり全体での関わりの広がりが難しかったりといった課題が見られていた。これを踏まえて、小学校からの丁寧な指導を継続的に発展させ、特に生徒指導の面で、より認め合える相互関係を築くこと、小さな集団だけに固定化されない人間関係の広がりを持たせることに留意した指導を行う必要性を感じていた。

3. 学力の向上や学習状況の改善に寄与した取組

(1) 授業改善に係る研究の取組

学力の向上に係る側面としては、「確かな学力」を育てる研究を進めてきた。その研究をさらに発展させる形で、学区の小学校2校とともに教育委員会の委嘱を受け、小中学校の9年間の学び方の連続性と、その指導の中で児童生徒の学習面で「できるようになった姿」に着目し、学習面では特に「自分で考える」こと、その考えを「伝え合う」こと、さらにはそれらの活動を通して「学び合い、深め合う」ことを中心的な視点として研究に取り組み、授業改善を進めてきている。この中で、生徒の「できるようになった姿」へ

の着目は、小中9年間の中での目指す子供の姿の共有化を図るとともに、生徒の課題を踏まえつつ、生徒の成果と可能性を伸長することにつながる取組の一つと考えられる。

また、前述の教育委員会の委嘱研究を推進するにあたり中心的な役割を担った教員は、授業の中に常に思考・判断・表現の考え方を取り入れ、生徒にとって面白い授業、生徒が理解できる授業、知識によらない自分なりの思考・判断・表現を出させる授業を展開しているとのことである。そうした授業の中で、生徒は習熟の状況に関わらず「自分」を出すことができ、生徒同士がお互いを認め合える関係にもつながっているとのことである。教育委員会からの委嘱研究を進める中で、研究の推進的役割を担った教員の授業の設計や進め方、生徒への接し方などについても学校全体で共有することができ、それぞれの教員が授業づくりに生かすことができていると考えられる。

(2) 生徒自身の能動的な学習活動の重視

学習面の指導では、生徒自身のアウトプット（書く、話す）について、特に重視している。教員が一方向的に解説やレクチャーを行うのではなく、「個人で考えて書く」、「小グループで伝え合い、考え合う」、そして「全体への発表」といった様々なアウトプット（表現）の活動を中心として授業づくりを進めるように留意している。このような授業を成立させるために、(1)で記述したように、生徒自身が習熟の状況に関係なく自分を表現することができるよう、また個々の表現を相互に認め合える関係づくりを土台として、「面白い」、「分かる」、「できる」を実感できるように工夫している。さらに、「分かる」、「できる」を保証しながら、生徒が学習を肯定的に振り返ることができるようにし、次の学習に向かう意欲につながるように留意して指導している。

(3) 「理由や根拠を考える」、それをまとめて「説明する」活動の重視

(2)で記述したように、様々なアウトプット（表現）の場면을授業の中に組み込んでいるが、その際、答えや考えを表出させるだけではなく、その答えや考えに至った思考のプロセスや理由・根拠を考えること、またそれを説明することを求めるようにしている。そうした指導が、生徒の確かな学力の形成に必要であると考え、授業の中では、生徒個々の能力や特性に応じて、理由や根拠が理解できているか、明確になっているかなどを確かめながら指導を展開するようにし、特に学力下位層の生徒には可能な限り個別に関わり、丁寧に指導するように留意している。

(4) 「分かる」、「できる」を実感できる授業づくり

様々な学力層、様々な特性を持った生徒一人一人が、それぞれの力を発揮することができるように、小中合同でユニバーサルデザイン（UD）の研修会

を行ったり、分かりやすさと対話を念頭に ICT の効果的な活用に関する研修を行ったりしながら、授業改善、授業づくりの取組を展開してきている。

学校全体でのそうした取組みの中で、生徒たちは、学校に来ると楽しい授業、おもしろい授業があると感じており、それが授業への主体的な参加、能動的な参加にもつながっていると捉えている。

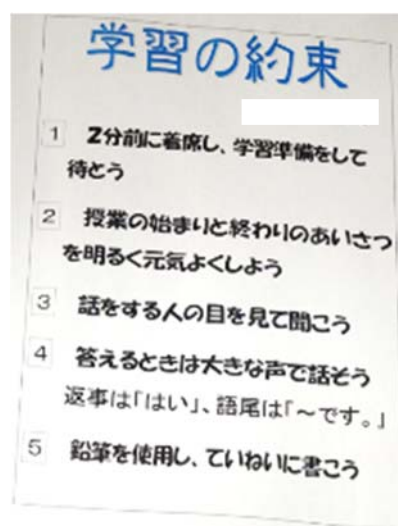
(5) 生徒指導の側面からの取組（特に、自己肯定感の育成について）

学校長の経営方針として、生徒指導の三機能「自己決定の場を与える」、「自己存在感を与える」、「共感的人間関係を形成する」を重視し、自尊感情、自己肯定感を大切にしたい指導を行っていくことが、各教員に示されている。

当該校は、平成28年度調査の生徒質問紙において、「自分には、よいところがあると思いますか」に対して「当てはまる」と回答した生徒が大きく増加したが、この成果の要因については、中学校の取組だけではなく、学区の小学校からの丁寧な指導が生きてきていると捉えている。小学校で丁寧な指導されてきたことを踏まえ、中学校においても学校全体で生徒のありのままの姿を受容し、課題を踏まえつつも生徒一人一人のよさを認める指導を徹底していることが、生徒の自己肯定感の醸成に寄与しているものと考えている。実際に、平成28年度調査の生徒質問紙における「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対する「当てはまる」との回答率が、全国平均に比して30%弱程度高い値を示しており、学校全体の取組が生徒自身にもしっかりと伝わっていると言える。その結果として、生徒質問紙における「自分には、よいところがあると思いますか」に対する「当てはまる」との回答率が、全国平均に比して30%以上の高い値を示したものと考えられる。

併せて、生徒が学習に落ち着いて取り組める態勢や学習規律の獲得なども、小学校での丁寧な指導が生きていていると考えており、小中連携を生かしながら進めてきた研究の中で、各教員が生徒との関係を大切に、学級経営、授業経営を組み立てていることで、小学校で培われてきたことを土台として、中学校でその成果が少しずつ現れてきているものと考えている。

また、年2回のQ-Uテストを行い、それをもとに個々の生徒をより望ま



学習規律を維持するための「学習の約束」

しい姿に育てていくための研修も行っている。その際に、単に結果を分析するだけではなく、その分析を具体的な指導に生かすために、生徒への接し方などについてもグループミーティングなどを通して、全体で共通理解を深め、実際の学級指導や教科指導につなげるようにしている。さらに、実際の学習指導、生徒指導においても、各教員が生徒と積極的にコミュニケーションを図っており、それによって生徒のよさと課題をよりの確に把握することに努め、生徒のよさを伸ばす指導に、また、よさを生かした課題の改善の指導に取り組んでいる。このことが、生徒との信頼関係を確かなものにし、教員からの指導を、生徒が受け止め生かしていくことにつながっているものと考えられる。

4. 授業を参観して

【第3学年 数学】

(1) 授業の概要

円周角と中心角の関係について、「角の大きさの求め方を、使った図形の性質と式で説明する」ことをねらいとして、角の大きさを求める問題を解いて友達に説明していく授業場面である。学力向上支援員とのTTによる指導であった。

(2) 生徒の様子

発言においては「間違ってもよい」という教室文化があり、のびのびとした発言ができる雰囲気の中で授業が進められた。問題を自身で解きながらも、分からないことや疑問に思ったことなどを、自然と周りの友達と共有して話し合える状況であった。先生が個別指導に回っている際は、席を離れて問題について話し合うなどの状況も見られた。解いた問題を説明する場面においても、積極的に聞きに回ったり、説明に回ったりするなどの姿が見られた。

(3) 授業者の取組

学力向上支援員とともに生徒一人一人をしっかりと見ながら、個別指導においては、生徒のできている部分を積極的に褒めるなど肯定的な評価をどんどん伝える様子が見られた。しかし、単に肯定的な評価を伝えるだけではなく、生徒の課題についてもきちんと伝えていた。例えば、「数学の力はあるが、図形の問題ではもう少し頑張るところがある」ということを生徒に対して伝え、生徒のよさを認めながら課題を伝えることで、課題の克服に向けての意欲を持たせるように留意している様子が見られた。また、授業の最後に、今

日の授業での生徒の取組について振り返り、取組自体に肯定的な評価を返して、授業を終えていた。学習指導については、授業で提示した問題が単に解けるだけでなく、使った性質や式を使って説明することを求めるなど、しっかりと解けた理由が分かるように仕向けていた。その際、当該の学習に関連する既習事項を提示し確認することで、生徒がどの性質を基に考えればよいのか、どの性質を基に説明すればよいのかを思考させるようにしていた。このような指導の手立ては、他の学校でも通常の手立てとして多く活用されているものと思われるが、当該の学校では右のようなボードに掲示し、教室前の多目的空間に一定期間（少なくとも当該の単元の学習期間）常設し、生徒が授業時間以外にも既習事項に触れられるようにし、学習内容の定着と活用を促すようにしていた。



角の性質、角に関わる図形の性質を示した掲示ボード

また、今回の授業では、各自が問題に取り組んだ後に、他グループの人たちに説明をする機会を設けていた。その際、教える人と教えられる人が固定化しないようにするため、説明を聞く側のグループには担当する問題の模範解答を渡して、それを基に相手の説明の適否を判断できるようにしていた。このことは、生徒間の関係性への配慮とともに、個々の生徒の学習機会の保証にもなっていると考えられる。解答と理由を説明する側にとっては、説明を考えること、他者に分かるように説明すること、聞き手からの適否の判断と解説を聞く機会が得られる。また、説明を聞く側にとっては、友達の説明を聞く、それを模範解答と照合して、その説明が適切かを判断する機会が設定される。生徒の能力（問題を解けたか否か）にかかわらず、一つの問題に対して幾重にも生徒が学ぶ機会を仕掛けていることで、それぞれの学びを高める工夫がなされている。



各自が取り組んだ問題と「説明」の際に用いた模範解答

(4) 学力向上との関連

日々の授業において、肯定的評価（上手な褒め方）をしていることが、生徒の自己肯定感を高め、誰にとっても安心できる授業の雰囲気醸成していると考えられる。角を求めるといった技能的な問題においても、しっかりと理由を求め、それを説明（表現）する機会を設けることで、確かな理解へとつなげている。こうした学習を展開する中で、生徒は「物事には理由が

ある」ということ、理由を説明することの有用性を実感しており、このことが平成28年度調査の生徒質問紙における「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしていますか」に対する肯定的回答の増加につながっていると考えられる。公式やきまりを単に覚えるだけではなく、それが成り立つ根拠や理由を併せて考える学習を重ねていくことは、生徒の数学的思考の育成や発展に大きく寄与するものと考えられる。

また、学力上位の生徒ばかりが説明役になるのではなく、学力や学習の状況にかかわらず、誰もが説明をし、説明を受けるという機会を設定することは、様々な状況の生徒がいる学級集団において、多くの生徒の学習意欲を維持、発展させるとともに、D層の減少にもつながるのではないかと考えられる。

なお、平成28年度調査の生徒質問紙における「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか」に対する「当てはまる」との回答も、全国平均に比しておよそ20%高い回答率を示している。

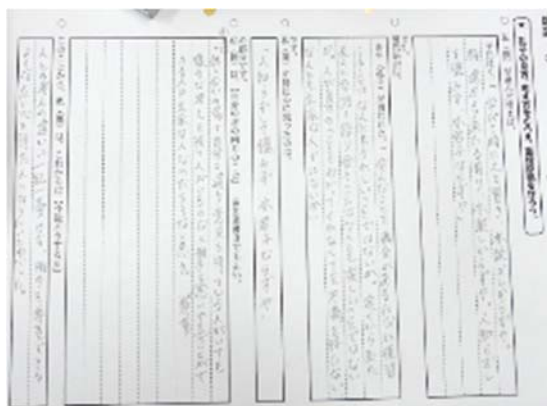
【第3学年 国語】

(1) 授業の概要

『論語』を読んで、それを基に、生徒同士で「面接練習を行い、考えを紹介し合うことで、『論語』に対する自分の考えを深める」ことをねらいとした授業場面である。

(2) 生徒の様子

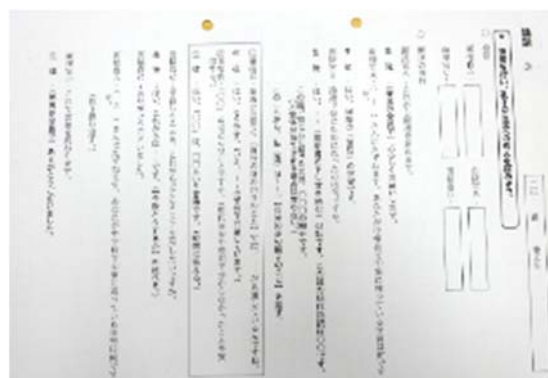
『論語』をペアになって音読する際には、他のペアが終わるまで、静かにして待つなど授業規律はしっかりと守られている。面接練習では、面接官と生徒に役割が分かれ、取り組んでいた。面接の基本的な形式は台本が示されており、生徒が回答する内容については前時までに学習し、各自がプリントにまとめていた。面接官役の生徒には、生徒の発言内容と『論語』の内容を関連付けて話すことが求められており、また面接を受ける側の生徒についても、その面接官役のコメントを受けて応答することが求められており、その点については思うように進められない生徒も見られた。



『論語』について、前時までに生徒各自がまとめたシート

(3) 授業者の取組

『論語』を教材として、面接(練習)という場面を位置づけ、相手の話を聞き、自分と異なる考えをメモしたり、言葉の意味を確認したりする中で、自然と『論語』に対する自分の考えが深められていくような工夫がなされていた。前時まで、音読や現代語訳、意味などの学習を行い、さらに『論語』の中で印象に残ったこと、それが自分の生活とどのように関連する



面接練習の台本

るか、そのことを今後どのように生かしていくかについて各自がまとめた。それを基に、面接(練習)の学習では、自分の考えを質問に応じて表現すること、面接官役の生徒には相手の応答の内容と『論語』の意味とを結び付けて、その共通点を見つけることが求められていた。授業の冒頭で、全体で『論語』を音読して読み方の確認をした後に、友達同士での相互の音読を取り入れていた。その後、本時で初めて行う面接練習にあたっては、基本の台本(面接原稿)を用意し、基本的な活動の流れを全体で確認し、生徒が取り組みやすいように工夫していた。面接官の役割について、チャレンジできる課題を設定するとともに、難しい場合にはもう一方の受け答えを準備し、生徒の個々の判断による活動も保証していた。グループごとの面接練習が始まると、教員は各グループを巡視して生徒の活動に対して、見守ったり肯定的な声を掛けたり、役割分担や応答に対する助言をしたりするなど、あくまで生徒の主体的な活動を重視しつつ必要な指導を行っていた。



振り返りシート

単元を通して学習ごとに授業への取組に対する自己評価と、学習による発見や疑問など記入する振り返りシートを作成し活用している。生徒が記入したシートには、簡単にではあるが、教員からの肯定的なコメントが記されている。

また、全体、ペア、グループ、個人、全体と活動の形態を変化させる授業構成をする中で、活動のメリハリをつけるとともに、生徒同士のやりとりを重視し、主体的な学習活動を展開できるように工夫していた。

(4) 学力向上との関連

数学の授業と同様に、生徒の活動に対して否定的な言葉を返さず、肯定的な言葉を返すことを基本としつつ、生徒自身に改善点も伝えている。生徒のよい面を教員自身が積極的に認めるとともに、生徒同士がお互いを認め合える関係の中で自分の思いや考えを安心して表現できる学級経営、授業づくりをしていることが、平成28年度調査の生徒質問調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対する肯定的回答の増加につながっていると考えられる。

また、自由に発言することが認められ、生徒が自分の思いや考えを表現することに安心感を持っている様子がうかがえる。このことから、平成28年度調査の生徒質問紙における「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか」に対する「当てはまる」との回答が、全国平均に比しておよそ20%高い回答率を示していることにつながっていると考えられる。

なお、平成28年度調査の生徒質問紙調査における「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか」に対する「当てはまる」との回答も、全国平均に比しておよそ25%高い回答率を示している。

5. 終わりに

当該の学校の取組は、生徒の課題を踏まえつつも、生徒のよさ、可能性に着目して、「生徒を認めること」を重視したものである。もちろん、単にほめる、認めるだけではなく、生徒の課題もきちんと伝えている。生徒自身も伝えられた課題を素直に受け止め、次に向かう姿勢を維持し、学習面や生活面、対人関係面などでの改善に向かっている。

この背景としては、この地域の特性もあると考えられるが、日頃から生徒とのコミュニケーションを密にとることによって、生徒との良好な関係を築いて生徒が自分を素直に表出することができるようにすること、また生徒の特性や考えていること、学習の理解や定着の状況等を把握するように努めていること、さらには自他を認め合える関係を構築するように留意して指導していることなどが考えられる。

また、生徒主体の学習活動や役割活動等を設定する中で失敗やつまずきもあるが、教員集団が「失敗やつまずきは改善、発展のチャンス」と捉えて、学校全体で指導に当たっているとのことであり、こうした先生方の姿を目の当たりにして、生徒自身も失敗やつまずきを過度にネガティブなものとは捉えず、自分（たち）が成長するチャンスと考えることができ、自分を肯定的に捉え、物事に意欲的に取り組んでいけるようになっているのではないかと考えられる。

全国学力・学習状況調査の教科に関する調査の平均正答率から考えると、学校として特に抜群の成果が見られているということではないが、当該校のように生徒自身が自己を肯定的に捉えられるように留意しながら、学習に対する主体的な活動を重視した取組は、学習に対する有用性を実感させるとともに、学習（思考すること、判断すること、表現すること）の意欲を育て、個々の生徒のよさと可能性を引き出し、将来の充足した生活へとつながっていくものと考えられる。

平成27, 28年度プロジェクト研究

全国学力・学習状況調査の結果の二次分析に関する研究

研究組織（所属等は平成29年3月現在）

研究代表者

高口 努 国立教育政策研究所教育課程研究センター長
（平成27年4月30日まで）
梅澤 敦 国立教育政策研究所教育課程研究センター長
（平成27年5月1日より）

所内研究分担者

佐藤 弘毅 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部長
（平成29年2月10日まで）
加藤 弘樹 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部長
（平成29年2月10日より）
西川さやか 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査官
水戸部修治 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
黒田 諭 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査官
杉本 直美 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
大滝 一登 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
小松 信哉 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査官
笠井 健一 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
新井 仁 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査官
（平成28年3月31日まで）
佐藤 寿仁 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査官
（平成28年4月1日から）
水谷 尚人 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
長尾 篤志 文部科学省初等中等教育局視学官、国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

所外研究分担者（五十音順）

磯部 年晃 福岡教育大学教育総合研究所准教授
井上 敦 政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策研究センター専門職
樺山 敏郎 大妻女子大学家政学部児童学科准教授
齊藤 一弥 横浜市立六浦南小学校長
田上 富男 栃木県真岡市教育委員会教育長
田中 博之 早稲田大学教職大学院教授
田中 隆一 東京大学社会科学研究所准教授
土屋 隆裕 大学共同利用機関法人・情報システム研究機構・統計数理研究所教授
布川 和彦 上越教育大学教授
益子 典文 岐阜大学総合情報メディアセンター教授
三浦登志一 山形大学大学院教育実践研究科教授
宮城 洋之 東京都三鷹市立第三中学校長
本橋 幸康 埼玉大学教育学部准教授

フェロー（平成27年5月21日より）

高口 努 独立行政法人教員研修センター理事

オブザーバー

山下 恭範 文部科学省研究開発局原子力損害賠償対策室次長

事務局担当（所内研究分担者）

銀島 文 国立教育政策研究所教育課程研究センター総合研究官

佐藤 有正 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査課長
（平成27年7月まで）

小久保智史 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査課長
（平成27年8月より）

間嶋 哲 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査課分析係長

多田 尚平 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部学力調査課専門職
（平成28年4月より）

<本事例集の作成に携わった者（職名等は平成29年3月当時）>

国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部

笠原 丈史 学力調査課 調査係長

瀧山 聡美 学力調査課 専門職

淀川 雅夫 研究開発課 指導係長

池田 森太郎 研究開発課 専門職

岩切 陽平 研究開発課 専門職

牛山 晴登 研究開発課 専門職

歌川 真一郎 研究開発課 教育課程調査官

鴨志田 新一 研究開発課 教育課程調査官

中里 勝也 研究開発課 教育課程調査官

鶴田 智樹 研究開発課 教育課程調査官

<これまでに本事例集の作成に携わった者（職名等は当時）>

国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部

寺田 政輝 研究開発課 教育課程調査官

臼井 基之 学力調査課 分析係長

小倉 弘一 学力調査課 専門職

伊倉 剛 研究開発課 指導係長

